
ストライクウィッチーズ 私、恋しちゃってます

夢幻遊戲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ストライクウィッチーズ 私、恋しちゃつてます

【NNコード】

N1232P

【作者名】

夢幻遊戯

【あらすじ】

19歳の普通…ではない大学生はある日の夜、燃え盛る街で小さな女の子を助けるという、不可思議な夢を見た。そして夢から覚めた時、そこには自分が知る世界ではなく、違った世界が広がっていた。そう、ストライクウィッチーズの世界へと来ていたのだった。

キャラクター設定その一（前書き）

はじめまして、私今回このサイトにて小説を執筆させて頂くことになりました…夢幻遊戯と申します。

このサイトにある小説を読ませて頂いて、私も執筆してみたい、と執筆衝動に駆られたのが切っ掛けです。

何分初挑戦となる執筆、駄文ではあると思いますが見て下さり楽しんで頂ければこれ幸いです。

最後に一つ、お願いがあります。感想についてなのですが…あまり強い言葉は書かないで下さい（焦）。

何分作者夢幻遊戯の心は硝子で出来てて脆いので…いやマジで（真）。

長々とスマセソ、それではどうぞ…お楽しみください

キャラクター設定その1

名前：儀國 雅史

性別：男性

年齢：19

身長／体重：177cm／67kg

特技：料理

【詳細】

19歳の青年、とある過去の出来事により普通の人間として逸脱し、“魔術師”となる。

現在は大学生として（とりあえず）普通の生活をしている。

普段はどこかキャラキャラとした態度を取っているが、困っている人が居たら相手が何者であろうと必ず助ける。仲間と認めた相手を絶対に見捨てるようなことはしない優しさ、そして周囲の人間を惹くカリスマの持ち主である。

一度戦闘となれば死神の如き無慈悲さを持つて相手を殲滅する。

キャラクター設定その1（後書き）

今作主人公のデータです。物語が進むにつれて追加していきます。

Act 1：邂逅「壹」（前書き）

初本編投稿です。まだサイトの扱い方に不慣れですので、投稿と修正を繰り返すと思いますが…よろしくお願いします。

Act 1・邂逅「壱」

一一〇一〇年…八月 初旬、季節は言つまでもなく真夏。
去年を上回る猛暑続き、ニュースでは夏バテ予防の料理の紹介や、
熱中症に対し気を付けるようにと…、そんな内容ばかりが流れている
気がする。

今より昔、電気やガス… 今の文明がなかつた頃、即ち自分達の「先祖様はどうやってこの夏を乗り切つっていたのだろうか。
そんな事をふと思ひながら、過去の記憶を呼び戻していた。

あれは今から四年ほど前だつたか…。あの時は確か、今日の様に猛暑の夏とは対極の寒い真冬だつた。

雪が毎日絶えず降り注ぎ、街はクリスマス色鮮やかに飾られ、ミニスカートのサンタ服を着た可愛い女の子が頑張つてケーキを販売している… そんな冬だつた。

そんな冬のある日、非日常への誘いが自分の元に来た。

「…………で、だけど…………」

怪物、魔法、未知の物質…。人間が作り出し、現代となつた今でも

衰えを見せない架空の存在達。

実際にそんな物はこの世には存在しない、 そう思つていた時期が俺にもあつた。

あんな物を見せられるまでは…。

「おい雅史！ 聞いてるのかつて…」

「……え？」

俺を呼ぶ声に、 我へと帰る。 四人の青年がおいおいと、 呆れた様子でこっちを見ている。

… そりだ、 すっかり忘れていた。 今は会議中だつた。

「おいおい夏バテか？ しつかりしてくれよ？」

「あ、 ああ……『ゴメン』」

とりあえず謝り気持ちを切り替える。 今は会議の方に集中集中と…。

「それでだ、今度のゲームだけど…ストライクウェイツチーズを題材にして何か考えようと思うんだ」

一人がそう口にした。ストライクウェイツチーズ、通称“パンツじやないから恥ずかしくないもん”。または“穿きません、勝つまでは”。

各国の英雄たちをモデルとし、ネウロイという謎の存在とウェイツチと呼ばれる少女達が闘う一次作品。

主に女性キャラが活躍するアニメであり、男達は殆ど出ない上に活躍もあまりない。

そんな作品でいつたいどんなゲームを作るのか、それが今各々与えられた課題だ。

「俺は恋愛ゲーで男主人公がいいな」

一人が意見を述べた。ストライクウェイツチーズは女性キャラが多いからそれもアリと言えばアリだろう。

だが、男主人公という点で問題が幾つか湧き出てくる。

「でもさ、それかなりキツくないか?」

「かなり難しいだろ？な」

他の面子も難しいと発言。それもそうだら、ミーナは魔女の魔法力を弱めない為に男性との接触を固く禁じている。必要以上の会話や「ミーナニケーションも勿論禁止。

俺だったらそんな生活耐えられないけど…。入って即刻脱退しかねない。そんな設定が在るのに男主角を出してもどうやって恋愛に結びつけるのか…。

それにキャラ自体が皆男に眼中なし、って感じもあるし…。

まあハツキリ言つと…

…ムリダナ（・×・）。

「ムリダナするなよー。」

「じゃあシユーティングは？やつぱりストライクウィッチーズだし、シンプルにシユーティングゲームがいいと思つんだけど」

確かに、それは俺も賛成した。シンプルなゲームが一番いいと思つ。

「うううだな……それもいいかもな」

うんうんと頷く一同。ただ一人、首を縦に振る事はなかつた。そう、恋愛ゲームにしたいと言つた奴だ。

首を横に振るい、何やら鞄を漁り出す。そして何かを取り出した。

取り出したのは一冊の本、表紙には「ストライクウィッチーズ
ドキッ！私恋します」と書かれてあつた。

まさかとは思うが……それは台本か？

「俺、徹夜でシナリオとかイベント考へてきたんだよ！一回読んで
みてくれ！！」

そう言つて俺を含めて他のメンバーに台本を渡す。かなりのページ
がある、100ページぐらいはあるんじゃないだろうか。
それにしても、よくこれだけ書き込めたものだ。その情熱には感服
するが、もつと違う方面で生かせないないのか？

「ま、まあ分かったよ……。じゃあ恋愛ゲーの方向もとりあえず保留
で。それじゃあ他に意見は……」

とつあえず、一段落話し合ひ、今日は解散することになった。明日

まだ集りどんなゲームにするのかを話し合ひ。

そして、今日中に渡されてしまつた恋愛ゲームのシナリオ本を読破しなければならないといつ、課題を与えられてしまった。

憂鬱ではあるが、仕方ない。今日中に何とか読みきるとしよう。分厚いシナリオ本を鞄の中に押し込み、バイクに跨ると家を出指して帰路を走つた。

深夜零時過ぎ、机にある照明の灯りで薄暗く照らされた部屋。机に向つて手渡されたシナリオ本に眼を通していく。

読み始めたのは午後十時過ぎ頃、一時間近く経過しているがまだ半分にも到達しない。

細かく書かれた内容と解説、そしてじつに感想も添えろと赤字で書かれてあつた。これならもつと早く読んでおくべきだったとひたすら後悔。

とりあえず今分かつてゐることを纏めると

、

1・男主人公で役割は整備兵

2・人には言えない過去を持つていてる。

3・なんやかんやで皆にバレる。

4・なんやかんやドラマラブハーレム展開に。

とこいつことまで。後は全然頭の中に入つていない。

どうやつたら恋愛フラグが成り立つのか、結ばれるのか細かく書いてあつた…気がする。兎に角文章が多くと細かすぎで憶えられない。

他の皆は無事読み終えたのだろうか…。多分俺と同じ、頭に入つていなかう。

「あ～…頭マジで痛い」

流石にこれ以上は読めない、開けていたシナリオ本を閉じベッドの上に寝転がる。

もうこれ以上細かい字を見たくない、感想を書けとか書かれてあつたがそんなもの書く気すら起きない。

明日の会議では読みきれなかつたと報告するしかない。

今日はもう休みたい…。

ベッドの上に寝転がった途端、急激に睡魔が襲つてくる。シナリオ本と睨めっこしていたのが予想以上に身体を疲れさせていたようだ。

寝る前にクーラーのタイマーをしないと…、そう脳では思つていても身体は言つ事を聞かない。ダメだとは分かりつつも、そのまま睡魔に身を任せ眠りへと就いた。

不思議な夢を見た。

何処か見知らぬ場所、崩壊した建物、紅蓮の炎に包まれる何処かの街。空は赤き炎により赤く輝いている。

周囲には破壊された戦車、血を流し亡き者となつた兵士達やこの町の住民であろう人々の骸。聞こえてくるは炎が激しく燃え盛る音だけ。

瞬時に理解する、ここは…何処かの戦場なのだと。

まさに地獄絵図だ…。多くの人が死に、そして最後は跡形もなく無くなる。

こんな夢を見るのは、やはりあっち側での影響だろ？。

それにしてもどうこうとか、夢だと呟つに感覚がとてつもなくリアルだ。

足に伝わる地面を踏み締める感触、焼け付くような炎の熱気、全てがリアル過ぎる。

と、一人の少女が視界に入った。小さな女の子だ、年齢は十にも満たない幼い少女。その顔は悲しみに溢れていた。

泣きながら、ゆっくりと此方にやってくる少女。ふと、少女が顔を上げる。

少女と眼が合づ、その顔は悲しみに溢れていた。

この子は一体誰だ？この夢は…この戦場はいったい何処なんだ？

そんな疑問を抱いている時、何かが上空から落ちてくるのを感じた。

上を見上げる。戦火で赤く輝く夜空、その夜空から地上へと落ちてくる白い物体、仄かに発光する巨大なソレは雨の如く炎に包まれたこの地上へと落ちてくる。

彼方此方で大きな落下音が鳴り、砂煙が舞い上がり、地響きを発生させる。

その物体の一つが少女と自分との真上に落ちてきた。

「ちいっ
！」

すぐに身体が反応し動く。あの白い物体が何なのか、それは後回しだ。いずれにせよ、このままでは一人共押し潰される。

「マジックコード
魔力回路、開放」

意識を集中させる。人間の中にあるもう一つの神経、魔力回路。別にこれは不思議なことではない、人間…動物にだつて魔力回路はあり、魔力を持つている。

ただ深く眠っているのを起こさせたか起こせてないか、それだけの話。

「脚部への強化、開始

」

魔力回路に魔力を巡らせる。

あの巨大な白い物体を碎くのは危険だ、碎けば更に細かな破片となって降り注ぎ負傷するリスクを高める。小さなパチンコ玉とて高い所から落とせば、その威力は凄まじいものとなる。

尤も、それをするだけの時間がなさすぎるが。

ならばどうするか。簡単な話、ここから離脱すればいい。

「掴まれ

！」

少女を抱き抱え、その場から離脱する。僅かに遅れて、そこに巨大な白い物体が落下した。

間一髪、後少しでも遅れていたら地面に挟まれサンドイッチが出来上がるところだった。

が、安心はしてられない。空からは白い物体が振り続いている。

兎に角、この街からあの白い物体が降り注がない場所まで逃げる、それ以外に方法がない。

「はあ……はあ……っ」

なんとか白い大きな物体の雨の影響を受けない場所まで逃げることが出来た。乱れた呼吸を整えていた時、少女が小さく口を開く。

「あ……あの……」

「……どうした?」

「助けてくれて、ありがと!」

「ツコリと微笑む少女。先程の悲しみはもう消え去っていた。

「気にしなくていいよ」

少女の頭を撫でる。と、意識が急速に薄れてきた。

ああ、夢から覚めるのか…。少女が何か叫んでいるよつこも聞こえ
るが、どうやら現実世界へと帰らなければならぬ。

「一度とこんな夢を見たくない…見たくないが、この子とはもう一度
逢いたい、そう思った時意識は完全に闇の中へと落ちていった。

Act 1：邂逅「壹」（後書き）

初投稿でした。駄文ではあります……最後まで責任を持って頑張つ
ていきます。

Act 1・邂逅「弐」

「ツ

」

ふと眼を覚ます。そして開いた視界に飛び込んできたのは見知らぬ世界。

「エリは……」

ベッドから跳ね起き、辺りを見回す。

レンガ造りの壁や天井、今自分が横になっていたベッド以外何もない殺風景な部屋。

開いた窓から吹ぐ、緩やかな風。その風に吹かれ靡く白のレース。その窓にゆっくりと近付く。と、その窓の向こうの世界..全く知らない世界が広がっていた。

「これは…」

「お、ようやく起きたかコイツ。遅いぞ新人」

誰かが部屋の中に入つてくる。黒い軍服に黒の半ズボン、黒い帽子と…黒ずくめの格好をした男が近付いて来る。

「お前だろ？ 昨日扶桑からこいつちに配属されていつ整備兵は」

「…何？ 扶桑？ 整備兵？」

「何つて…寝惚けているのか？」

まあ長旅で疲れているのは分かるが、今日からお前もここの部隊の正式なメンバーだ。

氣を引き締める、儀國」

「おいおい、アンタわざから何を… つーか何で」

「いいからー、ミーナ中佐がお前を浮んでいるんだ、早く行へやー！」

「…ミーナ…中佐？」

“基地”内を安藤といつ先輩整備士に案内されながら、ミーナの

元へと向つ。

「間違いない… これは、ストライクウィッチャーズの基地だ」

どうも自分はとんでもない現象に巻き込まれているらしい。何の因果か、俺は今あのストライクウィッチャーズ基地にいる。

第一期の方のあの基地。地下に古代ウィッチの遺跡があつたりするあの…。

どうしてこんな所にいるのか、それは全く分からぬ。
夢かと思い古典的ではあるが頬を抓つた、殴つてみたが痛みはハッキリとある。だからこれは夢じやない。

「お前、何で自分の頬殴つてるんだ?」

「いや、虫が引っ付いたからグーパンで仕留めただけ」

「グーパン?」

「グーでパンチつて」と。知らない?」

ここに来る前俺は何をしていたか…。ストライクウィッチーズを題材にした恋愛ゲーのシナリオ本を読んでいて…それで途中で諦めて寝た。

それで嫌にリアルで変な夢を見て、そこで少女を助けた。
そして夢から覚めると、意識が急速に薄れていって

「今に至る…か」

それにして、まさか自分がストライクウィッチーズの世界にトリップしてしまったとは…。

世界といつのは現実と言つ名の顔と、幻想と言つ名の顔を持つ。
それはあの時、世界魔術協会に初めて入門した時に学んだ。けれども一次作品の世界が実在するとは…、これは新たな発見である。

もし今この場に居るのが俺ではなく、アイツだつたならばメチャクチャ喜んでいただろう。

何はともあれ、俺はストライクウィッチーズの世界いる。そしてこの世界での俺は新しくこの基地に配属された新米整備兵。よつによつて整備兵か…まあ機械弄るのは嫌いではない。

それにここはウイッチーズ基地だ、戦場へと赴くのはウイッチ達。自分が戦線へ出る必要はない。

何はともあれ、この世界で俺、儀國 雅史といつ人間は存在しない。そんな俺の衣食住はここだけ、ここを追い出されたら終わりだ。暫くは新米整備兵としてこの基地でやつしていくしかない。

理由はどうであれ来れたのならば、帰れる方法もある筈。それを見つけ出すまでは…。

「まじり、ボサッとしてないで早く歩け」

「へ～い、了解ですよ」と

「お前…少し口が悪いぞ」

「それはスイマセン」

「……それでも」

先程から感じる身体への違和感。何故かいつもと違つて動きづらい感じがする。ストライクウェイツチーズの世界にいる為か、身体が重くすら感じる。

嫌な予感がしつつも、魔力を通し身体の異常を調べていく。

身体機能・正常… 但し性能は120%から70%に低下。

魔力回路・エラー。87%回路に異常発生。

「CODE: SATAN 煉獄の赤」… 使用可能。但しエラーにより制限あり。

- ・ランク A+++ランクからDランクに低下
- ・消費魔力量増大

「CODE: BLUE 終焉の蒼」… 術式工程時にエラー発生、よつて使用不可。

「CODE: EATER 暴蝕の黒」… 上記と同じくエラーにより使用不可能。

「CODE: SAWA 剣極の調」… 使用可能。エラーにより制限あり。

- ・剣の製作可能 製作時間延長及び現界時間短縮
- ・ランク AランクからDランクに低下。
- ・製作した剣による掃射可能 「ルーン」の付加可能
- ・「ルーン」 使用時、通常製作時間より更に延長。

・強化… 使用可能。但し効果は15秒、再度使用時には一分間の集中が必要。

・ルーン魔術… 使用可能。

「なんじやこりや… なんじやこりや… なんじやこりや…?」

「おい、さつきから何一人で叫んでるんだ！？」

「いや、何でもないッス」

エラーだらけ、最悪としか言いようが無い今の俺の状態。本来の力が完璧に出せない上に、使用できる魔術もかなり限られてしまっている。

「CODE:BLUE終焉の蒼」と「CODE:SATAN煉獄の赤」が使用できないもはかなりの痛手だ。

何とか通常の「CODE:BLACK暴蝕の黒」が使用出来るが…まさかランクがロランクまでガタ落ちしているとは。

これでは火炎瓶程度の炎しか発現することしか出来ない。

これが人間相手ならまだしも、ネウロイ相手に通用するかどうか…。傷口を焼き、再生能力を封じることぐらいは出来そうな気はする。

「CODE:MANA剣極の調」もエラーだらけ。

ランクダウンに加えて製作時間の延長と現界させておける持続時間の短縮。戦闘得意とする魔術師にとつては致命傷だ。

「おい着いたぞ、『ココだ』

安藤の声で我に帰る。どうやら知らぬ間に着いていたらしい。三回の軽いノックの後、部屋の中から「どうぞ」、と聞いた事のある女性の声がする。

「くれぐれも、失礼のないようにな」

「分かつてますよ 失礼しまーす」

ドアを開け中へ、そしてこの基地の隊長であり、一次作品ストライクウィットチーズの登場人物が一人、ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ中佐との邂逅を果たした。

そしてその隣、白い軍服の下にスクール水着を着用した眼帯ウイツチ、坂本 美緒の姿もあった。

「貴方が昨日から配属された新しい整備士ね？私はミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ中佐よ。

右にいるのは坂本 美緒少佐。貴方と同じ扶桑皇国の出身よ」

「坂本 美緒少佐だ。儀國 雅史と言つたな、これからよろしく頼

む

「えつと…はい、」シリウス

とつあえず頭を下げる。本当なら頭なんて下げたくないが、役割が役割だ。ここには我慢。

尤も、俺が頭を下げる時は大切なヤツ等に関する時だけだがな。

「それじゃあ、最初の内は慣れるのに精一杯だらうけど、頑張つてね」

「は、はい。それじゃあ失礼します」

静かに頭を下げ、踵を返し部屋を後に

「ああ、少し…待つてくれるかしら」

ドアノブに手を掛けようとして、ミーナに呼び止められる。

「…何ですか？」

「一旦」ドアから離れて、再びミーナに向き直る。真剣な表情で、少し
考える様な仕草を取つた後、静かに口を開いた。

「貴方… カールスラントに行つたことは?」

「…いや、ないんですけど」

「… そり。『めんなさい、引き止めて』

「いえ……」

改めてドアへと向きドアノブに手を伸ばす。扉を開け、出る前に一
礼した後閉める　　その扉に背を預けながら大きく溜息を吐い
た。

「ヤバい…」れメチャクチャしんじいぞ

これから自分がしていく軍隊生活。最初の内は慣れるのに大変だと
ミーナも言つていたが… 一生を費やしても慣れそうにない。

「話は終わったか? それじゃあさつと仕事に行くぞ新米」

「…く～い」

「…ちやんと返事しろ」

「はいはい」

「はい、は一回でいい」

安藤に連れられながら兵舎へと再び向づ。果たして、俺はこれからどうなつてしまつのか…。不安で仕方なかつた。

その日の夜、人気のない森の中で実験を行つていた。

「ソードサマナー「剣極の調」起動…「剣」の製作、工程開始

」

3分後、右手に剣が現れる。

鍊金術という魔術力「テゴリー」がある。鍊金術は某マンガでもお馴染み、等価交換を以つて物を成す。しかし自分の場合は鍊金術ではない。

自分の想像した物を具現化する“鍊想術”と呼ばれる上級魔術の一つ。

魔力という対価を支払うことで、自分が想像した物を作り出すことが出来る。そして自分が想像によつて作りだせるのは「剣」というカテゴリー。

他の物は一切創造することが出来ない。あくまで「剣」のみを想像によつて創造することが出来る。

「剣」とはじつや「相性」がいいらしい。

確かに、ゲームでも魔法メインで戦う魔法使いよりも、剣等の武器で戦う戦士の方が好きだ。魔法メインで闘うのは性に合わない。

どれも俺が想像し製作したオリジナル。無銘の武器ではあるが、それらの一つ一つは神話時代の聖剣だろうと魔剣であろうと避けは取らない…つもりだ。

しかし万能ではない。あくまで自分が想像するものを具現化させる

のであり、元よりある物を作るのに特化したものではない。

マンガやゲームに登場したような物も創造出来ると言えば出来る。

だが、そう言つた類の物はみな対価とする魔力も通常の消費よりも増大し、製作時間が倍掛かる上に現界させておける時間もごく僅かとなつてしまつ。

言つてしまえば一回きりの使い捨て。一発撃てばそれでおしまい。燃費も悪いし使い勝手も悪い。

それに神靈レベル的なものも作り出せない。

例えるのならば神様を殺せる剣とか、世界を切り裂く剣とか。それ等は規格外とされ創造することが出来ない。

あくまで普通の「剣」を生み出すことが出来る、それが俺の鍊想術であり、鍊想術の本質。

魔術師の中には想像によつて創造するぐらいならば、初めから良い物を所持するという輩も少なくはない。

確かに、持ち運びという点ではいいかもしないが、実用性を考えると元から所持していた方がいいかもしない。

それを補う為にルーン魔術であったり、強化魔術があつたりするのだが。考え方は人それぞれである。

協会に在籍していた時に「剣極の調」^{ソードサマナー}と名付けられた。

毎度のことながら協会にしてはいい名前を付けてくれたと思うし、何よりこの名は気に入っている。

しかし今はエラーだらけの状態。製作し、一振りを具現化するまでの時間に3分も費やす。

本調子ならば一瞬にして1000を超える剣を生み出すことが出来たと言うのに……。

現在、エラーにより100本程度しか製作出来ない。十分の一程度の力しか出せないとは……。後メチャクチャ疲れる。

そして、創造した剣を現界させておける持続時間。

「つと……ジャスト1分だな」

右手から剣が消えたのと同時に、左手に持っていた時計を見て確認

する。

持続させておける時間は1分丁度。1分すると消えてしまつ、その度に製作しなければならないとは……。敵との激しい打ち合いになつた時、近距離での戦闘だと長期戦は圧倒的に不利になる。

そして剣の掃射……、空中に剣を展開し一斉に標的に向けて撃ち放つ。放たれた剣は木々に突き刺さり、たまに幹を打ち砕く。

やはり、ランクが低下している分威力も落ちてしまつていて。

「ハア……憂鬱だな」

近くの木に凭れ掛かり、夜空を見上げる。とても澄んだ夜空、数多の星が煌き、神々しい輝きを地上へと放つ満月が浮んでいる。さながら、それはまるで宝石箱のよう。

「

」

ふと、あの世界にいるアーツ等の顔が浮かび上がつた。

今頃どうしているだろうか、一人だけサボッたと言われているだろうか…。

「…あいつ等、元気にしてるかな…」

誰に聞くわけでもなく、呴く様に呴つた後夜空を暫く眺めていた。

Act 1・邂逅「弐」（後書き）

ん~… 小説執筆するところはとても難しいですね。

後魔術については、もう私の想像と妄想による完全オリジナルです。矛盾が生じたりする可能性もありますが… 笑って許して下さい。

追伸：11月26日、能力名を一部変更しました。やつぱり「うちの方」がカツコイイかなって…。スマセン。

Act 2・襲撃「壱」（前書き）

初戦闘描写です。自信ないですが、どうぞ。

Act 2・襲撃「壱」

ストライクウェイツチーズ基地で始まる第三の新たな人生。魔術師兼大学生である儀國 雅史は整備兵として生きていくことになった。

「つたぐ…この服なんとかなんないのか?」

ダサい作業服にケチを付けながらストライカーユニットの整備に当たる。とりあえず安藤の指導の下、ストライカーユニットのメンテナンス作業を学んだ。

だが不思議なことに、ストライカーユニットが分かる。

外観ではなく中身の話。初めて見る構造、パーツ。

なのにもまるで長年も整備し続けてきたかのような感覚がある。

そして安藤の教えもなしにパーツを組み直し、メンテナンスが終わる。

安藤も新米とは思えない程の熟練された動きだと驚いていたが、俺自身も驚きだ。

いつたいどうなつてる？初めて見るストライカーゴニットを、何の説明もなしに整備出来る、こんな事つてあるのか？

尤も、有り難い話ではある。ストライカーゴニットの整備なんて出来ない、なんて言つたら怪しまれる。

「はあ～…やつと終わつた」

初めてで初めてでないストライカーゴニットの整備を終えて時刻は昼過ぎ。そろそろ腹も減つてきた頃、食堂に我先へと向つ。

「こは日本…扶桑皇国ではないが食卓に並んでいるのは和風。まず日本人にとって絶対に欠かせない白い炊き立てのご飯、豆腐とネギの味噌汁、焼き魚、お浸し、そして…納豆。

なんて贅沢、なんて豪華なお昼ご飯…。どんな料理が出るのかと思っていたが自分が大好きな日本のご飯。米の軟らかさも自分好み、味噌汁も大好きな赤だし。

無論、箸は進む。空腹の状態でいるから尚進む。

お代わりも当然、一杯だろうと三杯だろうと、胃袋の中に入る限りはするつもりだ。

他の席に着いている整備士達は納豆が出ていることに嫌そうな声を出している。

まあ外人さんだからしじうがないとは思つが：ただ一つだけ言つと納豆舐めるな。つーか喰わないんなら俺にくれ。納豆は好物だ。

そう言つた途端に次々と俺のも食つてくれと納豆が集つてくる。

こんなに嬉しい事は無い、有難く頂くとしよう。

「どうだ？」この基地は、少しは慣れたか？

隣の空席に安藤が腰を下ろす。

「ええ、大分は」

「どうか、それならいい。しかし、アレだな。新人にも関わらず長年もこの整備士を務めてきたかのように見えたぞ」

納豆をかき混ぜながら安藤が言つ。

「ガキの頃から機械とか弄るの好きだったからなあ、まあ慣れてるからツスよ」

刹那、基地内に警報が鳴り響く。警報が鳴り響いた途端、楽しく話し合い笑みを浮かべていた整備士の表情は真剣なものへと変わる。

どうやら敵さんのお出ましらしい。食事中だというのに襲つてくるとは何とも礼儀知らず。

折角沢山貰つた納豆で納豆丼にしようとしていたのに…。

「雅史！ハンガーへ急ぐぞ！」

「了解～」

安藤と共にハンガーへ急いだ。

ハンガーへ行く。ストライカーコニット出撃前の最中チェックを行う。と、同時に我が隊のウイット様がやってきた。

ゲルトルート・バルクホルン大尉、エーリカ・ハルトマン中尉、フランチエスカ・ルツキー少尉。シャーロット・E・イエーガー大尉、坂本 美緒少佐、の計五人が出撃準備に入る。

遅れて残りのメンバー。

サーニャ・V・リトヴァク中尉、ペリー・ヌ・クロステルマン中尉、ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ中佐、エイラ・イルマタル・ユーティライネン中尉、リネット・ビショップ曹長。

そしてストライクウィッチャーズ主人公・宮藤 芳佳軍曹、が後からハンガーへやってきた。どうやら今回は全員で出撃しないとヤバい相手のようだ。

「行くぞ、全機出撃！－！」

「－－「了解！－！」

坂本の号令の下、一斉に空へと飛び立つウィッチャーズ。その後ろ姿を白いハンカチを振つて見送った。

「さてと、それじゃ俺達はさつさと昼飯……」

「馬鹿、ここで待機だ」

「やつぱりスカ…あ～腹減った～」

「お前散々食つてただろ！いい加減にしろ！」

「イテツ……殴つたね、親父にもぶたれることないのに…」

自分にしか分からぬネタを披露した所で相手に通じる筈もなく。結果もう一度拳骨を頭にお見舞いされた。ジンジンと頭が痛い、触れば小さく膨れたタンゴブが一つ…。

「…………」

「ふと、出撃したウィッヂ達が気になる。ここからでは見えないだろうか？」

「すいません、少し手洗いに行きたいんスけど」

「何…？つたく…40秒で戻つてきな！」

「……ジブリ?」

安藤から一応許可を貰いハンガーを後にする。トイレなんて勿論嘘、
目指すは屋上…建物の頂上だ。

「「」」からだと見えるかな…」

天使像の頭の上に乗り、出撃していつた方向に視線を向ける。

「視力への強化、工程開始

」

強化を用いて五感の一つである視覚を強化する。

普段なら当たり前のよう使用出来る強化魔術が、今では一回使つ
のに1分間も時間を費やしている。

これでは魔術入門者と変わりないぞ…。

「お、見えた」

1分後、ようやく強化魔術が発動し視力が強化される。

強化された視覚は通常の人間の何倍以上もの先の景色を映し出してくれた。

空を飛行するウィッチ達、手にした銃火器でネウロイを撃つ。

対し敵・超大型ネウロイ。全く堪えていない。

幾ら銃弾を浴びされようと黒い装甲には傷一つ付いていない。固有魔法「怪力」を持つバルクホルンが両手にした銃火器MG42の銃身を持つ。

そして己の怪力と合わせ、本来握るグリップでネウロイのボディに叩き付けた。

銃をハンマーのように扱い敵を倒すバルクホルンの戦術、銃の耐久の方が心配だが壊れない所を見るとバルクホルンの怪力に耐えれる設計になっているのだろう。

が、それでもネウロイには効いていなかつた。何事もなかつたかのようにこの基地に向つて飛行し、ウィッチ達に強力なビームを撃ち放つ。

ウイッチ達の動きが鈍くなる、動搖しているのが丸分かりだ。

敵に自分達の攻撃が効かない、ネウロイにこの基地への侵攻を許している。焦るのは無理も無い。

「うつや…まずいかな」

きつかり15秒、強化の効果が切れ視力も通常通りに戻る。同時に、強化なしでもネウロイの姿を肉眼で捉えることが出来た。

この基地も危ない、いつネウロイがビームを放つて吹き飛ぶやう…。

「仕方ない…」

本来関わるべきではないのだが、状況が状況だ。見られたら質問攻めを受けるのは眼に見えている。バレないよう、誰にも見られないように。

周囲への細心の注意を払いつつ、魔力回路を開放する。

「ソードサマナー」「剣極の調」起動、製作及び空中展開、「ルーン」付加、工程開始

あの距離ならここからでも充分に行き届く。だが、相手にただ剣を放つだけではウィッチ達と結果は同じ。だからこそ「ルーン」が自分にはある。

あの世界で学んだ内の一つ、「ルーン魔術」。【ソードサマナー剣極の調】によつて創造した剣全てにルーン文字を刻み込む。

相手の装甲はウィッチの魔力を込めた銃弾やバルクホルンの怪力すら受け付けない、それ程強固な身体。ならば刻めばいい、如何に強固な装甲であるかと貫く、『貫通』という効力を發揮するルーンを。

剣の一つ一つにルーン文字を刻み込む。

「ぐつ
」

疲労感が身体に現れ始める。

やはり、不完全なこの状態だと相当の負担が掛かるようだ。

只でさえ剣を製作するのに3分間の時間を費やすといつにそれに、今集中を解けば全て一からやり直しとなる。

この状態である時俺は完全に無防備、もしこの時を狙われたら確實に俺は絶命する。

「工程完了」

5分後、頭上に100本の剣が生まれる。、「ルーン」を付加しただけでその倍の時間…5分以上も時間を費やしてしまつとは…本当に悲しくなつてくる。

「空中展開、現状態を維持、待機

」

剣の全ての刀身…切先から根元まで掛けて蒼く刻まれたルーン。狙いを定め、ギリギリまでネウロイを引き寄せる。

「…今だ！待機解除、「剣極の調^{ソードサマナー}」…一斉掃射用意
つ！」

射撃^{シユート}

待機している剣達に命ずる。命じた剣は一斉に敵ネウロイへと向つて放たれた。

「へそつーー」のままだとマズイぞーー！」

坂本さんの声がインカムを通して聞こえる。その声には焦りが孕んでいた。

無理もない、坂本さんだけじゃなく自分を含めて皆焦っている。

上空に現れた、過去大型クラスの巨大なネウロイ。全員で出撃するなんて久し振りだと思う。

「コイツ…なんて硬さだ！」

バルクホルンさんが口を開く。そう、このネウロイは今までに出遭つたことのないタイプだった。

彼ら私達が攻撃しても全く効いていない。坂本さんの烈風斬、ペリースさんのトネール、リーネちゃんの射撃でもネウロイには傷一つ付けることが出来なかつた。

ネウロイはゆっくりと、少しずつ、確実に、私達の基地へと向つていく。そして、ビーム攻撃も絶えることなく放つてくる。
防戦一方、このままでは基地が危ない。基地には沢山の整備兵の人達がいる。

なんとしてでも守りないと……」

「おい！基地から何か飛んでくるぞ！』

シャーリーさんが不意に叫んだ。その言葉に皆が基地の方を向いた途端、白銀に煌く何かが勢いよく飛んできた。

「な、何だ！？」

「あれは……剣！？」

飛んできたのは沢山の剣。基地の方から突然沢山の剣が銃弾のよう飛んできた。それは全部ネウロイの方へと向つていく。

そして、あれだけ攻撃しても傷一つ付かなかつたボディを次々と貫通していく。

そして内の一一本が坂本さんが言つていたコアのある場所を貫いた。

コアが碎け、ネウロイは白い破片となつて四散する。その光景に誰

もが畠然とし、四散するネウロイの破片眺めていた。

Act 2：襲撃「壱」（後書き）

初、戦闘描写でした。

ルーン魔術は現在勉強中です。貫通の効果を付「」と書きましたが、大丈夫かな。

ルーン魔術がカツコイイと言う理由から主人公に装備させてしまつたが、ハードルが高すぎたのかも知れない。

と、とまあこんな感じでした。

Act 2・襲撃「弐」

目標の破壊を確認、ネウロイは白い破片となつて海へと落ちていく。ウイッチ達も全員無事、ただその顔は皆睡然としていた。

まあそういう。いきなり剣が飛んできて、自分達が攻撃しても全く効いていなかつたネウロイを難なく倒したのだから。

「さて、バレる前にさつさとハンガーに戻るか」

約束の40秒をとうに超えているが、まあ大丈夫だろう。そそくさとハンガーへと戻つた。

：疲れてるし今日は仕事したくないな。このままベッドで寝たい。：

ハンガーへ戻ると何処に行つていたと安藤に怒られ、本田三発目の拳骨をお見舞いされた。頭に三つのタンゴブが出来上がる。

それから数分後、出撃していたウイッチ達が帰還してくる。

皆無事、怪我もなくストライカーゴーツにも傷一つない。ただ、

ウイッチ達の表情は皆複雑そうな顔をしていた。

複雑そうな顔をしたまま、ウイッチ達はハンガーを後にする。

それを見送った後、早速メンテナンス作業へと入った。

ウイッチ達がハンガーを後にする際、坂本と少しだけ眼が合った。
何か言いたそうな顔をしていたが、すぐにハンガーを去っていった。
そんな坂本に首を傾げながらも、ストライカーユニットと銃火器の
整備に入った。

「うわ、この銃メチャクチャ重つ！？？」

その日の夜、滑走路に赴く。

「つ

「ソードサマナー剣極の調」にて製作した一振りの剣を持ち、中空に向って仮想の
敵に斬りつける。

シャドーボクシングならぬ、シャドー剣術。

夜になると暇だ、あの世界にいた時はパソコンで夜遅くまでインターネットをしたり、徹夜でゲームをしてたりしていた。

が、この世界にはそんな娯楽はない。夜になると寝るか、それとも夜間哨戒に出るかの二つ。

夜間哨戒の方はサー二ヤ・＼・リト、ヴァク中尉ぐらいか。

俺達整備兵も何人か夜勤で、いつウイッチ達が出撃してもいいようにハンガー付近で待機している。

俺はまだ新米という事で夜勤の仕事はないから有り難い。

「はつ
！ふ
！」

剣を振るい続ける。と、海の波打つ音に交じり誰かの足音が聞こえてきた。

「ん？」

鍛錬を止め、足音が聞こえた方を振り向く。

「アンタは…」

「！」、「こんな時間に鍛錬か？随分頑張ってるなお前」

そこにはあのムリーダナ（・×・）でお馴染み、エイラ・イルマタル・ゴーティライネン少尉が立っていた。

なんでも、思わず某運命と言ひ名のゲームに出でくる男主人公の真似をしてしまった。

エイラ side

夕食後、ミーティングルーム

「それにしても、いつたい何だったのかしら…」

中佐が真剣な面持ちで口を開いた。

今日の午後の出来事だ、全く攻撃が効かなかつたネウロイを、突然飛んできた沢山の剣が斃した。それも基地の方角から。

「何故私達の攻撃が効かず、あの飛んできた剣はネウロイを貫くこ

どが出来たんだ?」

大尉の言葉はもつともだ。私達ウイッチの攻撃が効かない程硬度の機体をしていたと言うのに、飛んできた剣は難なく貫いていった。何でこんな普通の剣がネウロイを斃せたのか、今でも不思議だ。

基地への被害は避けられたものの、釈然としない気持ちでいる。

「…………」

「へ~どうしたの少佐?」

先ほどから真剣な表情で考えている仕草を取っていた少佐に、中佐が尋ねる。皆の視線が少佐に向けられる。

暫くして、少佐がゆっくりと口を開いた。

「…あの時、基地の方を見たんだが…」

少佐の固有魔法は「魔眼」。遠距離の敵を捉えたり、ネウロイのロアを見つける力を持っている。

「Jの基地にある像の頂上、そこに一人の男がいた」

「男？」

「ああ、その男…この部隊の整備兵の服を纏っていた。顔は帽子で隠れて見えなかつたが…」

少佐の言葉に一同がざわつく。まさか、男があのネウロイを斃して私達を助けた？男つて魔力を持たないんじやないのか？

「リーネちゃん、男の人で魔力持つてる人だつて！凄いよね！」

「そ、そうだね芳佳ちゃん」

興奮気味の宮藤、なんでそんな嬉しそうなんだ？リーネは男が苦手だから少し困惑している。

「やはり…彼が？」

「中佐？」

「……もし、少佐の言つてゐる事が事実だとしたら」

「ああ、人類初…男性でありながら魔力を持った者がこの基地内にいる、ということだな」

「どうする？中佐？」

大尉が中佐に尋ねる。暫く考えた後、ゆっくりと口を開いた。

「そうね…。とりあえず明日、調査してみましょ！」

明日一人ずつ聞き込みを開始するということに決まり、今日は解散となつた。

男で魔法が使えるヤツ…か。まあ興味ないけどナ。でも、居たらいつたいどんなヤツなんだろ…。

皆が解散した後、この場に残つたのは美緒と私だけとなつた。

「ミーナ、少しいいか？」

「何かしら？」

「先の件、彼が…と言つていたが、誰か見当が付いているのか？」

「…そうね。見当が付いていると言えば付いているわ」

美緒の言つ通り、男性でありながら魔力を持ち魔法が使える。

そんな人物に私は心当たりがあった。正確に言えばあの場にいたトウルーデとフーラウもある。

あの燃え盛るカールスラントの街で、トウルーデの妹のクリスちゃんを助けた青年。

凄い速さで燃え盛る街を駆け抜け、落ちてくるネウロイの破片と燃え盛る炎の海からクリスちゃんを護りながら安全な場所まで避難させた。

私達はすぐさま彼の後を追つた。彼がクリスちゃんを避難させた小

さな丘へと降り立つ。

クリスちゃんを助けた青年は倒れていた。その横では目頭に涙を浮かべながら倒れている彼の身体を揺らし、必死に助けを求めているクリスちゃんの姿。

急いで救護班のいる所まで運ぼうとした。トゥルーデの妹を助けた恩人を死なず訳にはいかなかつた。

けれど、私達はそこで信じられないものを目にした。倒れている彼の身体が徐々に光となつて消えていく。

こんな現象今までに出遭つたことがない私達はどうする事も出来ず、ただ困惑とした表情で消えた彼を見ていた。

そして現在に至り…私は驚いた。扶桑から配属された整備兵の書類、その顔写真を見て…言葉を失つた。

間違いない、あの時の彼だ。あの時の彼がこの基地へとやってきた。

しかしいざ出会つてみると、彼はカールスラントには行ったことはないと答えた。

様子からして嘘を言つてゐるよりも見えなかつた。
けれども間違ひない、今日のネウロイを撃墜したのも…数多の剣を
放つたのも…恐らくは彼。

「明日、彼について聞き込みをしましょ」

「そいつは？」

「…儀國 雅史、先日配属された整備兵よ」

ミーナ エイラ side

その日の夜、何故か全く眠れなかつた。

「う…寝れない」

時刻は午後十時過ぎ。皆はとつと寝静まつてゐるし、サーニャも既
に夜間哨戒任務を行つてゐる。

私が起きているこの状況…あまりにも退屈だ。

「…しょーがないな

ベッドから起き上がり、いつもの服に着替える。こんな時は夜の散歩にでも行って気を紛らわせるのがいい。夜の散歩なんて、どれぐらいしてなかつたかな…。

夜の海岸沿いを歩く。聞こえてくるのは波打つ音と自分の足音。何となく滑走路に来ていた。と、そこで何かが視界に映つた。

「ん？ あれは…」

滑走路に居たのは一人の整備兵、こんな時間に何を

「工程完了」

突如、整備兵の両手に一本の剣が現れた。

「えつー？」

思わず自分の眼を疑つて擦つた。間違いない、確かにあの整備兵は今両手から剣を出した。

ふと、少佐の言葉が頭の中に甦る。

『人類初…男性でありながら魔力を持った者がこの基地内にいる、
といふことだな』

男で魔力を持つてる…じゃあ、アイツが？

「ふつ
！はつ
！」

ソイツは両手にした剣を振るい始めた。少佐も朝早くからよく素振りをしてくる、けどアイツのは少佐とは全く違う。
滑らかで綺麗、まるでダンスをしているように魅入る動作。

けど、本当に皿の前に敵がいるかのように真剣で…霸氣のある一撃
を繰り出す。

「…………」

もつと近くで見てみたい、この時私はそう思っていた。男なんてどうでもいい、そう思っている私が。

剣を振るっているあの整備兵に興味を持つていて。

少しずつ近付く。ヒ、整備兵が動きを止め此方に振り返った。

「ん? ……アンタは

「ハ、こんな時間に鍛錬か？ 随分頑張ってるなお前

緊張しながらソイツに話しかけた。私らしくないな…なんで緊張してるんだ？そ、そりや男と話すなんて殆ど機会がなかつたけど…。

「眠れないんで…暇つぶし程度ですよ」

そう言つてソイツはまた剣を振るいだした。近くで見れば見るほど魅入る何かがある。

近くに腰を下ろし暫く眺めていた後、私は聞いてみることにした。

「なあ…」

「…何か？」

剣を振り続けたまま、聞き返してくる。『気にせず私は質問をした。

「お前さ……魔法、使えるのか？」

「……え？」

剣を振るっていたソイツの動きが止まる。やつぱり……コイツか。

「惚けるなよ、さつき剣を出したの見たぞ。あれ、お前の固有魔法だろ？ それに昼間のネウロイを斃したのもお前なんじやないのか？」

「…何をいきなり

「

言つんだ？ そう惚けようとしたのだろ？ けど、先程まで振るつていた剣が光の粒となつて両手から消えた。

やつぱりそうだ、あの剣はアイツの魔法によつて作りだされた物。普通の剣ならこんな事は絶対に起きない。

「どうなんだ？」

「…………」

言い逃れ出来ない、そう観念したのかソイツは大きな溜息を吐いた
後口を開いた。

「… やれやれ、やっぱり見られてたか。バレなことよつこしたつもり
だつたんだけど」

「お前… 何者なんだ？ なんで男なのに魔力が… 魔法が使えるんだ？」

すると予想外の反応を示した。何を言つているんだコイツ、そう言
わんばかりの顔を浮かべて私を見た。… 何かムカついた。

「…」うちの台詞だけどな。女しか魔力を持つていない、その考えは
改めるべきだ。

魔力つて言つるのは誰しもが持つてている物。男だから、女だからとか
は関係ない

「それ、どういづ

「

「おつと、もうこな時間か。そろそろ寝ないと」

そつまつひソイツはそそくとおひこじうとする。思わず立ち上がりて引き止めようと手を伸ばす。

「…今はまだ、話すべきじゃないな。時が来たら必ず話す。だから…他の連中にはまだ黙つていてくれないか？」

それだけ言い残すと信じられない速さで滑走路から走り去つていった。あれも魔法による賜物なんだろ？

「…何だつたんだよ、アイツ…」

立ち去つていったアイツの背中を見送つた後、私も部屋へと戻つた。納得出来ない、まだまだ聞かないといけないことが沢山ある。

顔は覚えた、また明日会つた時にでも聞けばいい。そう思しながら服を着替えて再びベッドの中へと入つた。

今度は不思議と早く眠りに就くことが出来た。

Act2・襲撃「弐」（後書き）

Act2・襲撃「弐」です。

何度も思いますが…やはり書くところとなは難しいですね…。

Act3・遭遇「春」（記書き）

Act3「春」です。今回ばかりはぴり短い…ですか？

Act 3・遭遇「壱」

翌朝、いつもの様に起きて食堂で朝食を摂る。

今朝はパンとスープ、サラダとハンバーグだった。朝から意外とボリュームあるな。

「頂きますつと」

焼きたてのパンに手を伸ばす。昔の俺なら絶対に朝はご飯と味噌汁、と言つていただろう。

「ご飯とパンどっちが好きかと問われれば間違いなくご飯を選ぶ。

が、今更ながら、パンって意外と美味しいことを知つた。パンも悪くない。

そんな、朝から豪華な朝食を堪能した。

朝食後、いつもの様にストライカーユニットの整備作業に入る。いつもと同じ、ストライカーユニットを解体してメンテナンスして再び組み立て直す。それだけで約三時間程度の時間が経過。

メンテナンスをしながら、今朝の出来事を思い出す。それは朝、安

藤に叩き起された時だつた。

昨日と違つて、ほんの少し身体が軽くなつた気がしたのだ。気のせいだろう、最初はそう思つていた。だが、気になつたから一度調べてみることにした。

身体機能・正常… 但し性能は120%から73%に低下。

魔力回路・エラー。82%回路に異常発生。

「CODE: SATAN 煙獄の赤」… 使用可能。但しエラーにより制限あり。

・ランク A+++ランクからD++ランクに低下

・消費魔力量増大

CODE: BLUE

「CODE: BLUE 終焉の蒼」… 術式工程時にエラー発生、よつて使用不可。

「CODE: EATER 暴蝕の黒」… 上記と同じくエラーにより使用不可能。

CODE: SAMA

「CODE: SAMA 剣極の調」… 使用可能。エラーにより制限あり。

・剣の製作可能 製作時間延長及び現界時間短縮。

・ランク AランクからD+ランクに低下。

・製作した剣による掃射可能 「ルーン」の付加可能。

・「ルーン」 使用時、通常製作時間より更に延長。

・強化・使用可能。但し効果は15秒、再度使用時には一分間の集中が必要。

・ルーン魔術・使用可能。

微々たるものだが、ほんの少しだけエラーが発生していた機能が回

復していた。

CODE: SATAN

「煉獄の赤」のランクと、剣のランクが少しだけ上がったのは嬉しい。

何で回復したのかは分からぬ。けれども嬉しいことに変わりは無い、このまま一刻も早く完全回復してくれるのを願うばかりだ。

ストライカーゴニーツの整備が終われば今度は昼食タイム。

今日の昼食はパスタ、ペペロンチーノ…だろう。ガーリックスライスと赤唐辛子入ってるし。

味は言うまでもなく美味しい、衣食住が揃っている。仕事も楽と言えば楽な方。

ウイッチ達のように訓練もなければ出撃する必要もない。仕事と言えば整備、整備、ひたすら整備。

退屈と言えば、まあ退屈だらう。けれども目立たないし文句は言つまい。

昨晩、まさかエイラに見られたとは予想外だった。

まあ言わないでくれって頼んだから多分大丈夫だとは思うが…。

「おい儀國、ミーナ中佐がお前を呼んでるぞ。早急に来い、だそ
だ。お前…何かしたのか？」

…尊をすれば何とやら、か…。やつぱりエイラは蝶つたんだひつか
…。

呼び出しをくらい、早速質問が始まる。

田の前にはミーナ、左隣に坂本、右隣にバルクホルン。エイラの姿
は見当たらなかつた。

「それで、俺に何の用ですか？」

只ならぬ空気がこの場を支配していた。ミーナはとてもいい笑顔を
浮かべているが、その裏では隊長としての霸気を感じる。
嘘が通じるかどうか…尤も、ここまで来たら嘘を貫く以外の選択肢
はない。

「貴方に聞きたい事があるの。昨日、私達が出撃した後、貴方は何をしていましたのかしら？」

「何をしていたって…そりやハンガーで待機ですよ。でも途中で腹痛に襲われて…それで我慢出来なくなつたから少しだけ抜けさせてもらいました。

勿論許可は貰いましたよ？」

一応安藤には嘘だがトイレに行くといふことは伝えてある。他の整備兵にも食べすぎだと言つて笑われた。周囲がそう証言しているのだ、大丈夫だろ？。

「やつ、それは他の整備兵からも聞いているわ」

「ええ、情けない話、少しばかり食べ過ぎたよう…。以後気を付けてます」

「…率直に聞くわ、貴方は魔法が使える…そして昨日、ネウロイを撃墜したのも貴方じやないかしら？」

「いやいや、ちょっと待つて下さこよ。俺が？中佐たちを？今日はエイプリルフールじやないですよ？」

ハツハツハと笑つて誤魔化す。やつぱりエイラが言ったのか？

とつあえず、誤魔化し切る。これしかない。

「それに、俺は男ツスよ？男の俺が魔法使えるワケないじやないツスか」

「.....」

暫ぐの沈黙、ミーナは軽く息を吐くと口を開いた。

「.....そう、それもそうね。ごめんなさいね、いきなり呼び出した
りして」

「いえ、それじゃあ失礼します」

敬礼をミーナにし、部屋を後にする。

思わず安堵の溜息が漏れる。何とか嘘を通してることが出来た。

「ふう.....」

ハイクはやつぱつ//一ナに鳴ったのか…。

それにして ヒヤヒヤさせてくれる…。普段は笑顔を作っているのにいざとなれば、覇氣ある態度で接してくれるリーナは、やはり凄いとしか言い様がなかつた。

「せんと、早く戻つて昼飯の続きを…」

「おつ

「ん？」

戻る途中、エイラと出会う。一人ではない、その横にはペリーヌ、宮藤、リーネ、ルッキーもいる。

111

「」

そのまま何も言わず、ただ通り過ぎる。エイラも特に感心を示しないと言つた表情で横切つていく。

「… 今夜もまた剣の練習か？」

と、不意にエイラが尋ねてきた。首だけを振り向かせる。エイラは背中を向けたまま、他のメンバーはエイラをジロジロと見ていく。

大方、あのサーニャ一筋のエイラが… とか思っているんだろう。

此方も背中を向けたまま、エイラの質問に答えた。

「… 気が向けば、退屈と感じたらまたしますよ」

それだけを言い、この場を後にする。

その後、富藤やリーネがエイラに質問攻めしている楽しそうな声が後ろから聞こえていた。

その日の夜、またも滑走路にて鍛錬を行ひ。

「工程完了」

やめじとは昨日と一緒に。両手で剣を生み出す、後は時間切れになるまで剣を振るう、これだけだ。

多少機能が回復したとしても、やはり性能は昨日とほぼ変わりない。

剣を製作するにも3分程時間がいるし、1分したら綺麗さっぱり消滅する。

どうすればこの鬱陶しいエラーを取り除けるのか、それを考えながら次の剣の製作へと入る。

「やつぱつ、今日も鍛錬か」

エイラが滑走路に姿を現す。昨晩と一緒に場所に腰を下ろし、ぼんやりとした表情で眺めている。

「…何しに来たんだ?夜更かしは美容の敵だと黙つた

「べ、別にいいだろ…。なんなくだ。そう、なんなく…」

「…まあいいけどな」

剣の製作が終わる。それが終われば剣の鍛錬を再開させた。

「まあ、お前俺が魔法…魔術使えること言つたか？」

「はあ？…言つてないぞ、だつてお前が言つなつて言つたじゃんか」

「… そうだったな、有難う」

「べ、別に礼なんて言われる憶えなんてないし」

今日は珍しく、俺が鍛錬が終わるまでエイラはずっと見ていた。

何度も帰つて寝るように促したが本人は眠たくないと拒否。

結果最後まで居続けた。

何もしない、何も喋りかけてこない、ただジッと鍛錬している所を見るだけ。

何が面白いのか、エイラにとつて俺の鍛錬など何も面白く無い」と思
うの。

…明日もエイラはやつてくれるのだろうか、そんな事を考えながら今
田といつ田を終えた。

Act3・遭遇「壱」（後書き）

今回ちよつぴり短かつたですかね…。

さて次回、Act3「弐」でオリジナル型ネウロイの登場とガチンコバトルの開幕です。

頑張つて執筆していきたいと思います！すわつ！

Act 3・遭遇「弐」（繪畫モード）

こよこよ、オリジナルネウロトイの登場です！

どひゃー！

Act 3・遭遇「弐」

Hイラ side

最近、どうも私は可笑しい。

久し振りに夜の散歩へと出掛けたのを切つ掛けに、アイツの存在が頭から離れない。

滑走路で出会った一人の整備兵、名前はまだ聞いてないから知らない。

この基地には沢山の整備兵がいる。けど、滅多に…それこそ全くと言つていい程会話をしない。

魔女は純潔を失うと魔力を失う、そう伝えられている。

だから純潔を護る為に、ウィッチとしての寿命を少しでも長く伸ばす為に。

必要最低限の会話しかこの基地では許されていない。

そつと分かっているのに、夜になると私は滑走路へと赴いてしまう。

毎晩アイツがいるかなんて分からないのに、今私がしているのは軍規違反なのに……。

それでも気になつて足を運んでしまう私がいる。

そして、アイツは必ずそこにはいる。両手に剣を持って鍛錬を行つアイツが。

相変わらずキレのある動きを見させてくれる。

最初の内はただ眺めて、暫くして帰つた。でも最近だと……

「お前さ、いつから魔法使えるようになったんだ？」

「ん~…今から大体四年前…15の時だつたかな。

まああの頃は色々とあつてな、それから使えるようになった

「色々つてなんだよ…」

「色々は色々だ」

今では会話も交わしたりしている。初めて出会つた時に言葉を交えてからは会話は一切なかつたけど、今は私から話しかけてる事が多い。

アイツは剣を振るいながらの会話、それでも私の質問に答えてくれる。

はぐりかされる事が殆どだけど…。

私は最近可笑しい。サーニャも大切だけど、今ではアイツの存在がサーニャと同じぐらい大きな物となつて気になつていい。サーニャからも最近ぼんやりしてこると心配させてしまった。

…私は最近可笑しい。今日の夜もアイツのことが気になつて滑走路へと足を運ぶ。

今日こそは名前ぐらい聞いておいつへ、やつ思いながらいつもの場所に腰を下ろした。

「今日も来たのか…。昼夜逆転の生活になつてないか?…ちゃんと充分な睡眠は取れてるのか?」

「五月蠅いな、余計なお世話だ」

今日もエイラがやつてくる。ここ最近、ほぼ毎晩エイラは鍛錬場所にしてここの滑走路に足を運んでくる。

いつもと同じ場所に座り、いつもほんやりとした表情で暫く眺めて帰る。

初めて出会った時以外、お互に会話を交えることはなかった。

剣を製作し、振るい、また新たに製作する自分。黙つて見つめて暫くすると帰るエイラ。

けれども今では会話を交えたりしている。

と言つても、会話の殆どが俺に対する質問ばかりだ。

何故魔法が使えるのか、なんでこの基地に来たのか等。眞実はまだ話していない、いつかは…話す時がくるだろう。

…正直な話、エイラがここにやつてくる事が密かな楽しみでもあります。

ストライクウィッチーズの中でエイラは一番好きなキャラクターだつたりする。

好きなキャラクターと共にいる、絶対に実現不可能な事が可能となつてゐる今。ミニコニケーションを図つておきたいと思つてゐる。

こんな経験、もう一度と味わえそうになり。

そして今日もまた、エイラがやつてくる。

いつもと同じ場所に座り、ぼんやりとした表情で鍛錬を眺めた。

1分経過、手にしていた剣が消える。四度目の製作に

「工程開始

」

「ん？」

入り口として、その作業を中断させる。何処からか綺麗な歌声が聞こえてくる。

ぼんやりと眺めていたエイラも歌声に気付き、顔をそつと向ける。

「ああ、この歌は中佐だな」

「中佐？ああ……なるほど」

Hイラに言われて思い出した。ミーナは第一期で歌を唄つシーンがあった。

そして聞こえてくるこの歌、あのリローン・マルーンだ。

やつぱり生で聞くと全然違う。とても綺麗で、ずっと聞いていたくななるような……それ程の素晴らしい歌声をしてくる。

Hイラも歌が聞こえてくる砂浜の方をじつと見つめていた。

「綺麗な声だな……」

「わうだな……」

鍛錬を止め、ミーナの隣うコーン・マルーンに耳を傾けていた。

その綺麗な歌声が突如悲鳴に変わる。

「今の悲鳴は……？」

「行くぞー！」

砂浜の方へと走る。嫌な予感がする、一刻も早くミーナの元に急がないと…！

砂浜へと着く。

「な、何だアレ！？」

最初に口を開いたのはエイラだ。砂浜に二つの影、一つは先程までリリーン・マルレーンを唄い、そして悲鳴を挙げたミーナ。

もう一つは見たことも無い物体。全身黒く、甲冑を纏つた騎士と思わせるフォルム。

人間の形をしているがあれは人間では無い。黒い身体をした人間もどき。

アレが何者なのか…冷静になつて考えれば誰だつて分かる。

この世界はストライクウィッチーズの世界、そしてこの世界での敵は未知の存在…ネウロイ。

従つて、ミーナの前にいるあの黒い騎士もビキは…

「ね、ネウロイか！？」

「だらうな…」

第一期より登場した人型ネウロイ。富藤に自ら心臓…コアを見せコミコニケーションを図り、ウォーロックの存在を教えた。

ウイッチ型でなく、騎士型と言つのは初めて眼にする。

あんなネウロイ設定資料集やアニメには一切登場していない。

「つてまづい！」

騎士型ネウロイがゆつくりと手を振り翳す。手刀の形を作つている手から赤い刃が飛び出す。

ビームを放出するのではなく、あの様に形状を刃とするとは…。今までのネウロイとはレベルが違つことが理解出来た。

「中佐……」

「エイラが叫ぶ。その声に気が付きミーナが此方を向いた。

「エイラさん……」

振り下ろされる赤い刃、肉を切り裂く音が静かに鳴り、砂浜に数多の血痕が付着する。

「イック……」

左腕から血が流れ出る。大きく皮膚を切り裂かれた左腕、焼かれて
いる様な熱さと痛みが同時にやってくる。

切断されてないだけマシ、痛むが動かせることは動かせる。

何とか間に合わせることが出来た。ミーナには傷一つない。

「…………」

右腕で抱き抱えているミーナの身体は少し震えている。

幾らストライクウィッチーズの隊長としてもまだ19歳の女性だ。それに、本来ならば戦場に出る必要なんてない。

それなのにネウロイがいるから… ウィッチの力を持っているが為に戦場に出て闘う。

誰しも戦場に出るという行為にはとてつもない恐怖を持つ。ミーナとて例外ではない。

「……逃げる」

今この状況下で闘えるのは俺だけ。だから、俺が護る。ミーナを…コイツ等を死にはさせない。

「えつ？」

「アイツと一緒に逃げる、いいよ俺が引き受けん」

「な、何を言つてこりのー…それに私を庇つて怪我を

「「ひさなの日常茶飯事だったよ」

あの頃の俺はこんな傷よりも酷い傷を何度も負っていた。
何度も死に掛けそうになり、その度に死の淵を這いずり上がってきた。

この程度の傷、擦り傷と変わりない。

…でもメチャクチャ痛い。

「ゴーティライネン少尉！ 中佐を連れて早く行け！」

「お、お前はまだいるんだよ…。」

「言つただろ？ 俺はお前達が充分逃げれるまでの時間稼ぎをする
抱き抱えていたミーナを下ろし、背中を押してエイラの元へと向わ
せ。」

「し、死ぬ気かよ…？」

「なに、心配はない。それどころで時、野郎は女を護りなき
やいけないんだよ。だから早く行け…。」

「だ、ダメよ！貴方を置いて逃げられるワケが……！」

ミーナが泣る。分かつていてる筈だ、隊長として…今自分が何をすべきなのかを。

それでもミーナは冷静な判断を出せていない。

ミーナが冷静な判断が出来ないのは、あの忌まわしき過去を投影しているからか？

確かに、ミーナから見ればこの状況は最悪と言つていいだろう。満足に闘えない自分、左腕は動くものの傷を負つていて。武装もしていないしましてやウイッチでもない。ただの整備兵…。

が、あくまでそれは其方側の視点。

「グズグズするなこのバカ！…」

「ツー？」

「お前はこの部隊の隊長だろうが！一方俺はただの整備兵だ、アンタと俺…この先どちらが生きるべきか。どちらが重要なのか俺が言わなくても分かるだろー！？」

「け、けど…！」

「……死ない」

「えつ…？」

「必ず生きてアンタ達の元に戻る。だから行け、約束は…必ず果たすのが俺なんだよ。アンタは…アンタ達は俺が護る」

「…………つ！」

「…ゴーティライネン少尉ッ！…行けッ…！」

「…………つ！絶対に…死ぬなよ！？」

エイラがミーナの手を引いてこの場から撤退する。砂浜を踏む二人の足音が消えたのを確認し、改めて騎士型ネウロイを見据える。

「さて…約束は果たさないとな」

Act3・遭遇「弐」（後書き）

以上、オリジナルネウロイの登場でした。

何故このオリジナルネウロイを登場させたのかですが…それは次回のAct4にて『』説明したいと思います。

そしていよいよ、初ガチンコ戦闘描写の回です！

…明日ぐらに投稿出来るかな…。

以上、Act3「弐」でした！

Act 4：魔術師（偽）【毒】（前書き）

いよいよ初ガチンコ戦闘描写の挑戦です！ご覧下さい、どうぞ……。

Act 4・魔術師（偽）【壱】

「工程開始

」

剣の製作に入る。3分後、一振りの剣が両手に製作される。

不思議なことに、製作している際騎士型ネウロイは一切攻撃してこなかつた。

特撮物に登場する敵もヒーローが変身している時には絶対に攻撃しない、それがお約束。

ネウロイは知的生命体である事は知つてはいるが…、どうやら空気を読むという知識も兼備えているようだ。

右手に製作した剣を持つ。

左腕が負傷している状態では満足に一振りを操る事は出来ない。唯一無事であり満足に動く右だけが頼りだ。

「さてと…待たせたな」

剣の柄をしっかりと握り締め構える。対し、騎士型ネウロイも右手からビームブレードを出し、構えた。

どうやらかなりの剣術の腕前を持っているようだ。構えを見てれば分かる。

あれは素人の構えではない。幾多の戦場を駆け抜け、剣を振るい、敵を倒し続けた者の構えだ。

元より油断をしてはいないが…余計に油断出来なくなつた。

「……行くぞっ！！」

先手必勝。まずは小手調べ、手にした剣を袈裟に振るつ。

金属音が鳴り響く。袈裟に振り下ろした剣は騎士型ネウロイのビームブレードによつて防がれていた。鍔迫り合つには持ち込みず、雅史はすぐに剣を引いて間合いを取る。

とつあえず、何とかなりそうだ。雅史は心中で安堵の息を漏らした。

ネウロイの主な攻撃方法は破壊力のあるビーム砲だ。

騎士型ネウロイがブレード状にしているのも元はあの赤いビーム。通じるか否か不安だつたが、防がれたことによつてそれが証明された。

ビームであるうと、あれは普通の剣と変わりない。普通に打ち合える。

そうと分かれば安心して闘える。問題は時間。

剣を留めて置けるのは1分、それが過ぎれば剣は消滅する。

それにネウロイはコアを破壊しない限り何度でも修復する能力を保持している。

何処にコアがあるかある程度は思いつくものの、かなり難儀ではあ

る。

だがやるしかない。1分以内でケリを着ける。それを頭に置き、雅史は騎士型ネウロイに向つて地を駆けた。

「はあああああああああつ……」

「ツ……！」

騎士型ネウロイが獣のような咆哮を上げ跳躍、落下速度を加えた唐竹が繰り出された。

剣を逆風に振るい迎え撃つ。ぶつかる剣とビームブレード、信じられない衝撃と力が剣に加わる。

「ぐつ……なんて馬鹿力なんだよ！」

ぶつかり合つ度に剣が軋む。騎士型ネウロイの力と嵐の様な猛攻、Hラーによる製作した剣のランクダウン。

防ぐのは良策ではない。それでは剣が耐え切れず粉々に破壊されてしまつ。

だから防がず受け流す、そしてカウンターを狙うしかない。

「やれやれ……わざとHラーなんとかなつてくれつてんだ……」

「ハア…ハア…！」

中佐と一緒に走り続ける。最初は何度もアイツが居た方を振り返つて見て、立ち止まりそうになつた所を私が手を引いて走つていた。今は冷静な判断が下せる前に落ち着きを取り戻している。

アイツが命を賭けてまで逃がしてくれたから、私も中佐も生きている。けど、一人あの場所に残つたアイツが代わりに殺されてしまつ……！

だから急いでハンガーへと向つた。あそこならストライカーゴニーツトも武器もある。この基地を護るのは、ネウロイを斃すのは私達ウイツチだ。だから…アイツ一人危険な目には合わせない。

「皆…」

ハンガーへ行くと、既に皆が集まつていた。

「リーナー・サー・ニヤがこの基地内にネウロイがいるのを

」

「ええ、分かってるわ！そして今……私とエイラさんを逃がす為に……たつた一人で闘っている人がいるの！」

「何…？それはまさか」

「話は後、全機出撃準備！ネウロイは海岸沿いの方よ！」

「……了解ッ……！」

中佐の指示の元、皆迅速に出撃準備に移る。私もストライカーゴニットを装着して武装する。

これで満足に闘える。待つてろよな……私が、私達が行くまで死ぬんじやないぞ！！

50回目の打ち合い。

未だに一撃を与えることも、与えられることもなく。ただ激しい打ち合いが続いている。

剣とビームブレードがぶつかり合いつて金屬音を響かせ、激しく火花を散らす。

「ハア…ハア…」

雅史は焦っていた。残り時間までかなり少ない、恐らく20秒程度…あるいはそれ以下か。

いずれにせよ、このままでは負ける。

この騎士型ネウロイは自分の予想よりも遙かに強い。受け流してからのカウンターを叩き込もうとしたが、高い反応速度を以つて避けられる。

更に相手も受け流してからのカウンターを繰り出してきたのだ。

知的生命体であるとは言え、ここまで知能の高い…そして剣術の実力があるネウロイがいることに雅史は驚いた。

このネウロイは後にウイッチ達の最大の障害となるのは間違いない。何としてでも今、この場で仕留めなければ…！

「…………」

雅史は構えを解いた。

剣の残り時間ももう数秒程度、次の剣を製作し打ち合いつ事はない。

そうなる前に自分が斬り伏せられている。

仮に出来たとしても結果は変わらない。

長期戦は此方が不利なのは分かりきっている。

：勝てる策が一つだけ残されている。これが成功しなければもう手はない、失敗は即ち死。
だが：やるしかない。この程度のこと、何度もあの世界でしてきたでは無いか。

恐れるな、護るモノの為に力を振るえ、命を糧とし突き進め。

「行くぞ…」これがラストだ…！」

魔力回路を開放、「CODE·SATAN 煉獄の赤」を起動 発動させる。

紅蓮の炎がネウロイへと放たれる。無論これが通用するとは思っていない、案の定放った炎はネウロイのビームブレードによつて両断、左右へと別れ消滅する。

だが間合いを詰められるだけの時間は稼げた。

後は渾身の一撃、一気に剣を唐竹に打ち落す！

砕ける音が聞こえた。砕けた剣の破片が目の前を舞つている。
その奥、ビームブレードで刺突を繰り出そうとしている騎士型ネウロイの姿が映つた。

刹那、身体に衝撃が走る。同時に腹部に鋭い痛みが走る、誰が言うまでも無い…騎士型ネウロイのビームブレードが腹部を貫いたのだ。内蔵が損傷し、血が逆流し口から外へと吐き出される。口内に鉄の味が広がる…。

上空からは悲鳴、誰の物かは知らないがウイツチ達が…エイラ達が来たようだ。

「これ……で……いい…」

突き刺さつてゐる騎士型ネウロイの腕を掴む。

「工……程……完了!」つおおおおおおおおつ!…!…!

負傷してゐる左腕を振り上げる。その手には剣が製作される。そして一気に騎士型ネウロイの心臓部へと剣を突き刺した。

自分に残されていた策はコレ。左腕は騎士型ネウロイに斬られ負傷、満足に動かせるることは難しい。

だからこそ、この左腕を使つた。満足に剣を振るつことは出来ないが、この一撃を出すぐらいのことは出来る。

剣は右手の剣が時間切れで消滅すると同時に製作するよひさせていた。

タイミングも完璧。そして右手だけで闘つたのも左手は使用出来ないと思わせる為。

全てはこの為の布石……

人型ネウロイのコアは心臓部にある。

突き刺した剣は完璧に騎士型ネウロイの心臓部を捉えている。

深々と突き刺さっている剣、赤い鮮血が勢いよく噴出す。

「えつー!？」

雅史は驚いた。ネウロイの身体を傷つけたら白い破片となる。それは何度も見ているから分かっている。

だが、この騎士型ネウロイは血を噴出した。

真っ赤な色と血の独特の臭いからして間違いない、これは…本物の血。

ネウロイが黒板を引つ搔いたかのような声を上げながら身体を突き飛ばした。

砂浜を数回転がり、何とか体勢を立て直す。

深々と突き刺さっている剣を引き抜き、騎士型ネウロイは咆哮を上げながら空へと上昇。

そのまま姿を煙のように消した。

「…………」

新たなネウロイとの遭遇。いや、そもそもあれは本当にネウロイだ

つたのか？

血を噴出すネウロイなんて見たことも聞いたこともない。ウォーロックのようにまた新しい軍事兵器か、それとも……。

新たな疑問がまた一つ増えた。

「…………」

だが、まあいい。謎が増えたものの結果としてこの基地を……皆を護ることじが出来た。上空を見上げればこの隊の全ウイッシュが飛んでいる。

皆睡然としている。まあ無理もないだろう。

「ぐ…………」

力が急速に抜けていく。視界が薄れ、だんだん眠たくなつてくる。オマケになんだが寒い……。

慌てふためくウイッシュ達の声が聞こえた様な気がしたが……それを確認する前に意識は深い闇の中へと落ちていった。

以上、初ガチン「戦闘描写」でした。

いやあ、メチャクチャ考えに考えました。その結果こんな感じになつたんですけど…如何ですかねえ。

さて、後編の「武」ではいよいよウィッチ全員との邂逅を果たします。

まだまだ頑張つて執筆します、すわつー！

Act 4：魔術師（偽）【弐】

頬を優しく撫でる心地のよい微風に…ふと、眼を覚ます。

最初に視界に入ったのは天井ではなく、心配そうに顔を覗き込んでいたエイラとミーナの顔だった。

「あ、気が付いた！」

「よかつた」

目が覚めたことで、エイラとミーナの表情から心配が消え、安堵の笑みが浮んだ。

「あれ?」って

「ここは医務室よ。宮藤さんが貴方を治療した後、安藤さんここまで運んでもらつたの」

「お前二田間も跟りつぱなしだつたんだぞ」

「… そうシスか」

ベッドから上半身を起こし、身体の具合を確認する。手足はきちんと動く、騎士型ネウロイのビームブレードに突き刺された腹部には傷一つない。

宮藤の治癒魔法の凄さを身を以つて知る事が出来た。

身体面的には特に問題はなさそうだ。さて、中身の方は…

、

身体機能…正常… 但し性能は120%から76%に低下。

魔力回路：エラー。68%回路に異常発生。

「CODE:BLUE 煉獄の赤」… 使用可能。但しエラーにより制限あり。

・ランク D + + ランクからC + ランクに回復。

・消費魔力量 エラー解消により消費量軽減。

「CODE:BLUE 終焉の蒼」… 術式工程時にエラー発生、よつて使用不可。

「CODE:EATER 暴蝕の黒」… 上記と同じくエラーにより使用不可能。

「CODE:SCYTHE 剣極の調」… 使用可能。エラーにより制限あり。

・エラー解消により製作時間3分から1分に短縮。持続時間1分から5分に延長。

・D + ランクからC - ランクにまで回復。

・剣の掃射 可能。

・「ルーン」の附加 現状通り。

・「ルーン」使用時の製作時間、エラー解消により製作時間短縮。

・「強化」の効果時間、エラー解消により30秒に延長。再度使用時は一分の集中が必要。

・ルーン魔術、使用可能。

あの騎士型ネウロイとの戦いから、三回間の間で少しあエラーが解消してくれていた。

不完全でかなりの制限付きではあるものの、ある程度は力が使えるようになつた。

「ソードサマナー剣極の調」による剣の製作時間が1分までに短縮してくれたこと、持続時間が5分にまで延長してくれたことはとても有り難い。

ランクも一付きではあるものの、ランクにまで回復してくれている。

ランクともなれば、今度はちょっとやそっとじゃ壊れはしない。

未だに蒼と黒の二つの炎を使用することは不可能だが、赤はある程度まで回復してくれている。

今度はより強力な炎を生み出すことが出来る。

「それにしても、二日間も寝ていたのか…。通りで」

腹が減つていてる筈だ。時計がないから分からないうが、多分今昼前ぐらいい。

起きて早々だが昼飯を食いに行こう。

「もう動いて大丈夫なのか？」

「…ええ。とりあえず飯でも食つてきます、腹減りましたから」

「それなら、私達の食堂に来なさい。今宮藤さんとコーネさんが昼食を作つてゐるわ」

「いいんですか？で、昼食兼尋問タイム…ですか？」

「ああ？でも、貴方には色々と聞きたいことがあるわ」

「ツコリとスマイルを浮かべるミーナさん。笑みを浮かべてゐるにとてもなく…怖いです。

お前に拒否権はないぞと、そう物語つてゐる。

「」で拒否すれば後でどんな目に遭うか…。怖すぎで考えたくもない

い。

「…ア解ツス」

仕方なく首を縦に振った。俺だって命は惜しい。

ふとエイラを見ると、お前も大変ダナ…と言いたげな表情を浮かべていた。

同情するなら助け舟を出してくれ、そんな思いを始めた眼差しを送る。

「…ムリダナ（・×・）」

お馴染みのアレで速攻拒否された。

重苦しい空気が食堂に流れている。

「あ、あの…お口に含こませんか？」

宮藤が心配そうに尋ねて来る。

味は誰が言つまでもなく美味。昼食は肉じゃが、肉じゃがなんて食うのは何年振りだつただろ？

それに加えて、これ程美味しい肉じゃがは食つたことがない、そう断言していい。

「いや、物凄く美味しいデスヨ。ウン…ハハハ」

ただ…この場での食事でなければもつと味を堪能出来るのだが。

自分以外全員女性、そしてその全員の視線が突き刺さる。

なるべく顔を合わせないようにしているが、それでも尚視線は此方に向けられたまま。

ミーナは皆に一切注意しない。何故ならミーナも皆と同様…ずっと此方を見ているからだ。

普通そこは行儀悪いとか、料理が冷めるとか皆に注意すべきではないのか？

見世物じゃないぞ、と本来ならば怒鳴つてゐる所だが生憎この中では自分が一番下つ端。

そんな事を発現する権限もないし、何より勇気がない。

故に、楽しくて食事が出来る筈もなく。突き刺さる監の視線に耐えながら何とか肉じゃがを堪能した。

普段なら絶対にするお代わりも、この時ばかりはする気になれなかつた…。

重苦しい空間での食事を終え、それからと整備業に床ひつとして

「あら? 何処に行へのかしこ?..」

「お前は「コッチだ」

ブラックスマイルを浮かべるミーナに見つかり、怪力のバルクホルンに襟を掴まれミーティングルームへと引き摺られていく…。

ミーティングルームでは既に他のメンバーが集っていた。

「立ち話もなんだ。とりあえず腰を下ろすといい

「ウツス…」

「とりあえず椅子に座る。毎食時の食堂同様、またも重苦しい空気が流れていた。

「さてと…お前には聞きたいことが幾つかある。私が言つまでもなく理解はしているだろ?」

「何故魔法が使えるか?」

「そうだ。お前は男性でありながら我等ウイッチと同じく魔法が…魔力が使える」

「以前エイ…コーティライネン少尉にも言つたが、魔女でなければ魔力を持たないって言つ認識は改めるべきだと思う」

「へ? どうして?」

「……ちよつと失礼」

試しに坂本の手を握る。握るとは言つてないが、一応声掛けはした。

手を握られたことに若干驚き頬を赤くした坂本。義理堅い軍人とは言え、やはり異性と触れるここには恥ずかしいと感じるようだ。

そんな坂本の反応を可愛いと思い…ペリーヌにメチャクチャ睨まれる。が、無視。

手を握ったのは坂本の魔力回路を観る為、以前から気になっていたウイッチ達の魔力について。

二十歳を過ぎると魔力を失うというメカニズムについて、それが知りたかった。

擬似アクセスし坂本の魔力回路を調べる。

「……なんだコレ」

擬似アクセスして分かつた。思わずなるほど…、と納得してしまつ。

「ど、どつかしたのか？」

「……ちょい失礼」

「えつーー?」、今度は私ですか?」

宮藤のも調べる。宮藤の家系は年齢が過ぎても魔法が使える家系、もしかしたら…。

「…やつぱつ

宮藤の手を離す。離した際、なんか残念そうな顔をしていたのは…気のせい?

「ちよつとーいつたい何をしていろのー?」

「…」こんな状態で闘つてたのか。そりや常に危ないしガタが来て魔力も尽きる筈だな

「キィイイイイイーツ! 貴方私を無視し

」

ペリーヌが吼える。でも無視する、いわるさいから。

「…なんで二十歳を超えると魔力が失われるのか…その原因が分かつた気がするよ」

その言葉に誰もが驚いた。吼えていたペリーヌも黙り込む。

「そ、それはどういふことだ！？」

「今…少佐の魔力回路を調べたら…」

「し、調べたら…どうなんだ！？」

「…いや、もうよそう。こんな話…」

「…「まだ何も言つてないッ！…」」

全員からのツッコミ。まさかあのサー＝ヤまでもがツッコミを入れるとは予想外だった。

新たな一面を見せてくれたサー＝ヤに「褒美のつもりで頭を撫でる。

すると気持ち良さそうに眼を細めた、使い魔も黒猫だけあり反応も猫のようだ。

「何故だ！？もったいぶらずに早く言え！」

バルクホルンが食つて掛かる。

ド迫力のバルクホルンが視界一杯に映る、流石はカールスラント軍人のバルクホルン大尉。メチャクチャ怖いです。

「…どうしても言わないとダメか？」

「…どうこうの意味だ」

「…まあいざれは言わないとダメだろうし。でも信じるか信じないかはそつち次第…」

後条件として、バレる以外で他の誰かに喋ることは絶対にしない、これが護れたらで…おｋ？」

全員が顔を見合させる。そしてミーナが坂本に頷き、ゆっくりと口を開いた。

「……いいでしょう。その代わり、包み隠さず全てを話すことにして、此方からも条件として提示します」

「元よりつねのつもり。……それで、どうからか話せばいいやつ

「ある程度は包み隠せば、ミーナ達に話すことにした。

Act 4：魔術師（偽）【弐】（後書き）

ようやく全員と邂逅させました…。まあ次話で更に深く、関わらせ
て行きたいと思います。

あ、オリジナルネウロイを出した理由ですけど…。まあ個人的な意
見として、人型ネウロイとの戦闘つてなかつたんですね。

皆でつかい飛行機みたいなのはっかりだつたし。

そこで今作ではオリジナル…人型ネウロイを出して戦闘描写を書い
て行こうと思つた訳であります。

そんな訳で…すわつ…！

Act 5・正体「恋」（恋書也）

Act 5です。

いやあよひへ金圓との邂逅まで行き着きましたよ…。

Hイラ side

扶桑皇国出身、名前は儀國 雅史。年齢は19歳で私より3つ年上。

新米の整備兵として「」、ストライクウェイツチーズ基地に転属となつた。これがアイツの…儀國 雅史の経歴。この場でようやく知つたアイツの名前。

な、なかなかカッコイイ名前してるな…顔もカッコイイし…。

そして…男性でありながら魔力を持ち魔法が使える存在でもある。少佐が言ったように、儀國 雅史という人間は人類初と言える。

何故魔法が使えるのか、その理由が今明らかに

「昔々あるといひて、おじいさんとおばあさんが

「それ昔話じゃないですか！？」

…明らかに

、

「よし分かった、話をしよう。あれは今から364000年前の出来事だったか…いや、昨日の出来事だったか…。まあイー ック（笑）」

「誰だよイー ックって…？」

…全然明らかにされない。

そんなおふざけが暫く続いて、中佐がブラックスマイル浮かべたら儀國は即座に本題へと入った。

「まあ扶桑の整備兵つて言つのは、この世界での俺の役割らしい

「「」の世界での…役割？」

「そう、正確に言えば俺はこの世界の人間じゃない。

並行世界…別の次元に位置する地球から来た人間とでも言つておこう

…儀國の話はあまりにもスケールが大き過ぎた。

並行世界から来ましたなんて言われたって誰も信じない、私だってそんな話信じないぞ。

「おっと、質問コーナーはまだだ。で、俺の住む世界は2010年、ネウロイなんか居ないし戦争もない。

日本…この世界で言つ扶桑でのほほんと暮らしていた

2010年つて…随分と先だな。それにネウロイがいなって…本當かよ。

「はい、一回質問コーナー入ります。質問のある方は元気な声で挙手の方を」

「ハイハイハイ…イッ…！」

ルッキーーが誰よりも早く手を上げる。何だかメチャクチャ楽しそうだな…。

「マサはどうして魔法が使えるの？」

「マサ…せめて最後まで言い切つてくれ。…厳密に言つと「魔法じゃなくて魔術、まあ呼び方はどっちでもいいんだけど。

世界魔術協会つて所に入門して四年間ぐらいそこで頑張ったかな」

「私からも質問だ。その、魔力回路というのは何だ？教えてくれ、魔力の消失についていつたい何が分かった？」

少佐が土下座せんぱりの勢いで儀國に尋ねる。

少佐はもう二十歳だ、二十歳になれば魔力は失われる。

それでも少佐はまだ飛び続けなきゃいけない……前にそう中佐に言つていたのを聞いたことがある。

だから誰よりも必死に儀國に尋ねていた。

「やっぱり、それを知らずに魔法を使ってたんだな……。

魔力回路って言つのは魔力の生成に始まり、魔術行使する為に必要な工程……習得した魔術の術式の選択及び形成、魔術の発現する機関だ。

でだ、坂本に限らず、宮藤を除くメンバー全員魔力回路の殆どが機能してない筈だ」

儀國曰く、インストールされているプログラムを起動させるパソコンみたいなものでもあるらしい。

…パソコンって何だ？

それに宮藤以外……てことは私も含まれてるんだよな。

「さつき坂本を調べたら魔力回路の殆どが機能しない状態なんだよ。

そんな状態で固有魔法と言う膨大なデータ量のプログラムを起動させると…。

本来担う情報処理作業に更に余分な作業まで押し付けることになる。そんな事を続けてみる、いずれ回路自体がついていけなくなり結果

ジャンクカード行きだ

少佐の質問に儀國は答える。

更に分かりやすく言えば人材不足で過重労働している人間が、やがて過労で倒れてしまうのと同じだという事。

そして宮藤の場合、さつき言つた魔力回路がちゃんと働いているから二十歳を超えても魔力がある、と儀國は付け加えて言つた。

「で、ではー私も開いていない…作動していないその、魔力回路がちゃんと機能さえすれば…！？」

「ああ、魔力を失わないで済む。つーか、アンタの魔力回路もう少

しでジャンクヤード行きだつたぞ、間に合つてよかつたな

それを聞いた少佐の表情が明るくなつた。
そして儀國の両肩を力強く掴み、後数cmで口と口が重なりかねない距離まで顔を近づけた。

中佐と大尉が顔を赤くしていた、そして私はイラッときていた。

「頼む！教えてくれ、どうすればその魔力回路を機能させる事が出来るー？」

「と、とりあえず顔近い…後肩痛い」

儀國が言つて、少佐は慌てて両肩を掴んでいる手を離し顔を離れさせる。

それを見て私は安堵の息を漏らした。

「……ん？」

思わず、自分の取つた行動を思い返す。

少佐が儀國に顔を近づけたのを見て、何で私は苛立つたんだ？少佐

が儀國から離れたのを見て、何で私は安心したんだ？

自分でも分からぬ感情が沸々と心の奥底からやつてくる。
この気持ちは何だ？私は…どうしたんだ？

「で、どうすればいい！？」

少佐の声で我に帰る。儀國は少佐に掴まれた肩を痛そうに擦りながら答えた。

「…方法は簡単。機能していない魔力回路に魔力を通して無理矢理作動させる。一度通してしまえば後は大丈夫だ」

「そ、そつか！礼を言つぞ儀國！」

「でもむ…それ、誰がやるんだ？」

シャーリーの言葉に誰もが頷いた。そんな高等なこと私達じゃ出来ないぞ。

そもそも魔力回路の擬似アクセスとか…以前に魔力回路つていう物自体知らなかつたし。

他の誰も同じだろ。

そんなのに、一体誰が……

、

「って儀國が出来るだろ？」

そうだ、並行世界から来たという儀國なら出来るじゃないか。
さつきだって少佐の魔力回路……に擬似アクセスとか言つのしたぐら
いだし、それぐらい出来るだろ。

私の言葉に皆が儀國の方に視線を向ける。すると儀國は心底嫌そ
な顔をし……

中佐のブラックスマイルによつて首を縦に振つた。

魔術が使える儀國でも、やっぱり中佐のあの笑みには勝てないらし
い。

「でもさあ、今の俺ヒラーだらけなんだよ

「ヒラー？」

「そりそり、何かこの世界に来た時何の因果か本来の力が出せない

状態でいるんだよ。そんな状態でやつて失敗して魔力回路が壊れちゃいました、なんて可能性もある」「

「……では、現時点では無理……とこいつ」とか

「もうちょっと回復してからの方がいいかもね」

「もうか……ならば仕方ないな」

少佐が少し残念そうにした。けど直ぐにいつもの表情に戻り、儀園の肩を掴む。

「ではそのエラーが解消された時是非頼むぞー。」

「えつーー?」

「何だ、ダメなのか?」

「いや、まあダメじゃないけど……ねえ?」

「あ、それなら私も……。」

シャーリーが手を挙げて言った。

「魔力回路つてのがちゃんと機能したら、もっと速度が出せるだろー？」

「まあ出せるかって聞かれたら…出せるんじゃない？」

「じゃあ私もその魔力回路を早速作動させてくれよ」

「人の話聞いてたか？今やつたら危険だつて言つてんけど俺は…。つーか俺面倒だからそろそろ帰りたいんですけど…つーかもう帰らせてもらいます！」

信じられない速さでミーティングルームから逃げ出した儀國。追い掛けるシャーリーとルッキーと大尉、面白そつと中尉も走つて追い掛ける。

少佐も儀國を追いかけミーティングルームを飛び出していった。その後ろ姿を中佐は苦笑いを浮かべながら微笑ましく見つめていた。

ペリーヌは何かよく分からぬけビブツビツと怒っていた。

多分少佐の手を握られたことが原因だと細ひ。でもどうでもいいから放置。

リーネと面談は今の状況をじつあればいいか困惑中。そして私は…

「ハイハイ。」

「…私も、ちよつと行ってくる

「…じゃあ私も行く

ナーニヤと一緒に儀國を追い掛ける。

追い掛ける前、一旦部屋に戻つて“アレ”を取りにいった。

Act 5・正体「壱」（後書き）

Act 5「壱」でした。

魔力回路のシステムについてですけど…これはもう完全に夢幻遊戯の妄想による設定です。現段階ではこれで行きますよ。

…また修正するかも。ま、まあその時はよろしくお願ひします！

あ、後どうでもいいことですがタイトルの後に「壱（壱）」は前編後編みたいな意味です。

それでは後編を頑張つて書いてきます、すわつ…！

12/2 21:21分少し修正しました。

Act 5. 出陣 [戦] (演劇)

今回少し短いです。

「ハア…なんでいつなるのかね」

自室にてベッドの上に寝転がり大きく溜息を吐く。

バルクホルン、ハルトマン、シャーリー、ルツキー、坂本の5名に追いかけられ何とか撒いて自室へと逃げ込んだ。

未だにあの5人は俺の事を探しているだろ。

坂本とシャーリー＆ルツキーは兎も角として、何故バルクホルンとハルトマンまで追いかけられなきゃいけないのか不明だ。

「はあ…案外早くにバレたな」

とりあえずある程度の真実は話した。けど、肝心な部分はまだ話していない。

「言つたらショックのあまりぶつ壊れるかもしないし…」

この世界はストライクウェイヴチーズと言つたの一次作品、架空の物として作られていること。

これを言つたらもう…全員睡然としてネウロトイとの戦いに支障が出るかもしれない。

「これは決して言わないよ」とおひつじ。

そんな時、ドアを数回ノックする音が聞こえ

「リリに居たか」

たと同時に扉が開きバルクホルンが入室、その後ろからはハルトマンも入ってきた。

「… なんでここにいるって分かったんだ?」

「ここに来るまでに誰にも見られないようにしたんだけど…」。

「なに、勘だ」

勘でここを一発で当てるとかんだけですか、バルクホルン大尉さん。

「それよりも、お前に聞きたいことがある。以前、お前はカールスラントで小さな女の子を助けなかつたか?」

「女の子?ん~……あつ、もしかしてアレかなあ?」

過去の記憶を呼び戻す。脳裏に映し出される映像、この世界へと来る前の出来事が鮮明に甦る。

今思い返せば、あの燃え盛る街はカールスラントじゃないか。それにあの助けた女の子は…バルクホルンの妹のクリス。

アニメ本編、第一期ではバルクホルンが斃したネウロイの破片により意識を失い、病院で治療を受けていた。

それでバルクホルンは給料の全てを妹の治療費に回し、富藤に妹の面影を重ねて見ていた。

結果意識を取り戻すんだけど…俺がそのフラグをぶち壊した?

「やはりそりが!」

バルクホルンはいきなり俺の手を取ると強く握り締め頭を下げる。

「妹を…クリスを助けてくれて感謝する!」

万力によつて手が圧縮される。なんか耳と尻尾が出てるし、固有魔法の怪力が無意識に出ちゃつてるな。

「つて手ツー！潰れる、潰れるからーー！」

「えつ？あ、ああ！すまない！」

バルクホルンの怪力から解放され、赤くなつた手をヒラヒラと振る。熱が手全体に広がりおまけに痺れる。暫くは満足に握れそうにない。

「すまない…お前には悪い事をした」

「いやいや、いいッスよ別に…ハハハ」

「この世界に来る前に一度カールスラントに来てたんだ。でも…何で？」

「そりゃ俺が知りたい」

誰よりもその事については俺が一番知りたい。

何故この世界へと…整備兵としているのか、ハルトマンが言ひよう
に何故カールスラントに居たのか…。

カールスラントに居たのは…まあ妹のクリスが助かつたからいいと
しよう。

「それと…お前に少し頼みがある」

「頼み？」

「お前の言ひエラーが解消されてからで構わない。
私も…魔力回路と言うのを開いてくれないか？」

真剣な眼差しでバルクホルンが尋ねてきた。

「あの時はお前が居てくれたお陰で妹は…クリスは助かつた。
だが、あの時のようなことは一度としたくない。その為にも力が必
要だ。
だから…儀國！頼む、私の魔力回路を開いてくれ」

「…………」

「見つけた」

「ミリに居たのか」

今度はダウジングを手にしたエイラとサーニヤが登場。何故に？

「…ハア、お前達は何しに来たんだ？」

「わ、私はだな… その… アレだ。私も魔力回

」

「おい儀國、お前またミーナ中佐に呼ばれてるぞ。お前本当に何やらかしたんだ？」

三人目の来訪者、安藤が伝言をしにやつてきた。

バルクホルンとエイラ、サーニヤの姿を見るや否や、慌てて敬礼し部屋を出て行つた。

今度はいつたい何の用だ？まあ、ある程度は検討がつくけど…。

場所は再びミーティングルーム。行くのを渋っていたらバルクホルンと後から合流したシャーリー達によつて引き摺られ、ミーティングルームに赴く。

正面には坂本とミーナ、出入り口の方はバルクホルンとシャーリーによつて固められている。今度は逃がさんと眼で訴えるバルクホルンと、不適な笑みを浮かべるシャーリー。

「で、何の用スか？」

「これからのお貴方の処遇についてよ」

「処遇? ああ、出て行けとかそっち方面ですか」

「違います。明日を以つて整備兵を改め、私達ウイッチ同様“ウイザード”として務めてもらいます」

やつぱりか…、そう心中で呟いた。

「嫌ですよ、俺の役割は整備兵。それ以上逸脱したことほしたくないです」

「何を言つている。お前のその力、使わずにじでりするへ.

「…ぶつちやけ面倒なんですけど

「面倒だと…？情けない、貴様それでも扶桑皇国の軍人

「じゃないぞ、俺は至つて普通…じゃないけど大学生だったんだよ。

おく？」

うつ…と言葉を詰まらせるバルクホルン。何度も言つが俺はこの世界で整備兵といつ役割を与えられただけで、本当なら大学生活をのほほんと満喫している最中だ。

魔術師だからと言つて、毎日がアスレチックな生活を望んでいるわけじゃない。

「それじゃあ貴方に聞くわ。あの時、貴方はこいつ言つたわよね？アンタは…アンタ達は俺が護るつて

「あれ？そんな事言つたっけ俺」

「…………」

「嘘ですスマセン、言いました確かに、認めます」

やはりミーナの怖さは尋常ではない。あの眼に睨まれたが最後、白旗振つて降伏したくなる。それぐらいにミーナは怖い。

確かに言つたのは言つた。でもアレは隊長格を失わない為の台詞であつて深い意味は何もない。

「それじゃ、是非護つてもらおうかしらね。あの時、本当に嬉しかった。それに、またあのネウロイが出たら私…怖いわ」

「アアア、と泣く真似をするミーナ。ミーナってこんなキャラクターだっけ？」

後、棒読み＆下手くそな演技有難う御座います。そんな思いをこの一言に乗せて…。

「バルス」

「…………」

「……失礼しました」

バルスって意味分かってんのか？それとも本能的に馬鹿にされてるつて気付いたんだろうか。

「じゃ、や護ってくれるわよね？」

「……OK、BOSS」

「ひじマーナのグラックスマイルの前に平伏した俺は泣々泣き受けたことだした。

整備兵としてのあの楽しかった日常は……もう一度とやつてこないだ

る。

これから先、俺はどうしていけばいいのや？……。

「それじゃあよろしくね、儀國 雅史さん」

「…………はー」

「うむ、これからよろしく頼むぞ儀國！ハツハツハツハ！」

もつさんの笑い声が今はメチャクチャウザく感じた。

Act5・正体「弐」（後書き）

以上Act5でした。

いよいよウイッチ達との本格的な関わりがスタートします。する予定です。

どうしようかな…まあそんな訳です。次話にご期待。

すわっ！！

Act 6：新生活【春】（前書き）

Act 6です、今回もちょっと短いです。

起床時間を知らせるラッパの音色で日が覚める。

「朝か…」

身体を起こし欠伸を噛み殺しながら身支度を整える。

クローゼットを開く、ハンガーに掛かっている一種類の服。

一つは整備兵としての作業服。

もう一つは自分が所持していた私服、クローゼットを開くと何故か何着があった。お気に入りの白のレザージャケットもある。本当ならばこれを着たいところだが…。

ミーナのあのブラックスマイルが脳裏に甦る。休日のように絶対に着てやると誓い、とりあえず置いておくことにした。

いつもの服装である整備兵の服に手を伸ばす。今日から形は整備兵だが、実質はウイッチ達と同じウイザードとして務めることになった。

立場的には元と変わりない。だが、ウイザードとしてウイッチ隊に配属されてからは宮藤の後輩となつた。

宮藤は自分に後輩が出来たと喜んでいた、そんな宮藤に誰もが笑みを浮かべて暖かく見守つていた。

そんなことよりも…そんなに後輩が出来ることが嬉しかつたのか？

「ハア……」

一応ミーナや坂本は自分の上司、この基地に居る以上は上司の命令には従うしかない。

大きな溜息を吐いた後、整備兵の服装に着替えて部屋を後にした。

昨晩を以つて俺はウイッチならぬウイザードとして務めることとなつた。それは安藤達にもミーナから伝わつていたようで、朝の食堂では質問攻めを受けた。

それが終わり次第、早速自室へと向つ。一先ず、自分が出来ることを行つことにした。

坂本に訓練を誘われたが面倒だと拒否、後で宮藤に訓練に参加しないとダメだと早速先輩面してきたので「CODE-SATAN 煉獄の赤」を発動させ、脅して撤退させる。

顔面スレスレに炎を放つたら慌てて逃げていった。それを宮藤がミーナにチクリ、ブラックスマイルを浮かべて無闇に魔術を使うなど怒られた。

ミーナに怒られたが俺は悪くない、調子に乗った宮藤が悪いのだ。

一方で、私もそれを教えてくれと坂本に頼まれた。その時のミーナはやはりブラックスマイル、笑みを浮かべているが全く笑っていない。

流石の坂本もこれには恐怖を感じたのか、咳払いした後そそくさと訓練へと向つた。

「よし出来た、これでいいだろ？

手にした弾丸を見て一息つく。

弾丸にルーン文字を刻んでいた。先のネウロイのよつに装甲が固い

相手にでも通用するように、かつて自身の剣に刻んだ 貫通 の効力を現すルーンを一発、一発に刻んでいく。

と言つても、全員分ではない。流石に疲れるし面倒だ。だからリーネにのみこの作業を行うことにした。

リーネの所持する5連発ボルトアクション型、ボーアズMk1対装甲ライフル。

55口径の弾丸を使用する分反動は凄いが、その分威力は期待できる。

尤も、リーネは魔法により反動を無効化しているから関係ない話だが……。

だからこそ弾丸にルーンを施していた。何より装弾数が少ないのが主な理由であつたりする。流石に何千発という銃弾にルーン文字を刻むという作業はしたくない。

一先ず十発分、ルーン文字を刻み終えた。後はリーネの固有魔法で魔法力が付加された際自動的に発動する。これならば再びあの硬い装甲のネウロイが現れても大丈夫だろう。

……多分、いやきっと大丈夫！

な筈。

「よし、届けに行くか」

後はこれを本人に手渡し、説明するだけ。ルーンを刻み終えた弾丸をマガジンに装填し、部屋を後にした。

滑走路へと赴く。そこでは大きく息を切らした宮藤とリーネが地面に寝転がり、そんな二人を見据えている鬼教官と化した坂本の姿があつた。

「今訓練が一段落ついたって感じだな

「ハア…ハア…あ、儀…國さん」

「バテバテだな宮藤、お前はスタミナをもつとつかる。それよりも、リネット」

「は、はいー?」

名前を呼ぶと慌てて起き上がった。男性が苦手なのは分かるが、幾らなんでも緊張し過ぎだ、顔色は悪いし手が震えている。

「落ち着け、お前に渡したいものが

「渡したい物ーー?ラブレターですかーー?そんなダメです!わ、私

」「

熱暴走しているリーネの頭に手刀を落とす。はしゃぐ、と情け無い声を出し、やがて冷静を取り戻した。

「違ひ、渡したいのはこれだ

目的の物をリーネに渡す。リーネは眼を丸くしてキョトンとしていた。

「え?と……弾倉……ですか?ラブレターじゃなくて弾倉だ

「そう、ラブレターじゃなくて弾倉だ

からかうと面倒になりそつだから止めて、今は本題のみをリーネに話す。

「ちょっとオプションを付け加えさせてもうつた、ホレ

予めポケットに入っていた弾丸を取り出し、リーネに見せる。

「あれ？ リーネちゃん、弾に何か刻んである

「ほう、これは確か、ルーン文字…と言つたものだな

「そうだ。前に装甲が硬いネウロイが現れただろ？ 対ソレ用の特殊な弾丸だ、敵の防御を無効化するルーンを刻んでおいた。魔法力を付加するとルーンが発動するシステムになつて、これで大丈夫だろ？ 」

「あ、有難う御座います…儀國さん」

「気にするな。それと、どうやらリネット・ビショップ曹長どのは特性弾丸よりもラブレターの方が御所望のよつで。今度熱の籠つたものを送らせてもらつとするかな」

「／＼／＼／＼ツ！－！－？？？」

本題を話したので、冗談でリーネをからかう。

途端に顔を真っ赤にし、煙を昇らせるリーネ。比喩ではなく、本当に顔から煙を出している。マンガみたいな現象、本当に出来たんだな…。

「さてと、それじゃ用事が済んだから俺はこれで

「待て儀國、実は私もお前に頼みたいことが

「だが断わる」

坂本のお願いを速攻で拒否。どうせ坂本が言つ事など決まっている。

「まだ何も言つていなくて」

「私にも魔術を教える…とかじゃないの？」

「そりだ、分かつてゐるぢやないか。ハツハツハ！」

「…だが断わる」

「何故だ！？」

「面倒だから。それに、教えるところとも一々一週間で習得出来ないぞ？」

「モ、そつなのか？」

「そりだ。才能とかもあるナビ…坂本の場合半年ぐらい掛かるんじやない？」

「何だと…？」

魔術を何だと思つてゐるんだ、このもつさんは。そんなちよつと学んだから完璧に出来るよつになりました、なんて馬鹿な話あるわけがない。魔術ナメるな。

魔術師としての才能や血統によつて左右はされるが、少なくとも一

つのカーテンを開けた。一ヶ月以上は掛かるし、酷い場合は半年以上は掛かる。

俺の場合強化やルーンは一週間ぐらいで習得することが出来た。

鍊想術・「剣極の調」は約半年ぐらい。

「煉獄の赤」と名付けた炎は、魔力回路の存在を知つてからは直ぐに出来た。

理由は俺も未だに分かっていない、ただなんとなく……感覚で使えた。

【終焉の蒼】と【暴蝕の黒】は計二年程の月日が掛かった。

それでも“ババア”曰く、短期間の内にここまで習得する方が奇蹟だと言われた。

「そういうこと。それに俺は教えるのが下手だし……何より……坂本今は自重してろ」

「クッ……」

「いいだろ、調子戻つたら魔力回路直してやるんだからそれで我慢しなさい。

それと、暫くは魔力行使：烈風丸を使うのは避けろよ。
ジャンクヤード行った物はもう直せないからな。それじゃ

ヒラヒラと手を振りながら俺はその場を後にした。

オロオロとする宮藤、熱暴走し今だに顔を赤くしたまま煙を上げて
いるリーネ、悔しがる坂本、三人が織り成す混沌な状況を残して…。

Act 6・新生活【春】（後書き）

Act 6「春」でした。今週の更新はこれが最後です。

次話は来週の…水～金辺りで投稿したいと思います。

では皆様、その日まで…すわつ！！

あ、そうそう。主人公の他にもオリキャラ登場させますよ～（予定）
。でもまだまだ先の話なんで、あしからず。

小説投稿出来ちゃいました。

滑走路を後にした後、特にやることもないから基地内を適当に歩いていた。

本当に特にやることなし、やることが見つからない。整備業に戻りたいところだが、自分はもう整備兵ではない。ウイッチ同様ネウロイと闘うウィザードという役目を負わされてしまった。

どうやって闘えと言うのだ？ウイッチはストライカーゴニットがあるが、自分は持っていない。

空を飛ぶ術を持っていないのだ。そんな状態でビジヤツテ闘えと？

仮にストライカーゴニットがあつたとしても…丁重にお断りさせてもらおう。

半ズボンはまあ我慢できると言えば我慢出来る。

問題は使い魔だ。ストライカーゴニットを装着…及び固有魔法を服用すると、自分の契約した使い魔の耳と尻尾が生える。

仮に自分の使い魔が犬系統だつたとしよう。

ストライカーゴニットを装備し、獸耳と尻尾が生えてくる自分の姿を想像してみる。

「…アハ、やつぱつダメだ」

想像しただけで嘔氣が起きた。脳裏に思い描いた仮の自分の姿を消し、深く深呼吸する。

そして改めて、ストライカーユニットを装着して闘わないと、固く誓つた。

「あ、儀國だ」

エイラの声に足を止める。原っぱに寝転がり、その上に置いたタロットカードを見つめていた。

「こんな場所でタロット占いか？」

「まあ、ここでののが好きなんだ」

「ふ~ん…」

「やうだ、折角だから占ってやるよ」

「いや、いい

占いなんものは信じない性分だ。Hイラがしてくるタロット占いに始まり、星座占いから血液型占いまで、どの占いにも一度として当たったことがない。

占い師に見てもうつても結局ハズレばっかり。
だから占いなんものを信じるのは止めた。

占いなんかに頼らなくとも、自分が進むべき道は自分で見つけて切り開いていく。

「そ、そつか……」

占いを断るとHイラは少し残念そうな顔を浮かべた。

意外だった。Hイラのことだから断るとふーん、と言った程度に済ませると思っていたのに。

「……いや、やっぱり気が変わった。頼んでいいか?」

「そ、そつか!仕方ないな、それじゃあ占ってやるか

占いを頼んだ途端元気になるハイラ。一先ず元気を取り戻したので安心した。

「それじゃあ何を占ひつ~。」

「う~ん、テーマか……」

「これと書ひて占ひて欲しい」とはないんだけど……適當でいいか。

「じゃあ恋愛系統で」

「れ、恋愛ー? ほ、他にあるだろー?」

いきなり顔を赤くし怒るハイラ。自分から聞いておいてそれはないのでは?

「いいだろ別に。恋愛だ恋愛」

「う、う…分かったよ。つたく、ショ~がないな」

ブチブチと文句を言いながらも占いを始めるエイラ。占っている時眼は真剣だ、真剣なんだが……未だにブチブチと文句を言い続ける。

「じゃ、結果を見るぞ」

不機嫌な感じでエイラが言つてくれる。

生命の樹形式で置かれた九つのカードが展開され

「あ、いたいた！」

「お~い雅史~」

突如乱入してきたシャーリーとルッキーによってカードは跳飛ばされた。

「なつー!?」

「なんだよルッキーー!」

「ねえねえ！私にも魔術教えてよー！」

「だが断わる。この儀國 雅史が最も好きな事の一つは、魔術を教えると言つてくれるヤツに「NO」と言つて断わつてやる事だ…」

「なんだよそれ、性格悪いなー。いいだろ？別に減るもんじゃないんだしさあ、何かこう、もっと速度が出るような魔術教えてくれたつていいだろ」

だんだん面倒になつてきた。しつこく言つてくれるシャーリーとルッキー、占いも結果を見る前に終わつた。別に興味はなかつたからいいけど…。

エイラはフルフルと身体を震わせながら、蹴飛ばされ散らばつたタロットカードを見ている。

「あ、お前ら〜！〜！」

遂にエイラの怒りが爆発。立ち上がり一人を追い掛ける。

「わ〜怒つた〜！」

「こっげるーーー！」

二人は笑いながら逃げていく。エイラが怒ったのも二人にしてみれば面白いことなんだろう。

それにもしても、シャーリーとルッキーは本当に仲がいいな。まさに姉妹と言つても過言じゃない。

「つたく！何なんだよアイツらは！折角人が儀國と」

「まあそう怒るな。占いなんでものはいつだって出来る。今日はあの一人に乱されたから止めておくとして…。また今度頼む」

「…分かつたよ。ハア…」

深い溜息を吐き、散らばったタロットカードを拾い集めるエイラ。一緒にタロットカードを拾うのを手伝つた後、また当てもなくブラブラと基地内を歩き出した。

その日の夜、いつもの様に鍛錬を行っていた。今日は気分転換も兼ねていつも滑走路ではなく、あの騎士型ネウロイと剣を交えた砂浜。

「工程完了」と

1分、一振りの剣が現れる。剣を作るのにまだ1分という時間を必要とするが、これでも大分楽になった方だ。境界させておける時間も5分へと延びた、これで少しぐらい闘いが長引いても問題は無い。

しかし、もしまだあの騎士型ネウロイと剣を交える時が来た時…やはり速攻戦で攻めなければならぬ。あのネウロイは自分が知るネウロイの中では異常過ぎる存在だ。

ビームをブレード状にして、心臓部を貫いたにも関わらず生きている。そして何より…赤い血を噴出させたことも。

謎が多い存在であるが故、早急に斃した方がいい。こんな時に肝心の一つの炎が使えないことと、通常の炎ですら本来の力を發揮出来ないことが痛い。

次合間見えた時、この状態で勝てるかどうか…。

「ふつ　　ー。」

手にした剣を振るひ。とりあえず、今は訓練に集中する。

ふと、エイラのことが脳裏に過ぎた。今日も滑走路へと来るのだろうか？しかし今日は滑走路で訓練をしていない。その事は勿論エイラは知らない筈。

「…やっぱり滑走路に戻つて訓練した方　　ツーー。」

氣配を感じ、岩場に向つて剣を投擲する。岩に突き刺さる剣、その岩の陰から何者かが姿を現す。

「誰だー。？」

「わ、私ですー。」

「あ、なんだ中佐か

慌てて出てきたのはミーナだった。

「なんで中佐がここに？」

「それは」いつの台詞です。貴方はこんな時間に何を？」

「何つて…鍛錬、後眠れないから。そつちは？」

岩に突き刺された剣を引き抜き、ミーナに尋ねる。

「私は…散歩よ。貴方と同じ、少し眠れなかつたから」

「早く寝た方がいい、夜更かしは美容の敵だし」

「ふふ、そうね」

そう言つて宿舎へと戻る
かと思えば、手頃な方に腰を下ろ
して此方を見つめた。

…エイラの時もこんな感じだつた気がする。

「…帰るんじや？」

「帰つても寝れないのなら意味無いでしょ？眠気が来るまで、ここに居るわ」

「そ、そりが…」

まあ別にいい。ミーナが何処に居ようと俺には関係ない。俺は俺の事をするだけ、精神を集中させ鍛錬を再開させる。

「工程開始」

5分が過ぎ、新たに剣の製作に入る。そして1分後、新たに製作した双剣を持って再び中空に仮想の敵を描き、剣を振るう。

「…………」

剣を振るいながら、度々ミーナの方を横見する。ミーナは相変わらず岩に腰を下ろしてジッと見ていた。その顔は優しい顔を浮かべているが、何処か悲しい顔をしていた。

一時間ほどして鍛錬を終つた。と同時にミーナも腰を上げる。

「さてと、私もそろそろ寝るわ。おやすみなさい」

「ああ……」

ミーナが宿舎の方へと帰つていぐ。と、途中で足を止めた。

「ねえ……」

背を向けたまま、ミーナが話しかけてきた。

「何か？」

「貴方は……いえ、何でもないわ」

気になる様子を見せて、ミーナは再び宿舎の方へと歩いていく。もう足を止めず、そのまま真っ直ぐ帰つていった。

「…何だったんだ？」

ミーナの行動に疑問を感じながら、自分も兵舎の方へと帰った。

Act 6・新生活【続】（後書き）

いつも。前話で次の更新は水～金曜の辺り……って書きましたけど今田の投稿出来るので投稿しましたw。

次話こそ、水～金曜日の間に投稿すると想っています。すわっーー！

Act7・平穂「恋」（恋書モ）

Act7「恋」です、遅くなつてすいませんです！

静かな海岸、そこで鋭い風切り音と共に白銀の一閃が打ち落とす。それを迎え撃つは二つの白銀の一閃。交差する形で打ち落された一閃を力により押し返す。

「くつ
！」

扶桑刀を構えた坂本が僅かに顔を歪めた。

扶桑刀の柄を握っている両手が痺れる、そして目の前には双剣を携え向つてくる儀國の姿が。

「は
！」

右、左と連続して斬撃が飛んでくる。その一撃一撃はとても重く、扶桑刀で防いだとしてもその衝撃は凄まじい。現にこうして、手が痺れている。

外観的に見れば、儀國の筋肉量は普通。土方等と同じぐらいか…あるいはそれより少し上と言つたところ。

しかし、その身体から繰り出されるとは思い難い一撃を放つてくる、しかも連續でだ。

途切れない連撃、それは流水の如く私へと襲い掛かってくる。

防戦一方、私に攻撃させてくれるチャンスは与えてくれないらしい。

「ハア…ハア…ハア…」

「どうした？もうバテバテか？」

そしてスタミナの差。開始してから早一分弱、既に私の呼吸は乱れているというのに、儀國は一切息を切らしていない。平然とした態度で私に切先を向けて見据えている。

これが魔術師…儀國 雅史の力。

「 」

坂本は何とか呼吸を整え、改めて手にした扶桑刀を構え直す。

と、そこで起床時間を知らせるラッパの音が基地より流れてきた。

「つと、もうこんな時間か。早いもんだな」

基地の方へと視線を移す儀國。儀國からは既に闘志は消えていて、また構えも解いていた。それに伴い、両手にしていた剣が小さな光の粒となって儀國の手より消滅した。

「やはり…勝てなかつたか」

自分の非力を恨む。儀國に勝利する事が出来なかつた、それがとても悔しかつた。

「まあそつ落ち込むなよ。結果として俺も坂本に一撃も与えることが出来なかつたからな」

「しかし…これではあのネウロイに勝てん」

あの日の夜、今までに出遭つたことのないネウロイと遭遇した。夜の砂浜で儀國と激しい剣戟を繰り広げていた…騎士の姿に似たネウロイ。

本来ならば放出する筈のビームを剣や刀のよう刃状に形成し、儀國の剣と交えていた。

人型ネウロイを見るのは今回が初めてではない、既にあの時に遭遇している。しかしあんなネウロイは今までに見た事が無い、無論それは私以外の皆とて同じ。

あのネウロイは何だつたのか…それは分からぬ。だが、確実につだけ分かっている。

相手はネウロイ、即ち… 我等人類の、ウイツチの敵だ。

あの時は儀國が己の身体を張り事なきを得た。肉を切らせて骨を絶つ、しかしそんな儀國の決死の一撃も騎士型ネウロイは斃せず。

結果としてネウロイには逃げられ、そして儀國は重症を負い地に倒された。

ネウロイを斃すのは我等ウイツチ達だ。その為には力が必要だ、あの騎士型ネウロイと遭遇し改めて実感させられた。

今会得している烈風斬だけではあのネウロイを斃すことはまず不可能だろう。古代より扶桑皇国に伝わる秘奥義、真・烈風斬を会得さえすれば…。

だが、これで勝てるのかどうかすらも怪しい。だから私は儀國に魔術を教えて欲しいと頼んだ。案の定面倒だと断わられた…。

そこで私はある条件を提示した。古典的ではあるが一番手つ取り早い。

剣で勝負し、勝てば私に魔術を教える事。逆に儀國が勝てば何か一つ、望むことを叶えること。この条件を提示すると意外なことに儀

國が乗つた。

結果は誰が見ても私の敗北ではあるが……。

「さて……約束だ。何か望むことはないか？」

約束は約束だ、勝者である儀國が望んでいふことを叶えなければ……。

しかし、儀國は何故か不思議そうな表情を浮かべた。

「何でだ？俺勝つてないぞ？」

「何を言つ、明らかにお前の勝ちじゃ

」

「いやいや、あれは勝つたとは言わないだろ。ラッパが鳴つたから中断しただけで勝敗は着いてない。だから引き分けだな、こには

「…………」

「ああ、でもどうしてもつて言つなら……。リーナに俺を整備兵に戻してくれって言つてくれないか？ウイザードとして務めてから、や

る」ことがなくて暇なんだ」

そう言つと、腹が減つたと言いながら儀國はこの場から去つていつた。

儀國 雅史という人間は…とても不思議な人間だ。

扶桑皇国出身の整備兵という役割を「えられ」この世界へ…並行世界から来たと言う魔術師。

ミーナとエイラを命を賭けて護り通した男…。

あの日の夜…アイツがネウロイと闘つている姿を見て、何故か胸の奥が締め付けられる感覚に襲われた。

こんな感覚は今までに体験したことがなかつた。不安だとか、心配だとか…そんな感覚ではない、もつと別の何か…。

剣を交えていた今もそうだ。アイツと剣を交えている時も胸が締め付けられる感覚に襲われた。剣を交える前は何故か直視することに気恥ずかしさを感じ、なかなか出来なかつた。

去り際、あいつの笑みを見た瞬間顔が熱くもなつた。これもアイツの魔術の類か何かだらうか…。

「…儀國 雅史、か。全く、不思議な男だ」

手にした扶桑刀を鞘に収める。

一人残された私は去つていく儀國の背中を、見えなくなるまで見つめていた。

坂本の強制試合を終えてようやく朝食にありつく。普段ならばまだのんびりと寝ているのに、今日は坂本に私と勝負しようと叩き起された。

つーかこいつの兵舎まで来るなよ、坂本…。

使わないエネルギーを消費した分、今日は朝食を食べまくろつ。今日はいつも以上に腹が減つてゐるから、飯5杯ぐらいは余裕でいけ

そうだ。

食卓の上に並ぶ朝食、今日は和食の日だ。

この時間は唯一楽しみの時間、ミーナからはウイッチ達と連携が取れる為にコミュニケーション図つておけとか何とか言われているが、せめて食事ぐらいは男連中と食いたい。

流石に女子9割男子1割の空間の中で飯は食いたくない。考え方によつてはハーレムだろうが…どうもあの場は落ち着かない。

「なんか今日は朝から疲れ気味だな」

「まあ、訓練に無理矢理付き合わされたから…メチャクチャしんどい」

安藤と会話を交わしながら食事を勧める。他の皆とも最近はじうだとか、ウイッチ達と仲良くやつてるのかなび、会話を交えながら楽しい食事の時間を過ごした。

やはり、この時間はいい。それが済めば…さて、今日は何が起きるやう…。

そんな事を考へながら本日十杯目のご飯に箸を持つていった。どうやう予想以上に俺の腹は空腹だったらしい、まだまだ入る気がするぞ。

このまま記録に挑戦するのもいいかもしない。

「 『まだ食うのかよ……？』 「

安藤含む整備兵の皆からツツコロが入った。

今田も今田アーラアーラと基地内を歩く。と、珍しいヤシと出会い

「あ、シンシン眼鏡

「私の名前はペリースですッ！…それで…何か御用ですか？」

「こや別に、だじゅ

そのままスルー。ツンツン眼鏡には興味ありません。

「キイイイイイイイツ……貴方、私に對し少し……いえ、かなり生意氣じやありますんこと……？」

「むつ……に居たか」

坂本がやつてきた。途端にペリースはトトレを見せ始める。

「少佐、どうして……ここへ……」

「ああ、儀國に頼み事があつてな。儀國、今日の正午まで手合せを願つ

「またかよ……」

坂本から戦の申し出。そして俺の名前が出た途端に怒りを露にし睨み付けてくるペリース。

「面倒だからやらなーい

「また面倒か…。まつたく、住んでいる世界が違うとは言え、お前も扶桑生まれだらう。扶桑の男児がそんなことでビリするへ…」

「扶桑…日本男児とかどうでもこ ciòよ、別に。つーか今日やつただろ? 一田一回しか受け付けません」

「むへ、ならば明日なうは構わない…そいつは」とだな?」

「制限付けとかないと、何度も相手をせりあわせるからな。これでもサービスしてやつてる方だぞ?」

そいつ言って坂本と笑みを浮かべ合ひ。

「流石に一田の間に何度も手合わせをさせられたら此方の身が持たない。」

「一田一回ぐりいなら…まあ暇潰し程度にはなるから構わない。」

因みにペリースは更に不機嫌になつていぐ。

「もうこう事、じゃ

「ああ、次は勝たせてもらひや

「ハツ、やれるもんならな。後何度も言つけど、烈風丸は暫くは使
うなよ

坂本の不適な笑みに対し、此方も不適な笑みを浮かべて返す。そし
てこの場から去ろうとした時

「あ、いたいた！坂本さん！」

宮藤が手を振りながら駆け寄ってきた。

ペリーヌ side

初めて出会った時から、どうしても気に入らなかつた。

初めて出会ったのはあの日の夜の砂浜。

あの日の夜、何故か胸騒ぎがして夜中に起きた。部屋を出ると少佐も、面藤さんも……顔も部屋から出てきた。

理由を聞けば顔も同じ、胸騒ぎがしたから。やつ答えたと同時に、育つぱり娘……サーニャさんがネウロイがこの基地内にいると言つて、胸騒ぎの正体が分かった。

そしてハンガーへ向つて中佐とエイリヤさんの姿があった。そして砂浜へと出撃して……彼、儀國 雅史と出合つた。

月が綺麗な夜の砂浜、そこには田にしたのは凄まじい剣と剣のぶつかり合い。儀國 雅史の剣と、騎士に模したネウロイのビームブレードが何度も交差し、その度に激しく火花を散らし、金属音を響かせる。

結果、儀國 雅史の身を犠牲にしての一撃によりネウロイは撤退していった。

自身でネウロイに挑んだ勇氣と、その覚悟だけは……まあ……認めてあげないこともないですね。

しかし、少佐に対しあの態度、許されるものではありませんわ！魔術が使えるからと言つていい気になつていてるその態度、どうして

も許せない。

だから、私が少佐に代わってあのふざけた態度を打ち碎いてやりますわ！見ていて下さい少佐！私は必ずやり遂げて見せます！

その為にこの男に決闘を申し込み

、

「あ、いたいた！坂本さ〜ん」

宮藤さんが手を振りながら駆け寄ってきた。

Act7・平穏「壱」（後書き）

ACT7「壱」でした。遅くなつてすいません、何分仕事が…。

次話は今回よりも早くに投稿出来そうです。

すわっ！！

Act 7・母編「紫」（漫畫）

Act 7 「紫」です。

今日はのせさん、母の母のとした話を書きあつた。

…おやんと母の母のになつてゐかな…母信なつす。

Act 7・平穏「弐」

その日の昼下がり、何故か俺はお茶会へと呼ばれていた。

宮藤によると、リーネがお茶会を開いつと企画したらしく、俺もと呼んでくれたそうだ。ミーナも、今田はネウロイの来襲もないし英気を養つておこうと…だそうだ。

ネウロイの来襲がない…本當かよ、と思わずツッコミそうになつた。ネウロイは定期的に、週に一度出現するらしいが…それも今じゃ不定期。いつ現れるかも予測不可能。

それに、あの騎士型ネウロイの件もある。他のネウロイとは全く違う騎士型ネウロイ、あのネウロイもいつこの基地に現れるか分からぬ。

今日か、明日か…はたまた今か。いつ来襲してくるかも分からぬ。

「あ、あの…お味はどうですか？」

不安げな表情でリーネが尋ねて来る。

「ん？ああ、今まで飲んだ紅茶の中で美味しいぞ」

既に飲み干し、空っぽになつたカップをリーネに見せる。と、安心し笑みを浮かべた。

「悪いリネット、もう一杯貰えるか？美味しいし」

「はい。あ、後…私のことはリーネでいいですよ、儀國さん」

「そうか？じゃあリーネ、お代わらフロロ」

「はい」

リーネが一杯目の紅茶をカップに注いでくれる。

…今はいいだろ？折角リーネがお茶会を開き、男性が苦手であるにも関わらず俺もと誘つてくれたのだ。

断わるのは相手に失礼というもの、ネウロイが来ないのならば…それでいい。

それに、リーネが淹れてくれた紅茶は美味しい。あっちでもババアが淹れてくれた紅茶を飲んでいたが、その紅茶よりもリーネが淹れて

くれた紅茶の方が美味しい。

それに手製のスコーンもある。ちょうど甘い物も食べたいと思つて
いたところだ。

…これで野郎が一人でなければよかつたが。贅沢は言つまい。
因みに俺はエイラとサーニャと同じテーブルに着いている。

宮藤・リーネの所には…ペリースがいて睨まれるからバス。
バルクホルン・ハルトマンの所には…何となくバス。
坂本・ミーナの所には…俺の天敵であるミーナがいるからバス。
ルツキニー・シャーリーの所には…落ち着いて紅茶を飲めそうにな
いからバス。

結果、エイラとサーニャの所に落ち着いた。

「うん、このスコーン美味しいな

「なあ儀國、お前つてこいつしてこの世界にいるけど…親とか心配し
てないか?」

スコーンを食べていると、不意にエイラが尋ねてきた。

「あん？大丈夫だろ、そもそも何処にいるのかすらも分からんないし」

「えつ？」

その言葉にエイラ……ではなくサー二ヤが反応した。

「いや俺た、5歳ぐらいからずっと施設で育てられてたんだよね」

「えつ？ えつなのか？」

「ああ、まあ施設長曰くじつしても親と離れて暮らさないといけない状況だったらしい。だから今親が何してるのかとか、全く分からぬ状態…みたいな？くたばつてないといいけどな」

サー二ヤの手前、嘘を言つた。

ネウロイがオーラーシャ侵攻の際に、サー二ヤも親父さんと生き別れになつてゐる。

サー二ヤは今でも親父さんが生きていることを信じてゐる。いつか再会出来る…そう信じてサー二ヤはエイラ達と一緒にネウロイと闘

つている。

そんなサー＝ヤの手前で、自分の両親の話をやめておいた。変に影響を『えて不安させたくない』…。

「やうなんだ……」

「び、びつかしたであつますか中尉殿？」

サー＝ヤが顔を俯かせたことに眼を掛けるも、言葉使いが可笑しくなってしまった。

まさか嘘だつてバレたか？それとも何か不快感を『える』ような事でもしたか俺！？

「…儀國さんのお父様とお母様、きっと…生きてると想います」

「えつ？」

顔を上げたかと思つと、サー＝ヤはまっくつと口を開いた。

「私も……昔ネウロイがオラーシャに侵攻した時、お父様と離れてしました。

けど、何処かで生きてるって……私は信じています。

だから儀國さんも……信じてください。信じていれば……きっと逢えますから

「……ああ、そうだな。確かにその通りだ、うん」

サーニャは優しい娘だ。そんなサーニャの頭を優しく撫でた。

「有難うな。それと……俺に対しても敬語じゃなくていいですよ、立場的には其方が上ですからね。サーニャ・・・・・リトヴァク中尉？」

「え？えっと……」

恥ずかしそうに頬いたサーニャ、もう一度頭を撫でる。

ふと思いつ、サーニャみたいな可愛い妹が俺にも欲しかった……。

「あ、あの……儀國さん？」

「ん？」

「私のこと、サーーヤって呼んでくれね?」

「へ、そつか……じゃあサーーヤでこれからは呼ばせてもいいのか」

やつぱりと笑みを浮かべて少しあく頭ぐ。うん、やつぱりサーーヤでいい。可^か愛^いい。

つづいて思つたがサーーヤみたいな妹が欲しかったと、今なら思える。

「あ……」

「ん? どうしたの?」

「……うつと、何でもない」

何か言いたげなサーーヤだったが、首を横に振つて答えた。

「うしてそれなりにお茶会を楽しんで午後を過ごした。

その日の夜。

「おっ、今日は珍しこお密やんがこるな

いつものように鍛錬を行おうとした。場所は滑走路を選んだ。そして滑走路に着くとエイラが待っていた。その横...サーニャもちゃんと座っている。

「今日はまだじつしたんだ?」

「...エイラに聞いたの。儀國さん、いつもここで鍛錬してゐるんだって

「サーニャが一緒に行きたかったんだ...」

「ふ〜ん、まあ迷惑してないからいいけどな。でもいいのか?夜寝ないと明日に答えるんだ?」

そう言つたがサーニャは小さく微笑んで首を横に振つた。
どうやら大丈夫らしい。

尤も、夜間哨戒を担当しているサー二ヤだ。夜遅くまで起きるのは慣れていて当然か。

「なあサー二ヤ、Hイラにも会つてんけど……見てても何も、本当に面白くないだ？」

「……ううん、私も……儀國さんの訓練、見てみたい」

「……まあサー二ヤがそう言つなり、ゆづくつ見ていけばいいけど

」ひつじてサー二ヤとHイラに見られている元、いつもの様に鍛錬を始める。

が、ものの十数分で終えた。

「世界魔術協会には色々なヤツがいてな、俺の知り合いの中じゃ人形を自在に操るヤツや俺とは反対に水態……水の魔術を得意とするヤツもいたな」

「へえ、私も見てみたいな」

「後、ウチのババアだな…」

「ババア？」

「俺のお師匠様だよ、まあ普段はババアって呼んでる。見た目はメチャクチャ若いけど…例えたらミーナ中佐みたいなもんだ」

「ふ〜ん…ってお前中佐が聞いてたら殺されるだろ」

三人で一時間近く喋つてその日の夜を過ごした。

どうやらお茶会で俺に色々と聞きたかったと、サーニャは言つ。世界魔術協会もある部分を隠しての過去の出来事を話すとサーニャは楽しそうに聞いてくれた。

たまにはじっくり過ごすのも悪くはない、だから今日の講習はお休みにした。

その頃のマーク…

。

「へしゃんー」

ベッドに横になり眠りながら可憐ひこクシャマリを零していた。

Act7・平穏「弐」（後書き）

以上Act7「弐」でした。

今日はほのほのとした話を書きたかったんで、こんな感じに落ち着いたんですけど……如何でしょう。

次話は…多分日曜日ですかねえ。それでは皆様、すわつ！！

Act 8・事件【事件】（前書き）

Act 8「事件」です。

今回はメッシュキャラシリアルで行きますよ～。

朝早く、砂浜へと足を運ぶ。特に理由はないが、なんとなく来たかった。

起床ラッパはまだ鳴つてはいない、それよりも早くに起きてしまった。

二度寝をする時間はもうあまりないと想い、それならばと着替えて身体を解することにした。

少しでも腹を空かしておけば、その分飯は美味く感じる。

そしていつも整備兵の服に着替えて、部屋を後にし、今に至る。

「ん？」

ふと、何かに視線が向く。

「日本……いや、こいつちじや扶桑刀だったな……」

砂浜に突き刺さっている一振りの太刀、それは日本ならぬ扶桑刀。

何故こんな所に扶桑刀が？不思議に思いながらも砂浜に突き刺さっている扶桑刀に近付く。

坂本が振るつている扶桑刀…ではない、かなりの歴史を感じさせる雰囲気を放つていて。

「…………」

試しに、扶桑刀を砂浜から払つてみる。

見事な五の目乱れの刃文と、美しい鏡肌の地肌が顔を現す。

特に変わつた所や魔力による術式が施されたような後もなし。至つて普通の扶桑刀だ。

…ナマクラではない。この刀は間違いなく名刀だ。

恐らく素人の目でも、感覚で普通の刀では無いと認識出来るだろう。この刀にはそれぐらいの強いオーラを放つていて。

…一度鞘へと收め、そつと眼を閉じる。眼を閉じ、刀を握つたことで甦る過去の人生。

世界魔術協会へと入門する以前の記憶が、鮮明に映し出される。

丁度目の前には手頃な岩が。

ほんの少しだけ、久し振りにやつてみるか。

畠藤 Side

ふと、眼を覚ました。

カーテンからは薄つすらと口の光が部屋に差し込んでいる。カーテンを開いて、窓を開く。黒から青へ、日が昇り始めた空が広がっていた。

起床ラッパは…まだ鳴っていない。それよりも早く起きりやつたみたい。

「ふわあ～……あふ……」

下で寝てこむリーネちゅあんを起さない様にベッドから降りて、服を着替える。

起きつけたし、ちゅうと外でも散歩しに行こうかな。

なんとなく、砂浜に来てみる。

「あれ？」

砂浜に誰かがいた。眼を凝らして見ると坂本さん…じやなくて儀國さんがあった。

儀國さんがいるなんて…珍しいな。

エイラさん曰く、儀國さんはいつも夜になると、私達が寝静まつた時間から滑走路で一人鍛錬を行つてゐる。
でもたまにいな時があるんだつて…エイラさんちゅうと不機嫌そうに言つてたつけ。
朝も坂本さんみたいに訓練してゐるのかな…。

そんな儀國さんの手には、何故か扶桑刀があつた。

儀國さんの魔術の一つ、鍊想術^{ソードサマナー}：「剣極の調」は儀國さんが想像した「剣」を創造するという物。「剣」だけじゃなくて、「刀」も造ることが出来るのかな？

そんな事を思いながら見ていると、儀國さんが扶桑刀を携えたまま構えた。

刀は鞘に収めたまま、その状態で腰を少し落とし、抜き手となる右手が柄に触れるか触れないかの、微妙な距離に置く。

その構えは扶桑皇国に伝わる技術：抜刀術（居合^い）。実際に見るのは…初めて。

そんな時だった。

「えつ？」

信じられない現象に、私は思わず我が眼を疑つた。

刀が収められる時に鳴る… 鞘と切羽がぶつかり合^いつ音。カチンッ、と… その音が鳴つた。

途端、儀國さんの目の前にあつた大きめの岩が真つ二つに割れた。

儀國さんは扶桑刀を鞘から抜いていない、だけど…確かに鞘へと収めた音は鳴った。

つまり…眼に見えない程の凄い速さで刀を抜いて、岩を斬り裂き、鞘へと収めた…ということ。

あれも魔術か何かなのかな！？

「つ……！」

私は儀國さんの元へと駆け寄る。

砂浜を踏む音に気付き顔だけを振り返らせる。その顔は何でいい、
と言いたげな顔をしている。

「おはよう御座ります、儀國さん

「ああ、随分と早い朝だな宮藤。宮藤も朝練か？」

「い、いえ。私はちょっと、散歩でも…って

「なるへそ、まあ朝は・イオンが一杯出でるとか何とか言つからな」

「あ、あの、儀國さん…さつきのは何ですか…？」

私は早速儀國さんに聞いてみた。

「さつきの？」

「はい！あの…扶桑刀を抜いてないのに、岩を真つ一いつしたのです
！あれも魔術ですか？」

「いや、あれは一切魔術の類を使つてない。純粹に人の身だけで行
つた技だ」

尤も、エラーだらけの状態ではあれが精一杯、と儀國さんは付け加
えて言つ。

坂本さんの烈風斬も凄いけど…儀國さんのさつきの居合いも凄かつ
た。それも魔術も何も使わないで出来るから尚更凄い。

「儀國さん、お願ひします！私にも…その技教えてください…！」

私は儀國さんにさつきの技を教えてもらひよつにお願いした。

ネウロイをやつけて、一日でも早く戦争を終わらせたい。
今の私は弱い…だから、強くなつてネウロイから皆を護りたい。

「ああ？ダメダメ、お前じや無理だつて」

儀國さんは苦笑いを浮かべながら断わつた。でも、私は退かない。

「一生懸命頑張ります！だから…お願ひします…！」

儀國さんの眼をジッと見つめる。苦笑いを浮かべていた儀國さんも真剣な表情を浮かべて…私の眼を見てきた。

「…畠藤」

暫くして、儀國さんが口を開く。そして…

「ムリダナ（・×・）」

…ハイラさんの真似をして断わられた。

「ど、どひじですか！？」

「いや、単純にお前の技量不足。満足に刀振り回せないお前じや、この技は習得出来ないぞ。

坂本なら、案外出来るかもしけないな…」

「だ、だから私一生懸命頑張り

「…人を斬れる覚悟、お前にはあるか？」

「えつ？」

儀國さんが何かを言った。

小さかったからよく聞こえなかつた……けど、何かを呴いた儀國さんの顔…何処かとても、悲しい顔をしていた気がした。

「…いや、何でもない。兎に角お前じやーダアメダアメ。それにお

前が刀振るつてるのつて、何か似合わないし。
何かさ、刀持つたら振るんじゃなくて、逆に振り回されてるつて感
じがメッチャするな」「

「はう……」

指でバツテソされながら、馬鹿にした態度で言われる。とても悔しい…。

と、そこに起床ラッパが鳴り響く。皆が起床する時間が気付かない
内に訪れていた。

「こんな時間が。さてと、俺はそろそろ戻るわ。腹減ったし飯食つ
てこないと」

手にしていた扶桑刀をその場に突き刺し、大きく伸びをする。

「あれ？この刀、儀國さんのじゃないんですか？」

「ん？ああ、何かここに突き刺さつてたから使つただけだな。
まあ…頑張れ宮藤。お前なら…この技がなくてもきっと強くなれる
ぞ」

そう言つて儀國さんは私の頭を撫でた後、この場から静かに立ち去つていった。

その際、変な歌を口ずさんでいた。

ダメダメボ～ズ今日もダメ～…つて、変な歌だった。

「うう～…悔しい…」

砂浜に一人残された私。

儀國さんに馬鹿にされたことを悔しく思いながら、宿舎へと足を運んだ。

帰る前に、儀國さんが突き刺していつた扶桑刀を回収した。

坂本さんの…じゃないと思うけど。どちらにしても、ここに放つておけない。

「…………」

ふと立ち上まり、目の前にあつた石柱を見据える。

「えいっー。」

居合いをしてみる。けど、儀國さんみたいな事は出来なかつた。
加えて、居合いと呼べるものじやなかつた。

へロへロと鞘から抜かれた扶桑刀。こんなんじやネウロトイどいろか
石ころ一つだつて斬れない。

普通に振つて斬つた方がマシだつて、儀國さんが見てたら絶対に馬
鹿にしてくる。

「うう…私だつて、頑張ればきっと出来る……」苦笑

「ふ～む…」

自室、今日も身体の調子を調べる。以前変化なし、ヒラーが解消さ
れた様子はなかつた。

「まだ治らないか…つたく」

愚痴を零し、ベッドに寝転がる。いつになつたら本調子に戻つてくれ

れるのやう。

こんな時ババアが居てくれたら、このヒターの原因が分かつたが……。

「さて、今日は何をして過るやうかな……」

そんな時、ドタバタと慌しく廊下を走る音が遠くから聞こえてくる。その音はやがて大きくなつていき、そしてこの部屋の前でピタリと止まつた。

そして間髪入れずドアが蹴破られる程の勢いで開かれ、

「た、大変だ儀國！！」

荒しくエイラが飛び込んできた。

「え、エイラ……？」

何故エイラがここ元?

「ど、どうした?」

「た、大変なんだ！ サーニャが… サーニャが…」

「…ッ！？」

只ならぬエイラの焦りよつ、どひやらただ事ではないらしい。

「落ち着け！ まずは何が起きたのか説明しろー！」

「そ、そうだな。と、兎に角来てくれー！ 大変なんだ！」

「分かつた」

サーニャにいつたい何が起きたのか、エイラの後を走つて追い掛け
る中サーニャが無事でいてくれることを願つた。

Act 8…事件「壱」（後書き）

Act 8「壱」でした。

前書きでシリアルアスって書きましたけど、正式には「弐」でシリアルアスがこう、ボカーンと出でてきます。

いつたいサーニャに何があつたのか…！？後編へ続く。

Act 8…事件「弐」（記憶モード）

遅くなりました、後編です。

今回もよっぽり長めになっちゃいましたが…どうぞ。

いつたこサー、ニヤに何があったのか！？シリアスな展開…ドンッ
！！

「ハア？パン…じゃなくて、ズボンが盗まれたあ？」

ミーティングルーム、そこでは半数が怒りと恥ずかしさに顔を赤くし、もう半数はいつたい誰がと真剣な表情で悩んでいる。

エイラによると被害者は5人。

被害者はエイラが言っていたサー二ヤ、ハルトマン、リーネ、宮藤、そしてペリーヌ。

話を聞いたのを纏めると…

サー二ヤの場合。

エイラ曰く、いつもの様に夜間哨戒任務から帰つてきて部屋に寝惚けて入ってきた。

そして服を脱ぎ散らかしたまま眠つてしまつたので、綺麗にたたんでベッドの上に置いておいたとのこと。

そして二人が眼を覚まして着替えようとしたら…たたんだ筈のサー二ヤのズボンが忽然と消えていた、らしい…。

サー＝ヤが寝惚けてエイラのベッドで寝るのはよく知っている。その度にサー＝ヤの脱いだ服をたたむのがエイラの役目。

が、今日は何の因果かサー＝ヤのスペツミみたいなズボンがない。

「…お前がこいつそり盗んだんじゃないのか？」

可能性がない…とは言えない。

サー＝ヤ大好きっこのエイラだ、隠れて匂い嗅いだりとかしても…あんまり違和感がないぞコレ。

「エイラ……本当なの？」

「そんな事するわけないだろ…?バカッ！サー＝ヤも儀國の言つ事信じるなよ～…」

「そーなのかー？」

「…お前、私を何だと思つてるんだ？」

次にハルトマン。

ハルトマン曰く、朝起きたら消えていたとのこと。一応部屋の中は探した、らしい。

「本当に探したのか？部屋散らかってて実は埋もれてただけでした、みたいなネタじゃないのか？」

「儀國、お前は知らないだろ？が…こここの部屋は、とてもじゃないが部屋と呼べるものじゃない。正に腐れきった異空間だ。散らかっている…というレベルではないぞ」

「えへ、トゥルーテが神経質なだけだって」

「わ、私が神経質だと…？」

バルクホルンの言つ通り、…あの「ミミ塵敷と化していく異空間。その何処かに紛れ込んでいるだけだと思つ。

盗まれたと思うよりも、いっちの方が確立が極めて高い。

ハルトマンは…前期にもパン…ズボン事件を引き起こしたこともある人物。

また過去のような力オスの様な展開だけにならない事を願つ。

そしてリーネ、富藤、ペリーヌの三人。

三人曰く、午前中坂本の指導の下訓練を実施。終わった後汗を流しにシャワーを浴び、脱衣所へと戻ったところ各々パ……ズボンが消えていた、らしい。

まだ浴場は出来上がりっていない。今施設班の連中が必死になつて工事を進めているのを数回見たことがある。だからシャワーを浴びに行つたのだろう。

その浴びている最中に何者かの手によつて盗まれた……と言つことになる。

「う～…恥ずかしいよお…」

「スースーする……」

「な、何か落ち着きませんわ…」

各々、ズボンを履いてない今の気持ちを語る。ペリーヌ除き、富藤とリーネはギリギリ見えるか否か、ちょっとでも服を捲ればその先に待つているのは…。

「な、何いやらじこ眼で見てますのー。」

「失敬な…シンシン眼鏡。で、まあズボンが盗まれたのは分かった。で、犯人は誰かってことになるよな…」

なんとなく、ルッキーに眼を向ける。

「いやつー、わ、私じゃないよー…ちゃんと履いてるもんー。」

田が合つた途端ルッキーは慌てて両手を横に振りながら否認した。前期のは…まあ容疑者でもあり、第一の被害者でもある。

だがパン…ズボンを盗んだことは変わりない。前科一犯、過去に犯した罪は今も尚疑われる要因となる。

そんなルッキーは自分は無実だと証明する為に、服を捲つて青と白のストライプのパン…ズボンを堂々と見せる。

私はちやんと履いているぞと、田で訴えてきた。

「分かつたからどうあえずやめや、はしたないぞ」

「けど、いったい誰が宮藤さん達の服を盗んでいったのかしら?」

「あー一ついいか?パ……ズボンを盗まれたのはよく分かった。けどさ、何で俺呼ぶ必要があるんだ?中佐か誰かがエイラに指示を出したのか?」

エイラが慌てて部屋に駆け込んでくるや否や、サーニャが…と叫つからどれだけ重大なことかと思えば…くだらない。

エイラにしてみれば一大事なのかもしれないが…。

「いいえ、私は何も…」

坂本やバルクホルンも首を横に振る。つ。

「うう…だ、だつてしようがないだろ!…どつじょひつて思つたら、何か儀國に言わないとって思つたんだよ!」

恥ずかしさを誤魔化すように、エイラは声を大きくして言つ。信頼されている…ということかな。それはそれで嬉しいと思つ。

「まあ大変なのは分かつたけどさ、俺は帰るぞ。ズボンを探す魔術

なんて習得…つーかそんな魔術すらないし」

「おじ儀國、お前も我らと同じウイッチの一員だろ。ならば仲間を助けないでどうする?」

「危機に瀕してたらそつや助けるよ。けど、ズボンなくなつただけだろ?」

ゆっくり探してみりよ、せつと部屋の向處かにあるつて」

そもそも一着しかないのか?給料貰つてゐなう予備に何着があるだろ普通。

ないのか?予備は皆洗濯中なのか?

「まあ見つかるといいな。そんじゃ、シーコーアゲイン」

手をヒクヒクと振りながら、ミーティングルームを後にした。

「つたぐ、何事かと思えば…くだらない」

文句を言いながらウイット達の宿舎廊下を歩く。

人騒がせにも程がある。たかがズボンを盗まれたぐらいで何を大袈裟な、予備をもつと沢山持つておけと言いたい。

「ハア……あん？」

目の前を、何かが横切る。よく見えなかつたが、小さな動物のようにも見えた。

「なんだ？」

小走りで、動物の様な何かが消えた方へと向つてみる。

そこにいたのは…イタチ？いや、イタチにしては少し大きい気が…

「ツー！」

瞬間、そのイタチに向つて拳を打ち落とす。

軽々と避けられる、放つた拳打は虚しく空を切る。

「イツは只のイタチじゃない、ネウロイだ。

よく見れば眼や鼻がない。それに黒い毛並みと思つた身体、近付いてみれば毛は一切無い。滑らかなボディに赤い模様、それは間違いなくネウロイのもの。

虫型のネウロイはフ話で登場したのを覚えている。が、動物でイタチ型というのは初めて目にした。

この世界に来てから変なネウロイばかりと遭遇している。ウイックチ達の攻撃を物ともしないネウロイ、ビームをブレード状にし血さえ流す騎士型ネウロイ、そして…今日の前にいるイタチ型ネウロイ。

いつたい何が起きているのやら…。

「IJの…待て…」

「CODE-SATAN
「煉獄の赤」で一気に燃やしてやりたい。が、IJは宿舎…火事になる可能性がある。

それに加えてあのイタチ型ネウロイ、とんでもない物を持っていた。

「何でお前がアイツ等のズボン持つてるんだよ！？」

なんと、イタチ型ネウロイの口…の部分に皆のズボンが咥えられた。従つて傷付けることも、燃やし尽くすことも出来ない。

それにしても…なんなんだ、このネウロイは。宮藤達のズボンを盗んだ犯人は分かった。

が、何故ネウロイが？ある意味面白いネウロイだが、その動機が全く分からぬ。

ネウロイにも性欲とか、フェチみたいなものがあるのか？

だとしたらこれは凄い発見だ、是非この世界の学会とかで発表したい。

全否定されるのがオチだらうけど。

「ちつーーー！」

左フックを放つ。当たりはしなかつたが、掠つた。そしてリーネのズボンをイタチ型ネウロイから奪い返した。

「何事だ！？」

坂本達がやつてくる。そしてネウロイを見て驚愕の表情を浮かべた。

「ああ、今ズボンを盗んだ犯人を

」

「…犯人は、貴方だったのね」

「見つけ……は？」

「ひ、酷いです……」

「見損ないました！」

泣きそうになるリーネ。その親友である宮藤は怒りを露にすする。他の皆も軽蔑と怒りの眼差しを向けている。… つてちょっと待て！

「何で俺が犯人なんだよ！？俺じゃなくてアイツだってのーーー！」

確かに俺は今、リーネが今日履いていたパ……ズボンを握り締めている。が、それはあのイタチ型ネウロイから奪い返しただけであり、

「俺が盗んだわけじゃない！」

「アイツって何処だ？言い訳をするとほ…見苦しいぞ儀國 雅史」

「えつーー？」

「逃げられた！？」

バルクホルンに言われて振り返ると、既にイタチ型ネウロイの姿は何処にもいなかつた。

「儀國…お前とはじっくり話し合いつ必要があるようだな」

背中の扶桑刀を引き抜く坂本さん。顔は笑ってるが怒っているのが一目瞭然。

獣耳と尻尾が現れる。怪力発動してますねバルクホルンさん。

ミーナは語りず、いつものブラックスマイルを浮かべている。

けど俺はやつてない！

「異議ありー！俺は無実だー！無実を主張するー！」

「最低だぞ儀國！さつさとサー二ヤのズボン返せ！！」

「……儀國さん、返して下さー」

「あ、逃げた！」

「待て、雅史、！」

とりあえずその場から離脱する。

疑われている今、自分の命が危機に瀕している今、無実を証明しなければならない。

あのイタチ型ネウロイをなんとしてでも捕まえて取り返さなければ

こんな馬鹿な理由で死にたくない。あの誓いを立てた以上、その誓いを必ず守る……！

逃げる前、リーネにズボンを投げて返す。たわわな胸にズボンが張り付いた音が小さく鳴った。

「ハア…ハア…あのクソイタチ、何処に行つた！？」

坂本達の追跡から逃れながら、イタチ型ネウロイを捜索する。見つけたらただじや おかない、一瞬にして燃やし廻くす…なんて生易しいことはしない。

長い時間を掛けて恨みを晴らしてから、この世から葬り去つてやる

…！

「つたぐ、何処に…ツー？」

咄嗟に身を屈める。と、頭があつた位置に赤く細い二つの光線が空へと向つて伸びた。

茂みが動く。身を屈めて赤い光線を避けて、間髪入れずにそこに蹴りを放つた。

茂みに突っ込む蹴り。そしてそこから飛び出す黒い身体の憎いヤツ
…イタチ型ネウロイ。

「うやうやしく」のイタチ型ネウロイ、ビームまで撃てるよつだ。
本来のネウロイのように極太なものではないが、それでも人一人殺
せるぐらいいの殺傷能力はある。

もうズボンが二つの二つの言つてている場合じゃなさそうだ。この場
で絶対に潰す！

「見つけたぞコノヤロウー！」

イタチ型ネウロイを追い掛ける。イタチだけあつて足は素早い、そ
して未だに富藤達のズボンを口に銜えている。
いつたいそれを何に使う気なんだ！？まさか…代わりに履くのか…？

「この…大人しく俺にブチ殺される…！」

「お前がだ、儀國！」

「げえつ…？ 関羽…じゃなくてバルクホルン！」

「私もいるよん」

「げえっ！ハルトマン！」

ジャーンという効果音が何処からか聞こえた。気がした。前門の虎ならぬハルトマン、後門の狼ならぬバルクホルン。カールスラントのエースが立ち塞がる。

「もう逃げられんぞ儀國、觀念して皆のズボンを返せ。そして謝罪し」

「私のズボンなんか盗んで……何が目的なのかな？」

バルクホルンは怒っているが、ハルトマンは楽しそうだ。

「お前等見てただろー？さつき『』にいただろー！？」

と、イタチ型ネウロイがいた場所を指差すが、またも姿を消していった。

「何がいたと言つんだ？早く宮藤の服を返すんだ！」

怪力を発動させたバルクホルンが突っ込んでくる。このシステムコンが

！！

「よつと」

掴もつと伸ばしてきた腕を捌き、そのまま背後へと周る。

「何ー？」

「はー、残念でした～また出直してきな～」

そして一気にダッシュ。後ろは決して振り返らない、ひたすら前を逃れることだけを考える。

「待て儀國ー罪を重ねるのかー！？」

「待てと言われて止まるヤツがいると思つかー？後向回も言つてゐけど俺は無実だつてのーーー」

バルクホルンとハルトマンの追跡から逃れながら、イタチ型ネウロイを搜索に当たつた。

ペリーヌ side

「まつたく！あの男はいったい何処に逃げたのかしら！？」

ズボン泥棒という罪を犯した大罪人、儀國 雅史を追つて基地内を搜索する。

まさか、こんな外道な事をするとは……やはりあの男は最低な人間ですわ！

私のズボンを盗んだだけでなく、他の皆のズボンまで堂々と盗むとは許されることではありませんわ。

そ、そのせいで……擦れる。

「おのれ何処に……あら？」

目の前に何かが飛び出す。それは小さな動物だった。

黒い身体に赤い模様の入った、何とも奇妙な動物。その動物の口には

「わ、私のズボン！！」

儀國 雅史に盗まれたと思ったズボンが銜えられている。私のだけじゃない、富藤さんのや育つ張り娘も…。まさか、この動物が犯人！？

「よ、よくも私のズボンを…！」

「ペリー・ヌー・ソイツから離れろ…！」

後ろから儀國 雅史の声が。振り返ると儀國 雅史が此方に向つて走つてくる。

「ぎ、儀國 雅史！」

「ペリー・ヌー・危ない…！」

「えつ？きやつ…！」

儀國 雅史に突き飛ばされる。地面へと倒れるまでの間、全てが遅く見えた。実際には一秒程度のこと、けどこの時は何秒、何十秒と感じられた。

その中で私が見たもの。私を突き飛ばした儀國 雅史、その前には私や他の皆のズボンを銜えた黒い動物が飛び、

「えつ！？」

額部分にある赤い模様から細く赤い光線が放たれた。

この時私は理解した。この黒い動物は…ネウロイ。
何故最初に気付けなかつた…、あんな毛がなくて、赤い模様の入つた黒い動物がいる筈なのに。

そして動物型ネウロイが放つた光線は、儀國 雅史の左肩を貫いた。

「ぐうつ！…」

貫かれた儀國 雅史の左肩。そこから血が噴出す。

「ギー、儀國　　」

「燃え尽きり、このクソイタチ！…」

右手で素早く動物型ネウロイを捕まえて、赤い炎…「CODE・SATAN 煉獄の赤」で包み込んだ。

轟々と燃え上がる炎、動物型ネウロイは「CODE・SATAN 煉獄の赤」の炎によつて、やがて跡形もなく消滅　　燃え尽きた。

「ハア… ギー、大丈夫か？」

「……………ハツー・ギー、儀國さん！」

「お、なんだ… 急にさんで呼ぶなんて、明日は嵐か大雪か？」

ネウロイのビームに貫かれた左肩。痛々しい傷が破れた服から見え、そこからは血を流している。

けれども儀國 雅史は平然とした様子で、いつもの様な態度を取っていた。

「「」たな時までふやけている場合ですか！？貴方、私を庇つて怪我を…」

「「」たなの怪我の内にも入らないって、心配すんな」

「あ、いた！ってあれ？」

「「」じつしたペリース… つて儀國！肩から血が…」

他の皆が集つてくる。儀國をさばく宮藤さんの治癒魔法によつて治療を受けた。

ミーティングルーム。

「すまん、俺が燃やした」

とつあえず頭を下げる謝る。机の上には黒焦げになり、炭と化した宮藤達のズボン…だったもの。

「仕方があるまい。まさか、ネウロイが犯人とは誰も思わなかつたからな…。しかし、すまなかつた儀國」

「私もだ、疑つてすまない…」

「「めんなさい…儀國さん」

皆が頭を下げて謝つてくれる。

「やめてくれよ、別に謝れる」とはしてないし。原因はあのクソイタチだろ?」

「確かに…あんなネウロイまで現れると…」

「サー二ヤのアンテナでも感知出来なかつたもんな…」

サー二ヤ曰く、ネウロイの気配を全く感知出来なかつたといつ。

サー二ヤの固有魔法は『全方位広域探査』、サー二ヤのアンテナは様々な電波を感じることでレーダーとしての能力を果たしている。

その能力に引っ掛けからなかつたということは…恐らくステルス機の
様な能力を持つたネウロイだったのかもしれない。
なんにせよ、事が大きくなるまでになんとかなつてよかつた。

「…」めんねわー、儀國さん」

サー二ヤが申し訳なさげに謝つてくる。サー二ヤに責任はないが、
疑つたことに罪悪感を感じているのだろう。

「気にすんなよ」

人間誰しも完璧といつことはない。間違いは誰にだってある。ただ、
その間違いで危うくこの世とおさらばしそうにはなつたが…。

「でも、何であのネウロイは私達の服を？」

「さあな。大方疚しいことでもしようとしたんじやないか?…宮藤と
か普通に可愛いしや」

「えつ?／／／」

「まあ、犯人は見つかっただけでお前等のズボンを燃やしたのは悪かつた、それだけは謝つておくわ。さてと、俺は行くか」

席を立ち、出入り口へと向う。

「ど、何処に行くんですか？」

「飯だよ、昼飯。ドタバタしてたら腹減ったしな」

リーネの問いに答え、ドアノブを手を掛けた

、

「あ……あのー」

その時、ペリーヌに呼び止められる。

「あん？」

首だけを振り返らせペリーヌを見る。何か言いたそうにしているが、何か戸惑っているように見える。

「なんだよ、用がないなら俺は行くぞ。」

「お、お待ひなさいー。そ、その……あ、儀國さん

「……ああ」

「あ、先程は、その……ありがとうございます」

小さく、耳を澄まさなければ聞き取れないとぐらこの声で、ペリーヌが礼を述べてきた。

「……フジ、ああ。気にすんなよ、ペリーヌ」

そうペリーヌに返して、ミーティングルームを後に出した。

ペリーヌも意外に可愛いくてうるさがあるな……

まずはすこませんでした、つい調子に乗っちゃいました。

今回何故このような作品にしたのかと言ひと、【スースーするの】や【モゾモゾするの】みたいな、ギャグを取り入れたものを書いたいと思い、この様な作品にしました。

ギャグになつてゐるのか微妙な出来合いですけど……ね。

初期段階では、リーネがこけてオリジナルネウロイであるイタチ型ネウロイをおっぱいで潰し、儀國から史上最強のおっぱいを持つ女としてネタにされる、つてのも考えてました。

ミーナが虫型ネウロイをお尻で粉碎したのを見て、思いついたネタなんですねけど……。

でも冷静になつて考えたらすこぐバカみたいだと感じお蔵入りにしました。

もし何かの機会があれば、番外編・Act EXとして載せるかもしれません。

以上、Act 8「弐」でした。すわつー！

次はいつ頃更新できるかな…。

Act9…終論の着（偽）【脚】（前編）

遅くなつました、Act9【脚】です。

今日は冗談抜いて、真面目な話のつまつです。

「ふつーはあつーーー！」

今日も今日で坂本の試合に付き合つ。一日の内に何処かで必ず一回は坂本の試合に付き合つこう約束を交わしている。

勿論勝てば勝者の願いを聞くというオマケ付き。相変わらず坂本は魔術を請つことを諦めていないようだ。

俺は特に願いはないから勝てばそのままにしてくる。

交わした以上は守るのが道理。坂本が納得するまで試合に付き合つしかない。

が、負けるつもりは最初から無い。^{ハナ}

そして今日はどういう訳か、ギャラリーが多い。今頃書類の山と戦っているミーナと、未だ眠っているだらう寝坊助のハルトマン、それを必死に起こしているバルクホルンを除いて、今日は全員いる。

この時間帯は絶対に寝ている（Hイラ談）サーニャですり、起きて坂本との試合を見ていた。

「はああああつーーーー！」

「ほい

剣を振るい、坂本の扶桑刀を弾き飛ばす。回転しながら宙を舞い、砂浜に鋭い切先が突き刺さった。

「また俺の勝ちだな、坂本」

「ぐつ… また私の負けか」

歓声が上がる。凄いと慕ってくれる富藤と控えめなリーネ、まあまあだとエイラに、拍手をくれるサー二ヤ。

ペリーヌに限っては睨まれている。まあペリーヌは坂本大好きっ子だから仕方ない。

シャーリーとルッキーに至っては退屈そうに見ていた。

「いい加減諦めたら？」

突き刺さる扶桑刀を引き抜き、坂本に返す。

「いや、私は絶対に諦めない！次は…明日こそは必ず勝つ！」

「まあ頑張りな、毎回俺の勝ちで決まりだらうけどな」

「なあ儀國へ、いつになつたら私の魔力回路開いてくれるんだ？そろそろ大丈夫じゃないのか？」

シャーリーが不満げに言つてきた。

確かに坂本やシャーリーの魔力回路はまだ開いていない。シャーリーの言う通りもうそろそろ大丈夫とは思つけど…。

今まですっかり忘れてた。

「ねえ～、私にも魔術教えてよ～」

シャーリーに続き、ルッキーも駄々を捏ね始めた。
更に意外な増援が彼女達に加わる。

「わ、私も……魔術、教えて欲しい」

なんと、あのサー＝ヤまで魔術を教えると言つてきたのだ。
いつたい何故だ？

「ヤ、サー＝ヤ！？う…サー＝ヤが教えてもらひながら私も教えて
もらひながらな！」

サー＝ヤが発言したことでエイラも加勢。

「あ、私も教えて欲しいです！…いっぱい憶えて、一日でも早くネ
ウロイとの戦争を終わらせたいんです！」

富藤も参戦。悪いが富藤、そんなにいっぱい教えられる程得して
ないぞ…俺は。

「わ、私も。ルーン魔術、教えて欲しいです…」

男性が苦手なリーネまでも。そこまでして魔術を学びたいといつのかお前達は。

まあペリースは流石…

、

「わ、私は少佐の為に役立てるのなら何だって憶えますわー・儀國さん、教えなさい！」

お前もかブルータス、じゃなくてペリーヌーーー！

「おいおい、勘弁してくれよ…。俺が習得したのは殆どが攻撃系統だ、しかも偏ってる。それに補助系統は殆ど憶えてないぞ」

本格的に魔術を学びたいのなら世界魔術協会に入門すればいい……無理だけどな。

一応基本として学んだ強化と適当に学んだルーン魔術ぐらいは教えてやれないこともないが…やつぱり面倒だからパス。

そういうのは俺の役割じゃなくて、あのババアの役目だ。

「うー…せうだーじゃあ私も勝つたら教えてくれるーー？」

「へつ？」

ルッキーーの発言に思わず間の抜けた声を出してしまった。

ルツキーに続々、シャーリーが続けて言葉を放つ。

「もうだな、タダで教えないって言つとなら…力ずくって方法もあるよなあ」

悪巧みを考へてこね笑みを浮かべ、ジロジロと迫つてくるシャーリーとルツキー。

「…………あつー。」

何もない方向を指差す。「こんなブーバー・ラップに引っ掛かるわけが、

「「えつー。」」

引っ掛けた!?単純だな」の一人、富藤だつて引っ掛けられてないぞ。まあその隙に…

「あ～ばよ～とつあん…～どけーっ、ヤジ馬ビヨーっ…。」

逃げさせてもうね。

「あ、逃げた！」

「追いかける〜！！」

シャーリーとルッキーが追い掛けてくる。坂本も何か扶桑刀片手に追いかけてきた。

せめて刀を鞘に収める、ちょっと八墓村思い出してしまったぞ！

そんな感じで、ウィッチ達の追跡から逃れて大半の時間を過ごした。

この基地、ストライクウィッチーズの世界に来て大分時が経った。
エラーだらけのこの身体、今日の検査結果は……。

身体機能…正常…但し性能は120%から83%に低下。

魔力回路…エラー。57%回路に異常発生。

「CODE: SATAN 煉獄の赤」…使用可能。但しエラーにより制限あり。

・ランク C+ ランクからBランクに回復。
・消費魔力量 エラー解消により消費量軽減。

CODE: BLOW

「終焉の蒼」…エラー解消により使用可能。

・使用後身体異常発生、及び魔力回路の暴走99.9%。

【**暴蝕の黒**】… Hラーにより使用不可能。

【**剣極の調**】… 使用可能。エラーにより制限あり。

・エラー解消により製作時間1分から30秒に短縮。持続時間現状と変わらず。

・C-ランクからBランクにまで回復。

・剣の掃射 可能。

・「ルーン」の附加 現状通り。

・「ルーン」使用時の製作時間、エラー解消により製作時間短縮。

・「強化」の効果時間、エラー解消により1分に延長。再度使用時は25秒の集中が必要。

・ルーン魔術、使用可能。

よつやく半分ほどまでHラーが解消された。未だにエラーが解消される条件が分からぬが、解消されていることに変わりない。素直に嬉しいと思う。

CODE:BLUE

お陰で「終焉の蒼」が使えるようになってしまった…が使用すればそれは爆弾の導火線に火が付けられるというペナルティ付き。

完全な使用が出来るまで、使う時が来ないことを祈ろう。

今日の夜もいつもより鍛錬を行つ。今日は向となく砂浜で鍛錬を行つことにした。

そして今日も恐らへ、アイシはやつてへるだらう。

「今日も鍛錬?」

「中佐か…」

噂をすれば何とせり。天敵のリーナがやつてきた。

滑走路で鍛錬を行えばヒイラが、砂浜で鍛錬を行えばリーナがやつてくる。

それもほぼ高確率で。余わない方が少ない。

「あら、私だけ中佐?」

「まあ隊長ですから…」

アンタを呼び捨てにする勇気を今は持ち合わせていない。
仮に言えたとしても…その後確実にブチ殺されてDEATH

END

「で、そつちひりや今日も眠れなくて？」

「ええ、だからひりして散歩したら貴方の姿が田に入ったのよ」

「さこですか…」

まあこれもいつものこと。ミーナがいつもの場所に腰を下ろしたのを合図に鍛錬を開始する。

今日も今日で剣を振るひ、剣が消えればまた新たに製作し剣を振るう。

後ろではミーナがただジックと見つめている。エイラと違い、ミーナの場合は会話という会話がない。鍛錬の邪魔をしては悪いこと思つてゐる為の気遣いか。これはこれで案外寂しい。

エイラとは鍛錬中にもよく会話を交えていた。寂しいと思つのはそのせいかもしない。

尤も、鍛錬中に誰かと喋りながら行うという行為自体間違つてゐる。もしこの場に“あの人”が居たら…今頃怒られて飯抜きにされているな…。

「…ねえ」

そう考へていたところに、ミーナが話しかけてきた。

ミーナ side

今日も砂浜へと向づ。今日もややぱり彼の姿があつた。

魔術で生み出した剣を両手に、中空に振るうつ並行世界から来た魔術師：儀國 雅史の姿が。

「…………」

儀國 雅史という人間は結構いい加減な人間^{ひと}…。

面倒臭がりで、上官である美緒やトゥルーデにも普通に名前で呼ぶぐらいた。真面目な話でもふざけたりする。
けど、何故か彼だと許してしまつ… そんな気持ちになつてしまつ。

私は未だに中佐としか呼ばれたことがないけど……。

そんない加減な彼だけど、その実とても心が優しくて……己の身も顧みず助けようとする強い正義感が彼にはある。

あの日の夜、彼が身を挺して……己を犠牲にしてまで逃がしてくれたから、私もエイラさんもこうして生きている。

彼が私を……私達を護ると言った時、正直嬉しかった。けど同時に、今は亡き幼馴染の姿が彼に重なつて見えた。

彼が人型……騎士型ネウロイの刃を受けて負傷し倒れた時、私は酷く動搖していた。治癒魔法で治療していた宮藤さんを急かしてしまった。

あの時の出来事を、不意に思い出してしまうたから……。

そんな私を安心させる為にか、地に倒れている彼が手を握ってくれた。この時彼に意識はなかった、けどその手は私の手を優しく握ってくれたのだった。

あの時の彼の手は……とても暖かくて心地良かった。

そんな彼は直ぐに他の子達と打ち解けた。ペリーヌさんは未だに彼に対し敵対心をむき出しているけど… 最近では若干和らいだと思う。

美緒は一日に一回、必ず彼と試合をする。今の所儀國さんには負けているけど、美緒はいつも楽しそうに儀國さんとの試合について話している。

剣術がどうとか、攻め方がどうとか。そうやって話している美緒は本当に楽しそうだ。

そんな彼にも… 彼が居た世界で彼の帰りを待つている人達がいる。友人た恋人… あるいは婚約者等。

それに5歳の時に離れ離れになつた… きっと何処かで生きている彼の両親もきっと、大きくなつた儀國さんを迎えて行つている頃かもしれない。

「ねえ…」

「んあ？ 何？」

「貴方は… 寂しくない？」

以前彼に尋ねたかったことを…私は今彼に尋ねた。

この世界では彼は天涯孤独。周りは自分の知らない世界。
誰一人として自分を知る人間はない。

いつも面倒臭そうに欠伸をしたりしているけど…きっと心の何処か
ではきっと寂しさや悲しさを抱えている…。

「寂しい？俺が？」

「貴方の世界にも、貴方を心配して…待っている人がいるでしょ
う？友人、恋人、離れ離れになつた両親だつて」

「ああ、それはないな」

剣を振るう手を止めて…ハッキリと、表情一つ変えずに儀國さんは
言い切つた。

「前にお茶会で言つてたけど…施設に預けられたつて言つの嘘な
んだよ。

両親は俺が5歳の時に死んだ…いや、正確には殺された…だな」

「えつ？」

私は耳を疑つた。

殺された…？ いつたい誰に？ 何の為に？

「まあ大人の事情つてヤツでな。あの時の俺は何が起きたのかさつぱり分からなかつたけど…。

大学にいた奴らは本当の意味での友人じやないし…。あつち側でも…友人つて言えるヤツはいなかつたかな…。

後、恋人は元から居ないから。おつと笑うなよ？」

彼は特に興味なさ氣に自分の事を話していく。その表情には悲しみも寂しさも一切見られない、普通に世間話をするように彼は喋つていた。

「だから、あつちの世界でもある意味俺は天涯孤独だな。

大学に行つたのは單なる学校つて言つのがどんなのかつて言つ興味と暇潰し。

だから別に寂しいとかは思つてないし…何より帰ろつにも方法が分からぬしな」

「儀國さん…」

「つて、なんでアンタがそんな辛氣臭い顔してんだよ……」

そう言つて苦笑いを浮かべる儀國さん。

本当に……貴方は何も思わないの？

何故、両親の死を悲しまないの？

何故、友人がいないことに孤独を感じないの……？

何故、元の世界に帰れるか分からぬ事に不安を感じないの……？

いつたい、貴方は何故……。

「でもまあ……アレだ」

空を見上げて、儀國さんは静かに口を開く。

「どうあえず今は、帰れなくともいいかなって思つてる」

「え？」

「中佐と約束したからな……俺が護るつて。アンタが約束を破棄するまでは、ちゃんと護つてやるよ」

「儀國さん……」

「……うてと、そろそろ ッ！？中佐、逃げろーー！」

彼が叫ぶ。この時彼が何を言っているのか理解出来なかつた。

Act9・終焉の蒼（偽）【声】（後書き）

Act9でした。

今に始まつたことじやないですか?…やつぱり書くのつて難しいですねえ。

次の更新は…火曜日にはしたいといふです。

Act 9・終焉の蒼（櫻）【紫】（福井城）

Act 9【紫】です。

今回も戦闘描画あります…なんか微妙な感じに…。

Act9・終焉の蒼（偽）【弐】

理解したのは彼が叫んでから数秒後、この砂浜に異常が起きた時だつた。

「…これは…」

砂浜に突然描かれる大きな魔法陣。それは私達ウイッチの魔法陣と似ている…けれども呪文や図式は初めて眼にするものだった。

そしてその魔法陣の外に出ようとすると、そこから先に進むことが出来ない。まるで見えない壁があるかの様に。

「…これは…まさか結界か…？クソッ…やられた…！」

「…あ…儀國さん、…これは…いつ…！…？」

「…敵さんのお出ましだ」

彼が正面を見据える。その先に居たのはあの騎士型ネウロイだった。

「ネウロイー？」

「つたく…神出鬼没なヤツめ。どうから来た？」

彼が不適な笑みを浮かべる。けれどもその笑みには余裕が一切感じられず、焦りが見えていた。

「どうやってこの基地内に…！？」

「さあな。けど…どうひらてせよアイツを斃さない限り」いかり出されないぞ」

彼の両手に剣が現れる。戦闘態勢に入り、騎士型ネウロイをジッと見据えた。

「儀國さん…？」

「下がつていろ中佐。サー二ヤ達も今頃は気付いている筈だ、それまで…なんとか持ち堪えてみせる！」

砂浜を蹴り、儀國さんは騎士型ネウロイへと向つていぐ。騎士型ネウロイも両手から赤い輝きを放つ刃を現し、儀國さんを迎撃つた。

夜の砂浜に響き渡る金属音、白銀と赤の閃光が中空を何度も奔り、交わる度に火花を散らせる。

「くつ…コイツ! 前より強くなつてやがる!」

騎士型ネウロイの攻撃を防ぎ、弾きながら儀國さんは苦しそうに言った。確かに、あの時見た時よりも動きが早くなつていて。

私は目で追うのがやつと。儀國さんはあのスピードになんとかついていっている。

「くうつ…」の野…郎…！」

騎士型ネウロイの連続攻撃。その一撃の重さは、ぶつかり合つ度に鳴り響く金属音を聞けば分かる。現に儀國さんが防戦一方になりつつあった。

「この…調子に乗るなよ…！」

儀國さんも負けじと剣を振るつてはいるが、その顔には徐々に疲労の色が見え始めていた。相手はネウロイ、儀國さんが魔術師だからと言つても元は人の子。

私達人間と違つてネウロイにスタミナなんて概念は…きっとない。だからこのままだと儀國さんが殺される……!

「くつ…」

ミーナは強く拳を握り締めた。

何も出来ない自分が悔しい、目の前では必死にネウロイと闘つてゐる儀國さんがいるというのに…隊長である自分は何も出来ていません。

ストライカーユニットも、銃もなければ…本当に私はただの無力な人間だ。

何とかして儀國さんの加勢に入りたい、その気持ちは強くあるというのに…何も出来ないという現実が突き付けられる。

護りたい者が、力が無いが故に護れない。

その事がただ悔しくて…、私は儀國さんとネウロイの戦いを見ているしかなかった。

「ツー？」

大きな玉碎音が聞こえる。数多に宙に舞う白銀の刃の破片、儀國さんが手にしていた剣が破壊された。

その間にも、騎士型ネウロイは儀國さんにビームブレードを振るつ。

「儀國さん…」

「くつ…！」

儀國さんは咄嗟に後方に大きく飛び退き、ビームブレードの斬撃を何とか回避した。そして回避したと同時に右手を大きく薙ぎ払う。

儀國さんが得意としている「煉獄の赤」が騎士型ネウロイに襲い掛

CODE:SATAN

かつたのだ。

初めて見たあの時に比べて火力も上がっている。放たれた赤き炎は騎士型ネウロイを包み込んだ。

「儀國さ… ッ…?」

「……チツ！」

儀國さんが舌打ちを零す。

完璧には避け切れなかつた。

裂かれた服の袖、曝け出された肌は綺麗に切り裂かれ、鮮血を流す。腕を伝い、指先に到達して砂浜へと落ちていく赤い零。

轟つと音が鳴つた。騎士型ネウロイを包み込み激しく燃え上がつていた炎が縦に裂かれた。

そしてその中からは騎士型ネウロイが姿を現す。全く堪えている様子がない。

「……やれやれ、やるか。

解除早々使うなんてな… つたく

儀國さんの口つきが変わる。

刹那、私の脳裏にあの日の夜の出来事が甦つた。

また儀國さんは自分の身を犠牲にして私を護るつもりだ。あの時もそう、今みたいな鋭く…氷の様に冷たい眼をしていた。だから今回もまた…

「ダメ！儀國さん！」

「その目に焼き付ける、そしてその身を以つて知れ、蒼が齧す終わりをな！」

CODE:BLUE
「終焉の蒼」…解放…！」

突如、儀國さんの左腕から蒼い炎が燃え上がった。

「綺麗…」

左腕から燃え上がる蒼き炎を見て、ミーナは見惚れていた。

炎は通称赤色だ。儀國さんが扱う魔術：「煉獄の赤」も勿論赤の炎。

けど、「終焉の蒼」と呼ばれた炎は赤ではなく蒼色。

その蒼き輝きは宝石のように綺麗で、思わず見惚れてしまつ程の神々しさがある。

けどその反面、冷酷で無慈悲を感じさせるものがあった。そしてあの蒼い炎…間違いなく「煉獄の赤」よりも…遙かに強力な炎。

「燃え尽きり…」

左腕を地面に突き刺す。すると騎士型ネウロイに向って一直線に蒼き炎柱が砂浜の上を奔つた。

騎士型ネウロイも流石にこれは予測してなかつたのだろう。回避行動に出たが、反応が遅れていた。その結果蒼き炎柱に左腕が飲まれた。

炎柱が通過する。そして飲まれた左腕は何処にもなかつた。燃える音も、焼けた臭いも、煙もないまま…あの蒼い炎によつて一瞬にして燃え散らされたのだ。

焼き焦げた跡が痛々しく残されている。更にその跡から蒼い炎が発生し、騎士型ネウロイの身体を飲み込もうとした。

これが…「CODE:BLUE終焉の蒼」…蒼い炎の力。

「…………」

ミーナは「CODE:BLUE終焉の蒼」に恐怖を感じていた。

一瞬にして燃やし尽くす程の火力。触れれば最後…決して逃れる事の出来ない、回避不可能の蒼い悪魔の炎。それをして、操る魔術師

…儀國 雅史。

彼が敵ではなくて本当によかつた、心の底からそう思つた。

「…………」

騎士型ネウロイが信じられない行動に出る。左腕の傷跡から身体に移ろうとしている蒼い炎、すると右腕のビームブレードで左肩を一気に両断した。

「なつ……！」

噴出す鮮血、切断された左肩部。砂浜に落ちたと同時に左肩部は蒼き炎に包まれ跡形もなく消滅した。

「コイツ……生意氣な真似しやがるな

「ネウロイに……！」今まで高い知能があつたなんて……」

咄嗟に左肩部を切断して蒼い炎が全身に移るのを防ぐ。普通の人間ですら同じ状況に陥った時、冷静な判断が下せないだろ？。だがこのネウロイはそれをやってみせた。

そして直ぐに左腕が修復される。相手はネウロイ、コアを破壊しない限り何度も再生する。

だが、他のネウロイに比べて再生速度が極めて遅い。儀國さんの「CODE:BLUE終焉の蒼」と呼ばれた蒼い炎を受けた影響だろ？。

「怪物が……。だつたら、今度こそ跡形もなく燃やし切へしてやるー！」

蒼い炎が再び放たれる。と、砂浜に描かれていた魔法陣が消え、騎士型ネウロイは獣のような咆哮を挙げながら上空へと飛ぶ。標的を失った蒼い炎はそのまま消滅。

そして騎士型ネウロイは、あの時の様にそのまま姿を消した。

「なんとかなったな……」

安堵の溜息を漏らし、儀國さんが言つ。そして糸が切れた人形のように、その場に両膝を着いた。

「儀國さん……！」

私は儀國さんの元へと駆け寄つた。あの時の様に重症は負つてない、けど右腕は怪我をしている、すぐに治療しないと……。

「……中佐」

不意に、彼が私を呼ぶ。顔からは冷や汗が滝の様に流れ出て、苦笑いを浮かべているのも辛そうな表情を浮かべている。

そんな表情で、儀國さんはゆっくりと口を開いた。

「悪い、説教は後で聞くからさ……。まずは、左腕の治療の方、……よろしく頼むわ……」

そつ言つて儀國さんは力なく倒れた。左腕で燃え上がつていた蒼い炎が消える、と消えたと同時に肉の焼き焦げた臭いが立ち込めた。

「」、「これは…」

蒼い炎が燃え上がつていた儀國さんの左腕。蒼い炎が消えた今晒される彼の左腕は重度の火傷を負つていた。

「中佐…！」

後ろから砂浜を踏む沢山の足音と、美緒の声が聞こえる。

「美緒…！」

「うう…これは酷い火傷だ。宮藤！直ぐに治療を……それから医務室へと運ぶ！」

「は、はい！」

宮藤さんが直ぐに治療を始める。誰もが心配そうな表情で意識を失つた儀國さんを見守つていた。

Act9・終場の着（偽）「弐」（後醍醐）

Act9「弐」でした。

「回四の…いや、三回四かな?」の戦闘描写ですけど…やつぱり戻つ
シーンを書くのは本当に難しいですね。

どう表現したらいいとか、メッシュや悩みます。悩んだ結果「これです
けどね…」。

以上、Act9「弐」でした。

すわっ!!

Act 10・代償【毒】（前書き）

Act 10【毒】です。

さうでもここですけど……ローラ・オブ・シャドウ面白いですよ。

懐かしい夢を見た。

初めてあの世界へと足を踏み入れた運命の日。地面には無造作に転がる数多の死体、その死体から流れ出た血で形成された赤い水溜り、その中に佇む…ガキの頃の自分自身。

手にした刀の刃は血で染まり、その刀を握る手や顔…全身に返り血を浴び赤に染められている。

地獄絵図、誰もがそう言つても可笑しくはない世界に一人の女性が現れた。

『おやおや、まさか…こんなチビガキがコイツ等を殺つたなんてなあ…』

女性が不適な笑みを浮かべる、それをガキの俺はジッと見据える。新たな敵が来た、そんな感じで女性を見据えて血に染まつた刀を構える。

『おつ、いつちょ前にやるつてか?面白い、お前の命私が貰つてやるつ…全力で掛かってきな!!ガキンチョー!!』

その言葉を合図に女性は腰に差していた一振りの太刀を鞘から払い、ガキの俺は女性へと向って飛び掛かった。

「ツ
.....」

夢から田^だが覚める。

開いた視界に映るのは無機質な天井、一一度田^だのお世^よ話となる医務室の天井だと直ぐに理解出来た。

「...随分と懐かしい夢を見たな」

十数年前の...あの日の出来事。
表の世界から裏の世界へと足を踏み入れた...運命の日。

それを、夢として見るなんてな...。

開いた窓から吹く心地のよい微風、その窓の向こうの世界...今日も
今日で快晴の青い空が広がっていた。

「…………」

ふと、左腕を見る。左腕には何重にも包帯が巻かれていた。

「終焉の蒼」の使用したが為に負った代償…。
腕は何とか、指先は動かせる…感覚も正常。ただ指先を少しでも動かす度にかなりの痛みが伴つてくる。

「メチャクチャ痛いな……」

それはまあ我慢するところ。本来なら左腕が消滅していたかもしれないが、左腕はあるし感覚もちゃんとある、痛みぐらいは甘んじて受けよう。

そして治療してくれた篠の宮藤にも後で礼を言わないといけない。

「それにしても……」

思考を切り替える。考えるはあの騎士型ネウロイについて。

昨晩の闘いで分かったことがある。ネウロイの癖に結界を…魔法を

使ったということ。ただのネウロイではないとは分かつてはいたが
：魔法を使ってくるとは予想外だった。

ますます謎が深まつたな…。

「まつ、いいか。それよりも腹減つたから飯でも食いに

」

突如、世界が傾く。そして身体に叩き付けられる衝撃が伝わる。

「グッ……」

否、起き上がりうとするも力が満足に入らない。

…「終焉の蒼」CODE:BLUEを使用したことで課せられたペナルティ。覚悟はしていたが、ここまで酷いとは…。

「ハア……ハア……ツ」

なんとかベッドに這い上がり、呼吸を整える。そして今の自分の身体の状態を早速調べた。

身体機能・異常発生・大幅な筋力低下。83%中28%まで低下。

魔力回路・94%回路に損傷を確認。魔力回路の自己修復作業開始。

魔力回路の自己修復作業中により、魔術の使用不可能。

「ハツ……ここまで酷いとか。勘弁してくれよ……」

身体機能はガタ落ち、魔力回路は「終焉の蒼」CODE-BLUEを使用した事により暴走、その結果魔力回路を全壊には至らなかつたものの、損傷させてしまつた。

現在は自己修復作業を行つてゐるが、いつ頃終わるやう。魔力回路が修復されるまでの間は一切魔術の類を使用できない。

こんな状態の中、もしあの騎士型ネウロイが来たら…確實にこの基地は落とされる。

「…なんとかしないとな」

脳が動けと指先から全部位に命令を送り、命令に従つも動かない身体に鞭を打つ。

ひたすら動けと、ただそれだけを命令し続ける。

筋肉が、骨が軋む様な音が聞こえているが…そんなものどうでもいい。今はただ動くこと、これが出来さえすればいい。

身体能力なんでものは直ぐに回復する、あの時、だつてそうだ…。

だから…とつあえず、こんな時は飯だ。栄養補給をしつかりしないと治るものも治らない。まずはしっかりと飯を食つて、それから考えるとしよう。

…あのネウロイに対抗できるのは、恐らくこの世界で俺ただ一人だら。

それに俺自身、ヤツとのケリを着けなければならぬ。

ここまで傷だらけにされたままでは、一応俺のプライドに触る。

アイツは…俺の手でボコボコにして葬り去る…！

「ぐおおおおおおお…メッチャ辛いッ…だが諦ねえぞ俺は…。

ふるえるぞハート…燃え尽きるゼビハート…おおおおお…刻むぞ魔力のビート…」

翌朝、私達は早速ブリーフィングルームにて会議を行つた。

あの新型ネウロトイについて、今後私達はどうしていくか…。

「それで、儀國の容態はどうなんだ?」

「どうあえず命に別状は無い。だが…左腕の火傷が思った以上に重症らしく、下手をすれば一度と使い物にならないそうだ…。今宮藤に様子を見に行つてもらつているが…」

トウルーデの問いに美緒が答える。その顔には悔しさが現れていた。

昨晚…あの騎士型ネウロトイの戦いの時、儀國さんが見せた蒼い悪魔の炎…「終焉の炎」。

一瞬にして灰すらも残さず燃やしきりてしまつ蒼い悪魔の炎は、騎士型ネウロトイを退け、私は生き延びた…。

その代償として、儀國さんの左腕はもう一度と動かないかもしけない程の傷を残した。

宮藤さんの治癒魔法を以つしても、完全に回復させる事は出来なかつた。宮藤さんは酷く落ち込んでいたけど、彼女はよくやつてくれた。

「儀國さん……ツ

強き力には相応の代償が伴つ。自らの左腕を代償にして発現させる蒼き悪魔の炎、儀國さんはその事を承知で私を護つてくれた。あの時交わした約束を守る為に……。

私は何をしているのかしら。彼がこの基地に来てから、私は彼に護られてばかりいる。最初の時もそう、彼が私を庇つて代わりに負傷した。

私は何も出来なかつた、昨日もただ見ていることしか出来なかつた。何も出来ない自分自身が…許せない、悔しい…。

「けど、私達と同じ魔法を使つネウロイがいるなんて…」

リーネさんが口を開く。

そつ、リーネさんと言つ通りあのネウロイは異常過ぎる。魔法を使うネウロイなんて今までに現れなかつた。

あの時砂浜に描かれた、図式も呪文も全く見た事が無いものだけれど…間違いなく私達ウェイツチと同じ魔法陣。

そして騎士型ネウロイの固有魔法の効果は、儀國さんが昨晩言つていた言葉…「結界」。

恐らくは、対象物を魔法陣内に閉じ込める魔法と見ていいと思つ。遥かに手強いのは確かだ

「リーネの言つ通り信じられん話だが…。今までのネウロイよりも遙かに手強いのは確かだ」

「それに、あの儀國ですら苦戦するぐらうだ。我等の場合…苦戦に持ち込めるかすら分からんな…」

誰もが美緒とトゥルーテの言葉を聞いて口を閉ざした。

あの儀國さんですら苦戦した相手を、私達は満足に戦つことが出来るのか…そう問われた時、首を縦に振る事が出来ない。

闘つていなくても分かる。あのネウロイは強い、今まで撃墜してきたネウロイよりも…遙かに。

高い知能、戦闘能力、固有魔法…今までにない新しいタイプのネウロイ。

そして皆理解している。

あのネウロイと闘えるのは…、斃せる可能性を持つてるのは…、儀國さんだけであるということを。

彼以外に斃せるウィッチは…恐らくこの世界にいない。だからと言つてまた儀國さんを闘わせるワケにはいかない。

彼にだけ危険な目に遭わせる事だけは、絶対に避けなければならぬい。

「た、大変です…！」

その時、宮藤さんが息を切らしながらブリーフィングルームに飛び込んできた。

「どうした宮藤…？」

「『さ、儀國さんが…医務室にいません…』」

その言葉に誰もが席を立つた。

「何だと…? 他の者は見ていなかつたのか! ?」

「ほ、他の整備兵の人にも聞いたんですけど誰も見ていないって。今階で儀國さんを探してもうつります!」

「あのバカ… いつたい何処に行つたんだよ! ?」

エイラさんが拳を握り締めて怒る。その隣でサーヤさんは心配に表情を曇らせていた。

「…皆さん、会議は一度中止します。まずは儀國さんが何処に行つたのか、私達も捜索に当たります」

「「「「了解ツ…」」」

Act10「毒」でした。

そろそろ番外編とか書くべき…なのかなあ。クリスマス編とか正月編とか。

気が向けば短編として書くと思います。

すわっ！！

Act 10 [戻] です。(楽書地)

Act 10 [戻] です。

Act10・代償【弐】

何とか食堂の入り口前へと辿り着く。

「ハア…ハア…」

歩くのが精一杯、今はたまたま見つけた棒を杖代わりにして何とか歩いている状態。

一步出すたびに、何キロという長距離を走ってきたかのような疲労感が身体に加わる。

「ハア……も、燃え上がれ！俺のコス…じゃなかつた、魔力ッ！！」

意味も無く叫んでみる。特に意味はないし、何かが起るワケでもない。ただ言つてて虚しいし痛い…。

「見つけた…！」

…何かが起きたことは起きた。背後から聞こえてきたのはサーニャの声、そしてその後ろからは大勢の慌しく地を蹴る音が。

「儀國！お前、何やつてるんだよ！？」

「……腹減つたらから飯食おうとしただけだよ。心配すんなエイラ、
とりあえず身体は動くし、何の問題もな」

片膝の力が抜けてそのまま地に着ける。そろそろ脚が限界のようだ。

「そんな状態なのに何が心配しなくていいだー。さつと医務室に戻
るぞー！」

バルクホルンの怪力発動、そのまま抱えられて医務室へと強制連行
される。

流石はバルクホルンの怪力、鉄骨すらも持ち上げられるだけあり、
俺なんか全然重く感じないんだろつ。

……が、女性に抱えられる男性、傍から見れば何とも格好悪い絵だ。
しかもお姫様抱っこ！

歩くのが無理に近いから有り難いといえば有り難いが、もつと違う
体位で抱えてくれないだろうか？

とつあえず田線で訴えてみる。

「な、なんだ？」

顔を少し赤くしただけで終わつた…。

「いや、別に…もつ何でもいいです」

そもそも言つたところで黙れとか、そんな権利今のお前にはないとか言われそだから止めた。

遠ざかっていく、食堂への入り口。早く飯が食いたい…そんな事をふと思つた。

Hイラ side

儀國が見つかつた。医務室から居なくなつたつて聞いて心配したけど…見つかつてよかつた。

今は医務室のベッドで横になつてゐる。ベッドの周りには中佐や宮藤達が、勿論私も居る。

皆怒つっていた、私も眞と同じで怒つてる。怪我人の癖に勝手に医務室を抜け出したこと、歩くのすら満足いかない状態なのに一人で動いたこと。

そんな儀國の身勝手な行動に、私達は怒つていた。

「とつあえず、目が覚めてよかつたわ。怪我の具合は?」

「いやあ、そりゃもう全然余裕

「儀國さん、正直に言ひなさい」

中佐が儀國に言つ。いつものブラックスマイルじゃない、あの顔は…本氣で怒つてゐる顔だ。

流石の儀國もいつもの怒りと違つ中佐に、一瞬だけ驚き、直ぐに表情を戻して静かに答えた。

「…正直動くのがメチャクチャ辛い。左腕は指だけなら満足に、腕

は辛うじて…。動かすたびに痛むけどな…」

一度と動かないかもしないって言われてた左腕。指も動くし腕自体は何とか動かしている。重症なのは重症、でも…とりあえず動いてよかつた。

私はそう思った。

「それにも、あのネウロトイ…今度あつたら絶対に跡形もなく燃やしきくしてやる」

「その件ですが…もうあの蒼い炎、」CODE:BLUE「終焉の蒼」、「を使つ」とを禁止します。これは命令です」

「ハア？ 何で？」

「何でつて…分かつているでしょ！？ 確かに貴方のお陰で私は生きている、けど…あの炎を使つたことで貴方の左腕は一度と動かなかつたかもしれない程の火傷を負つたのよ！？」

中佐が声を擧げて儀國を怒つた。

私は実際に目にしてないけど…中佐の話を聞いていたらとんでもない炎らしい。そして左腕が一度と動かなくなるかもしれない程の火リスク

傷を負う。

そんな危ない炎なら中佐の言つ通り、一度と使わないでほしい。今はちゃんと左腕もあるし、動いているけど……。もし、次に使った時左腕 자체が燃え尽きてしまったら……、そう考えると余計に使って欲しくない。

「ああ、それなら問題ない。今の俺はエラーだらけだからな、それでだよ」

「えつ……？」

「どういう事だ？ 儀國」

大尉が儀國に尋ねる。

「前に言つただろ？ この世界へと来た時にエラーのせいだ、俺は本来の力を振るうことが出来ないって。

本来の俺なら「終焉の蒼」^{エンド・オブ・ザ・苍}を使つたつて何の問題もない。けど今は使用することとペナルティが発生する状態みたいなんだよなあ……」

「つまり、貴方は左腕が再起不能になるかもしない事を最初から分かっていて……」

今度は中佐が儀國に尋ねた。

「まあそりだな。仕方ないだろ？あの時アイツを斃せるのアレ、ぐら
いしかなかつたんだよ。まあお陰で今は歩くのもやつとの状態、魔
力回路は損傷してその修復作業中……おかげで魔術が使えないけどな」

カラカラと笑いながら儀國が答える。瞬間、中佐が儀國の頬を強く
叩いた。

医務室に頬を弾く音が響いて、静かに消えていく。皆中佐の行動に
驚き口を閉ざした。

儀國も驚いた顔をして……直ぐにいつもの表情へと戻した。

「…………」

「どうして貴方はそう呑氣でいられるの！？貴方の身体のことな
よー！？何故貴方は平氣で無茶を」

「……あんなの、無茶でも何でもねえよ」

「えつ？」

その言葉を聞いて私は驚いた。

左腕が動かなくなるかもしないぐらいだったのに…無茶じゃない？
じゃあ儀國は…もつと前から今回よりも無茶な事をしていた？

「あれで無茶じゃないって…じゃあ今までどんな無茶をしてきたの？」

「そうだな……過去の行いから例を挙げるとして…」

中尉の言葉に、儀國はそつと眼を閉じて、昔を思い出してこるかの
様な…懐かしんでいる顔でゆっくりと語った。

「協会に入門して魔術の修行に励んでいた時期だな。その時でも何
度も命を落としそうになつたな。

あの蒼い炎を会得する時全身に大火傷を負つて、それこそ自身の炎
によつて燃え散らされるか…みたいなこともあつたし。

人間に始まり、人外や同じ魔術師達と何度も闘つて闘つて、闘い抜
いて…その度に死の一歩手前の重症を負つて生死の境を何度も彷徨
つた。

その度に周りに居た有能なやつ等のお陰で何とか生きてる、協会に
居た頃はそつやつて過ごして來たな

腹を刺されるわ抉られるなんてこともあった、それぐらいしないと俺は強くなれなかつた…と儀國は話した。

その話を聞いて、皆啞然としていた。私だつてそうだ。

…語られた儀國の過去の無茶。どれもこれも死んでも可笑しくない内容ばかりだつたからだ。

儀國は…あつちの世界でもそんな無茶してたのかよ…。

「だからあんのは無茶でも何でもない、現にホラ…俺ちやんと生きてるだろ?」

「…それでも、私達からすれば無茶であることに変わりません!いいですか、二度とあの蒼い炎を…」CODE:BLUEN「終焉の蒼」を使うことを禁止します!」

「嫌なこつたい

中佐の命令にも関わらず、儀國は首を縦に振ろつとしなかつた。いつもと同じ、何処かぶざけた態度で答える。

「儀國さん…!! いい加減に

」

「……極力使わないのは約束出来る。けど、いざって時には絶対に使う、完全に使わないって約束はしないぞ。例え、隊長のアンタに言われてもな……」

「…………ツ」

「儀國…………」

中佐を見据えながら静かに、そう言った。普段の儀國なら中佐のオーラに負けて渋々頷いているのに、今回ばかりは承諾する姿勢を見せない、ジッと中佐の眼を見据えている。

その眼には一切揺らぎは無い……固い信念の炎が宿っているように私の目に映った。

「……いいでしょう。ですが、もう一度とあんなことしないでトセー

「へいへい、努力しますよ」と

中佐が折れ、一先ず使用の頻度を軽減するところとで話は終わつた。

「さて、とりあえず話はこれでおしまいにしてしまおう。儀國さん、貴方は怪我人なんですから、ちゃんと療養するよ！」

「了解ですよ中佐」

皆が医務室から出て行く。出て行く前、誰もが心配そうに儀國を見ていた。

そんな儀國は大丈夫と、小さく笑みを浮かべて右手をヒラヒラと振つて見送っていた。

「…………儀國」

「ほら、ヒイラさんもサー二ヤさんも

中佐に言われて私はサー二ヤと医務室を後にした。

各々部屋から出て行く。部屋を出る前誰もが必ず此方を振り返り、

そして部屋を出て行く。

サーニャとハイラに限っては長く居たが、ミーナによつて部屋を出される。そして最後、ミーナが部屋を出ようとして…

「儀國さん」

「んあ？ 何？」

「…儀國さん、有難う。貴方が護つてくれたから…私は死なずに済んだわ」

背中を向けたまま礼を述べられた。その声には感謝と同時に罪悪感が感じられた。

「…ああ、気にするな。アンタが無事でよかつたよ、中佐」

「…………」

ミーナは何も言わず、部屋から出て行った。それを見送つた後、ベッドに寝転がり天井をぼんやりと見つめた。

Act10・代償「弐」（後書き）

Act10「弐」でした。

さて、次話・正確にはAct11「弐」では少し作者夢幻遊戯の妄想が少し爆発します。

あのキャラにこんな事を…ウハくくくくく、みたいな感じになります。

あ、念のため言いますけど決して卑猥なことではありませんよ？
今作品はR-18ではないので。

すわッ！！

act 11 「誕生日」です。

どうでもいいですけど、The 3rd Birthday面白
いですね。

今、俺は医務室にて横になり天井をぼんやりと見つめている。

「ハア…なんでこんな事になつたんだろうな……」

誰に問うわけでもなく、小さく呟く。

あの後の事だ。ミーナより暫くは医務室にて療養するようこと、命令が来た。

そして俺が再び無茶をしないように…よくなるまでの間、監視の意味を含めて交代制で看病するらしい。

勿論断わった、そんな必要は無いし言われた通り大人しくしている、と。

が、満場一致で可決。反発するとミーナがブラックスマイルを浮べ、他の皆からは大人しく言つ事を聞けと怒られた。

サーニャからも、言つ事を聞かない俺は嫌いだと言われた。

…何故だろうか、サーニャに言われて物凄くショックを感じた。

「看病…か

…思つてみると、誰かに看病されるという事なんて久し振りではないか？

あつち側…世界魔術協会に居た頃はあのババアがよく看病してくれた。魔術の指導は鬼の様な癖に、看病の時は優しく…そう、まるで母親のようだつた。

俺にとつて第一…いや、第三の母親と言つても違和感は無い。

第一の母親は…まあ大雑把と言つたが何とやら、とてもじやないがアレはダメ母親だ。

看病らしい看病はしてもらつた記憶が無い。

怪我したら睡付けときや治る、そういうタイプの人間だつた。けど、俺に生き方を…育ててくれたのは事実。

二人共、今でも俺にとつて大切な母親的な存在だ。

「…………」

果たして彼女達はどんな看病をしてくれるのか…、一部のウイッチ達に不安を感じながらも、一先ず寝た。

《午前》

「おはようございます。」

「お、おはようございます。」

最初にやつてきたのは富藤とリーネの一人組みだった。一人共白いエプロンに身を包み、銀色のカートを押して部屋へと入ってくる。

「ああ、おはようさん。あ、なんかいい匂いすんな」

「朝、」はん持つて来ました。儀國さん、和食が大好きだったと言つてしまつたから朝は和食にしました。納豆も沢山ありますよ

「マジでかー? そりゃ有り難い、サンキューな富藤」

「この子の富藤の頭を撫でようとする…が、身体機能に異常が出てい

る今それをするのも一苦労だった。

「い、いいですよーそれに私、もう子供じゃありません…。」

と、言いつも気持ち良さうにしている。

未成年である内は皆子供なのだ、富藤も俺も含めて。

「じゃあはい、儀國さん」

「えつ？」

スプーンに掬つて口へと持つてくれる。
つまり…あれか?食べさせてくれると?

「いやいや、流石にそこまでしなくていいから…。」

気持ちちは嬉しいが流石にそれは氣恥ずかしい、一苦労はするが自分で食べられる。

が、富藤は退く姿勢を見せなかつた。

「ダメです!儀國さん病人なんですから、大人しく言う事聞いてください!さつきだつて、撫でるのも辛そうにしてたぢゃないですか

「…？」

宮藤の発言に、リーネはコクコクと首を縦に振る。

「いや、しかしだなあ…」

「…事が聞かないとミーナ中佐に聞こますよ…？」

「げ、ここでヤツを出すか…」

もしここで介護を拒否したら確實にミーナに報告が行く。そしてその後はブラックスマイルを浮かべたミーナが…お、恐ろしい！考えただけでも恐ろしいぞ！

「…わかつたよ…分かりましたよ宮藤軍曹

仕方なく、宮藤の介護を受けることにした。年下の女の子に食べさせてもらっている俺…傍から見れば羨ましい光景ではあるだろ。が、それでいる俺は全く落ち着かない。

「あ、あの…儀國さん…」れもみかつたら…

いつも通りコーヒーもスプーンで掬つて食べさせてくれる。

嬉しさ増加、恥ずかしさ倍増。そしてリーネの頭も撫でる。

いきなり撫でたことに驚いていたが、すぐに面撫と同じ様な反応をしてくれた。

こつして二人の介護を受けながらの朝食は終わった。と、同時に早く腕だけでもよくなつてくれと心の底から思った。

「あ、食べ終わったら治療しますからね。一回でも早く座我が治つてもらいたいですか？」

「あ、ああ…悪い」

朝食と宮藤の治癒魔法による治療が終わった後、再びやることがないからぼんやりとする。アーリアとか携帯ゲーム機が今は欲しい気分だ。

「あ～退屈だなあ……マジで退屈だなあ……」

やるひどがなくて暇、せめて退屈を紛らわせる為に本とか用意しておこで欲しい。

尤も、この世界にマンガなんとかいつないから……。本があつても結局読まなこと思ひ……。

「お～っすー元氣にしてるか～？」

「雅史～」

シャーリーとルッキー一揆場。また騒がしいのがやつてきた。

「とつあんずー元氣だしあわせいるよ

「そりゃよかつた

「で、何の用だ？」

「おこおこ……あたし達がここに来たってことは、お見舞いしかない

だろ? 「

「冷やかしの間違いじゃないのか?」

「あ、ひつじごとく囁ひな~」

シャーリーと笑い合ひ。

「お~い、元気~?」

と、そこにハルトマンがやつてきた。
珍しい来客者に、思わず我が眼を疑う。

「……つて何その眼は。私の顔に何かついてる?」

「いや、ねえ…。なんつーかその、中尉は毎過あまでグータラして
るイメージが

「ハツハツハ!違いないな

俺の一言にシャーリーが笑つた。

だって、あのハルトマンが、朝いつも寝ていてバルクホルンに叫ばれても尚寝ていられるあのハルトマンが…。朝に起きて活動しているという事 자체が奇蹟に近い。

今日はネウロイ出現の警報機も鳴りついでないし…。

「むう、失敬な！私だってちゃんと起きる時は起きるつてばー！それと、私の事は中尉じゃなくてハルトマンかフラウでいいよ」

「じゃあハルト饅で

「…なんかその発音だと食べ物みたいに聞こえるんだけど、気のせい？」

「で、何か用か？怪我人の所に来たつて退屈なだけだつて」

ハルトマンが来たことには気になっていた。

、

その理由を尋ねると、可愛らしく笑みを浮かべ

、

「ほり、私ってあんまり儀國と喋つてないでしょ？だから今日は儀國とお話をもしたいな～って」

「…その発言には大部分が嘘で構成されているな」

「な、なんで…？」

「そうだな…答えはバルクホルンに腐れ切った異空間とまで言われた部屋を整理整頓しようと無理矢理叩き起こされで、でも片付けは面倒だから隙を見て抜け出してきた。

もし見つかっても俺の看病とか理由付ければいい…ってか？」

「う…」

図星か…、大方そんなことだらうと思つた。ハルトマンの生活パターンをアニメを通して見ていれば、大体は想像は付く。

「ぎ、儀國つて心まで読めるの？」

「いや、洞察力の賜物つて言つておぐ。まあ退屈してたからいいけどな…。

バルクホルンが来るまでゆづくつしていけば？」

「ホント…？ありがとう儀國…！」

思えば、ハルトマンとはあまり会話を交わしてなかつたからな…。
丁度いい機会だらう。

一時間ぐらい、シャーリー、ルッキー、ハルトマンの三人と喋る。

内容は殆どが俺に対する質問ばかり、俺が居た世界はどんな世界か
…世界魔術協会とはどんな所なのか等。

一つ一つ話すと三人は時に驚き、時に笑い、楽しそうに俺の話を聞いていた。特に最年少のルッキーが特に関心を示していた。

外観相応、眼をキラキラと輝かせながら。シャーリーやハルトマンよりも俺の話に対して多く質問していた。

「ふうん、なんか儀國の世界って楽しそうだね

「そつ…だな

「あ…あ、早く戦争が終わつて…儀國の世界みたいになつたらいい
のに

そつとうハルトマンの表情は、何処か悲しそうだった。

「…心配するなよ

「えつ？」

ハルトマンの頭を撫でる。朝食を食べたおかげか、富藤達の頭を撫でた時よりも苦労しなかった。

「俺がこの世界にいる間は、俺もネウロイをぶつ斃してやる。何十機だろうと何百機だろうと、全部俺が片付けてやるさ。一日でも早く戦争を終わらせないとな。だから、お前はそんな顔すんなよ。似合わないぞ」

ハルトマンが悲しい顔なんぞ浮かべている姿は似合わない。
「イツは…このキャラクターはズボラで笑みを浮かべている姿だからこそ。

だから、ハルトマンは笑つていればいい。

「…へへ、有難う儀國」

「すまない儀國、ここにハルトマンが来ていない

「あ、バルクホルン」

「むつ！？見つけたぞハルトマン！！」

不意に扉が開かれてお姉ちゃんキャラのバルクホルンさん登場。ハルトマンを見つけるや否や、早速怒りの叫びを挙げた。

「ソラで何をしてるー私はお前に部屋を綺麗にしたかった筈だー」

「え～ここじゃん、弱い今田じゅょなわけか。畠田ちゃん、どうせ畠田、だから今田せお休み～」

「な、何が明日やるだ！ そう言つてお前はいつもしないだろー！ さつさと部屋に来るぞ！！」

「それと、お前達もそろそろ退室しろ。儀國は怪我人だ、お前達がいては安静にすることも出来ないからな」

「ちえ、全くこれだから堅物のカールスラント軍人は……じゃあな

儀國、また暇見つけたら来るよ

「じゃあね～」

シャーリーとルッキーが退室。続いてバルクホルンがハルトマンの襟を驚掴みし引き摺つて出て行こうとする。

「あ～ん、儀國助けて～！」

「じゃあな～ハルトマン、女なんだから整理整頓、ぐらにはしつかり出来る様になれよ。
じゃないと誰もお嫁に貰つてくれないぞ～」

「薄情者～！～」

後ろから襟を掴まれてハルトマンは引き摺られていぐ。扉が勢いよく閉められた後、部屋は再び静かになった。

「やれやれ…まあ退屈は少しば紛れたからいいか

こうして昼食が来るまでの間、再び退屈な時間を味わっていた。

Act 11・療養生活「壱」（後書き）

Act 11「壱」でした。

今回は前菜？みたいな感じで書いてみました。

Act 11「壱」でようやく私、夢幻遊戯の妄想を爆発させること
が出来ます。

俺の精神テンションは今一貧民時代に戻っている…みたいな
感じです。w

では、それまで御機嫌ようつです。
すわつ！

Act 1-1 「我」 です。

Act 1-1 「我」 です。

《午後》

「ちゃんと大人しくしてるかあ？」

昼食を持つてきてくれた富藤とリーネが出て行つたと同時に、エイラとサー＝ヤが来た。

因みに、またも二人に食べさせてもらった。もう大分動くからと言つたが、安静第一と怒られた。

「エイラか、ああ…一応大人しくしてるぞ」

「一応じやなくて、治るまでちゃんと大人しくしてろ」

ベッド横の椅子に腰を下ろし、そしてそつと右手を握つてきた。

「エイラ～」

「本当に……お前ってバカだよな」

「何だよ、来ていきなりバカってお前…」

「儀國がバカだから私はバカだつて言つてるんだ」

握られている右手に力が少し込められる。よく見ると、右手が微かに震えている…？

「何でお前は……儀國はそんな無茶ばっかりするんだよ…。自分の身体なんだぞ？ もつ」一度と…動かなかつたかもしれないんだぞ？」

「おいエイラ…、それもう中佐に言われて」

「何度も言わないと、儀國がまた無茶するかもしれないからだろ！？」

エイラが声を挙げて怒った。その目頭には涙が浮んでいて、今にも泣きそうな顔をしていた。

「Hライ...」

「約束しろ儀國...。Hライが直るまで、もつて一度と「終焉の蒼」つて言ひ蒼い炎を使うなよー?絶対だぞー?」

「...いつただらへこぞつて時こは迷わず使つて。でも...」

Hライの頭をそつと撫でる。

「可愛い子を泣かせるとま... Hライの言ひ通り馬鹿だな俺は。やつだな、Hライが解消されるまで、使わなこよつに心掛けておくとするわ

「... 本當だな?後で嘘つて言つたりがつ飛ばすからな

「魂に誓つて... てか?まあ約束するつて

「ん... 絶対だからな

強く右手を握つてくる。その時にはもう手は震えていなかつた。

「あ……あの、儀國さん」

サーーヤが声を掛けてくる。その表情は何か言ったそつた顔を浮かべていた。

「何だ？」

「あの……儀國さんにお願いが」

「お願い……まあ俺に出来る範囲なり……」

「じや、じやあ……あ、お兄ちゃんいつに孚んでも……いい？」

部屋に変な空氣と静寂が流れれる。

俺も思わず言葉を失ってしまった。サーーヤが、俺をお兄ちゃんとい？

「あ……」

最初に静寂を破つたのはエイラ。そのエイラに続き、俺も同じ言葉を口にした。

「お兄ちゃん？？？」

綺麗に重なつて放たれた単語、お兄ちゃん。この時のエイラと俺のシンク口率は間違いなく100%を超えていた。

「え？ あ… カー！ あわん？」

「え？」

「君は読心術でも使えるのかな?」

あの時の考えが読まれたのかと思つた。

が、サーニャは小さく首を横に振る。びつり違つりしこから、俺の考えは読まれていない。

が、何故に俺をお兄ちゃんと呼ぶ！？

「えつと…何で？」

「私…お兄ちゃんつていなーからよく分からなーけど…。でも、そんな感じがしたから。」

芳佳ちゃんにも言つたら、そんな感じがするつて」

恥ずかしそうにサーーヤは答える。お兄ちゃんみたいな感じつて…どんな感じだ？」

俺にも確かに、妹分的なヤツはいた。

だからサーーヤや宮藤が妹みたいな感じがするつて…このはある。

逆に兄や姉はいない、ずっと一人っ子だった。
俺にももじ、兄弟で上が居たらサーーヤの囁つそんな感じつて…
のが理解できただろ？。

「やつぱつ…駄目っ！」

「いやいや、WELCOMEじゃよ…。WELCOMEじゃよ…。」

断わる理由なんて何処にもない。上田遣いで言われた田口やあ…もう。

う。

好きなだけ呼んでくれ。俺は拒まない、大歓迎です。

「…じゃあ、お兄ちゃん」

「ああ、まあこれからようしきな? サーヴァ」

そんなこんなでサーヴァと仲良くなれた。

なんかHイラにはメチャクチャ睨まれてるナビ…こいつ。

三時過ぎ、窓から見える景色をほんやりと眺めて…ふと今後について考える。

Hラーだけの今の状態、「終焉の蒼」を使えば今度こそ俺は自分の炎によって燃え死せるかもしれない。

が、現状的にあの騎士型ネウロトイを焼せるのは「」の炎のみ。

通常の「**煉獄の赤**」では…恐らく焼くのは無理。

「**暴蝕の黒**」も使用できな…今、やはり頼りは「**終焉の蒼**」だけだ。

あのネウロイは……一刻も早く斃さなければならない。以前戦った時よりもアーヴィングは強くなっていた。次回間見えた時、更に強くなっている可能性がある。

ミーナやエイラには使うなと言われているが……やはり使う以外ない。今は使えない状態だが……治った時は、必ず使う……。

「儀國、具合はどうだ？」

扉が開き、坂本とペリーヌがやってくる。

「ああ、別に大丈夫。で、どうした?ペリーヌも一緒に来るなんて珍しい」

「う、煩いですわね。病人は病人らしく、静かに療養してなさい」

「はいはい、相変わらずだな。まあ……有難うな

「べ、別にお礼を言われる筋合いなんてありませんわ!」

顔を赤くし顔を背けたペリーヌ。前々から分かつてたけど…ペリー
ヌってシンデレキヤラだよなあ。

「で、坂本…アンタは？」

「ふむ、お前の様子を見に来た。ちやんと療養しているよ」
「退屈過ぎて死にそうだけどな。ところで坂本、少し…頼みがある
んだけど」

「うん? 何だ?」

「俺にも扶桑刀を一振り、寄越してくれないか?」

もし、あの騎士型ネウロイが攻めてきたら…。魔術が一切使えない
今、唯一の頼りになる武器は己の肉体のみ。
無論、これでは全く闘えないし直ぐに殺されるのがオチ。だからこ
そ武器が俺には必要だった。

「扶桑刀をか? そう言えば、以前宮藤が何処からか拾つてきた扶桑
刀があつたな…」

思い出したように坂本が言つ。

坂本が言つてゐる扶桑刀は、恐らくあの砂浜で見つけた扶桑刀。自分の物じやないからと砂浜に突き刺して放置したが、あれから宮藤が持つていつたのか…。

「なかなかの業物だつたぞ、それをお前に渡そつ

「スマン、助かる」

「その代わり、お前の具合がよくなるまでの間は私が預かつておく。渡した途端、無茶をされても困るからな」

「げつ、バレたか」

「バレたか、じゃありませんわ。まったくもう…貴方という人は…」

呆れながら言つペリーヌだが、何処か楽しそうにしていた。

…久し振りに、解禁する時が来たのかも知れない。
人を護る為の剣ではなく、人を殺める為の剣を…。

夕食も終わり、再び退屈な時間が流れる。

結局今日は二食とも富藤達に食べさせてもらった。もう恥ずかしいの何の…。悪い気はしないけど、早く自分で食べれるようになりたい。

後、俺はいつまでこれを続けなきやならないんだ？

「入るわよ、儀國さん」

軽めのノックの後、ミーナが部屋に入ってきた。

「中佐か」

「私は相変わらず中佐ね…どうして私だけ階級呼びなの？」

「俺にとつちや、ニックネームみたいなもんだけどな」

上官に対する敬意や態度からではなく。

前は隊長だからとか何とか思つてたが、その意識が段々薄れていき、今ではニックネーム感覚で中佐と呼んでいる。

「ニックネームって、貴方、…」

「何だよ、嫌なら別の呼び方に変えるぞ? そうだな、例えば…」

「ニーナさんじゅつきゅうつかこ…とか(笑)。

…ニーナさんじゅつきゅうつかこ(笑)。

「儀國さん?」

「な、何かな? ニーナ中佐の」

「今…何か失礼な事を考えていいなかつたかしら?」

「ま、まさか…そんな事拙者が考えるわけないじゃないかでござるよ、ハハハ…ハ」

ブラックスマイルを浮かべるニーナ。何でニーナはこんなにも勘が

いいんだ！？

ミーナこそ三次元空間把握能力だけじゃなくて読心術を持つてるんじゃないのか？

いや、或いはサトリ…。そう、ミーナは実は人間じゃなくて妖怪サトリなのかも知れない。

だから尻で虫型ネウロイを粉碎出来たのかも…！人間じゃないから…！
史上最強の尻を持つ女、その名もミーナさんじゅつきゅうさい（笑）。

「…ふ」

やばい、想像したらマジで吹いた。

ミーナがいきなり『調子こかせてもらうぜ』…とか言って、某格闘技マンガみたいに背中じゃなく、尻筋が鬼の顔みたいになるのちょっと想像してしまった。

ヤバイ、意外とこれはヤバイ。あの作画で描かれるミーナ…想像しただけで笑ってしまう。

「……」

「とととと、とにかくで冗談抜いてな、何用で『いざるか?』

「『いざるか?』まあいいわ、貴方の様子を見に来たのよ。それと…甘いものでもどうかと思って持ってきたの。食べるかしら?」

「お、食べ食べ」

ミーナの手には林檎を取り出した。そして果物ナイフで器用に皮を剥いていく。

…なんかいいな、こつこつシチューション。

そして均等に切り分け小皿に盛ると、切り分けた一つをフォークで刺し

「はい、あん

「えつー?」

「あら、私じゃ不服? 富藤さん達の方がよかつたかしら?」

「い、いや…別にそういう訳じゃないけど」

予想外の展開。隊長のミーナが、俺にあ～んをしてくれている。

とりあえず林檎を差し出してくれているので、恥ずかしながらも食べる。

果肉を噉み碎く音を鳴らしながら、林檎の酸味が口の中に広がるのを堪能する。酸っぱ過ぎず程よい甘み。林檎はあまり好きじゃないが、この林檎なら食べられる。

「美味しいな、この林檎」

「そう、それはよかつたわ」

「でも、どうしてこんな事してくれるんだ？隊長が一人の野郎に構つていいとは思えないぞ？」

「貴方は私の事を命懸けで護ってくれたでしょう？それにあの時…私は何も出来なかつた」

「落ち込むなよ、あの時はじょうがないって

ストライカーも武器もない状態だ、そんな状態で闘えっていう方が無理というもの。

某作品に登場する、どんな武器・兵器だらうと手にした時点でロランク相当の武器となる、とある狂戦士となつた騎士の能力の様な力があれば、何とかはなつただろう。

実際、その騎士は策に墳められ丸腰の状態で闘つ羽目になつた時、榆の樹の枝で相手を斃したぐらいだ。

尤も、そんな都合のいい能力あるわけないが……。

だが、ミーナは静かに首を横に振つた。

「それでも……私は闘つて、死にそうになつて……いる貴方を……ただ黙つて見ているしか出来なかつた。だから、せめてこれぐらいは……ね

「……優しいな、アンタは」

「えつ？」

「何度も言つけど……アンタが氣にする事じゃないって。お前も俺も生きてる……お互い無事だったんだし、それでいいだろ」「

「儀國さん……」

「……辛氣臭い顔すんなよ。アンタ程の美人がそんな顔をするの、俺は見たかねえんだよ。だからそんな顔すんなよ、『ミーナ』」

「ツ……有難う、儀國さん」

ミーナは優しい微笑を浮かべて、次の林檎を食べさせてくれた。

Act 11・療養生活「弐」（後書き）

Act 11 「弐」でした。

サー＝ヤヒト兄ちゃんって言られてみたいって想像から書いてみましたが… やつぱつサー＝ヤヒトってありますよねー破壊神ですナビ… ～

すわー！

Act 12・戦鼓【鼓】（前書き）

Act 12【鼓】です。

Act 12・戦鼓【壱】

ウイッチ達の一部からの手厚い看護を受けて十日後

。

「どれどれ…」

身体機能・異常回復中　性能83%中83%回復。

魔力回路・42%修復完了　引き続き修復作業続行。

魔力回路の修復作業中により、魔術の使用不可。

「まだ魔力回路は治つてないか…」

十日経つても今だ修復作業を続けている魔力回路。でもとりあえず満足に動けるようにはなった。左腕もまだ少し痛むが、以前に比べたら満足に動かせるようになつた。

これも宮藤やリーネ、ミーナの…あ～ん、が効果による物かもしれない。

…三日前まで、三人からの食事介助を受けてきた。一日目には流石に慣れたが、それでも恥ずかしさは完全には消えなかつた。

ミーナも隊長としての務めをしている分、疲れている筈なのにほぼ毎晩訪ねては果物を剥いて食べさせてくれた。

疲れているから帰つて休めと言つても、ミーナは大丈夫と微笑み決して帰ろうとしなかつた。ちゃんと身体は休められているのか、それだけが気掛かりでいる。

介助を受けて一週間後、ようやく一人でも食べられるようになつた。動けるのだから、もう介助を受ける必要はない。いつまでも三人に甘えている訳にもいかない。

もう介助は要らないと言つと、富藤とリーネは物凄く落ち込んでいるように見えた。

ミーナも、やう…、とだけ言いそれから介助することはなかつた。ただ、それでもミーナは夜医務室に来では果物を剥いてくれた。

しかし、いざ介助してくれないと…少しだけ寂しい感じもした。

…何はともあれ、本調子ではないが動ける。

エラー状態であるが故に身体能力も本来の性能を発揮させることは

出来ないが、それでも全回復した。

これでミーナも夜遅くまで居ることなく、ゆっくりと休められるだ
らいい。

「こいつを着るのも十日振りだな

とりあえず今日の着替えに素早く着替える。五日ぶりに来た整備兵の服装、今までは着物みたいな服だったが、やっぱりこっちの方が落ち着く。

当初はこの整備兵の服装について何だかんだ言っていたが、今ではこの服を気に入っている。

整備兵の服装に着替えた後、厨房へと向った。腹が減つては何とやら、それに久し振りに自分で何か作ろうとを考えた。

ここ最近は宮藤とリーネの食事だった。二人の料理が不味いから、とこいつのは決してない。

が、たまには食事に並ばない料理が食べたくなった。ある種故郷の味を食べたくなった、とでも言つべきか。

「さてと…何にしようかな

食材と睨めっこし、何を作るか考える。

「よし、久し振りに炒飯でも作るか。じゃあ材料は…

材料を選び、調理を開始した。

材料はネギ、卵の二種類。シンプルなものを作ることにした。あっちら鮭フレークとか赤ワインナーとか入れているが、今日は止めた。

じっくりとネギ、卵を炒めてからご飯を投入。味付けは塩コショウと醤油で整える。

意外とこれが整備兵の男連中に評判だつたりする。以前作つたらまた作つてくれという声を貰つたぐらいだ。

「よしよし、我ながらいい出来だな。後は…」

「…そこで何をしている、儀國」

ドアに凭れ掛かり、坂本が尋ねてきた。怒りを孕んだ笑顔、今にも爆発しそうなのが分かる。

「おはよーっす坂本。炒飯作ったんだけど、食わないか？」

「ああ、おはよっ。そして……この馬鹿者……お前は何をしている
つ……!?？」

怒り爆発、坂本の声が厨房に響き渡った。

そこはウホッ、とか言えよ。これだからもつさんは……。

医務室、そこで自分が作った炒飯を食いながら坂本と話していた。
後から坂本にもう一度勧めると食べると言い、一緒に食っている。

味の評価は良いこと。因みにその時のやり取りは……、

『炒飯を食わないか？』

『むつ?ま、まあ折角お前が作ったんだ。頂くとしよう』

「分かつてはいたがウホッ、とは返してくれなかつた。

「それで、身体の具合はどうなんだ?」

炒飯を食べながら坂本が尋ねてくる。

「とりあえず普通に動けることは出来るし。大丈夫だ、問題ない。あ、勝手に厨房使つて悪いな」

同じく炒飯を食べながら坂本の問いに答えた。

「そんな事はどうでもいい!全く……本調子でないのに動くんじゃない。お前はまだ病み上がりですらないんだ、大人しく寝ていひ

「え……だつて暇なんだよ。寝てばっかりいたりもつ……ウワーッ、つて感じ」

「どんな感じだ……ハア」

疲れ切つた様子で、坂本は大きく溜息を吐いた。

「で、魔力回路の方はどうなんだ？」

「まだ修復作業中。後少しで半分いくかってところかな」

「そうか……」

「まあいいさ、のんびりして回復するのを待つし。ところで、そろそろ例の物を渡してくれないか？」

例の物？ つと不思議そうな表情を浮かべて小首を傾げた坂本。

「おいおい、扶桑刀だよ扶桑刀。お前が今預かってるんだろ？」

「ああ、あれのことか」

すっかり忘れていたと笑い声を上げる坂本。

そんな坂本にしつかりしてくれと、苦笑いを浮かべる。

「とりあえず身体の方は大丈夫だ、問題ない。
けど…今の俺じや魔術を一切使えない。だから武器が必要なんだよ。
もしアイツが現れた時に応戦出来るようにな

「そんな時まで無理をして倒そとしなくていい。お前は回復するまで大人しくしていろ。もしヤツが現れたら……私達が対処する。が、約束だからな。すぐに持つてこよ」

そう言つて坂本は残つていた炒飯を素早く食べ終え、医務室を後にしてした。

「今の内に俺も食つておぐか」

坂本が戻つてくるまでの間、炒飯を口の中へと掻き込んだ。

数分後、一振りの扶桑刀を持って坂本が帰ってきた。

「これだ

あの砂浜で一回振るつた扶桑刀。それを坂本から手渡される。

「以前宮藤が見つけてきたものだ。所有者が分からないから、一応私が預かっていたんだが……」

鞘から抜けばあの時と変わらぬ、美しい刃が再び姿を見せる。

「……氣に入ったよ、有難うな坂本」

「べ、別に氣にする必要は無い」

「さこでつか…むひと」

扶桑刀を腰のベルトに差し、ベッドから腰を上げる。

「何処に行くんだ？」

「ん？洗い物に決まってるしじょ。使った食器はきちんと洗つ、当然だろ？」

「ふむ、ならば私も手伝おう。お前が作つた炒飯…良かつたぞ」

「そりやよかつた

坂本と一緒に空いた食器を厨房に、そして洗い場で洗う。自分も食べたからと坂本も手伝ってくれた。洗い物をする坂本…なんか新鮮だった。

「なあ、坂本つて料理とか出来るのか?」

「うん?いや、私はあまり料理をしたことがなくてな

「せいか、まあ戦争中だし花嫁修業とか出来る暇ないか

「せひじつ」とだ。まったく、いつになつたら花嫁修業が出来るのやう、だな。ハツハツハ

坂本と談笑しながら食器を洗つた。

Act12・戦鼓【壱】（後書き）

Act12【壱】でした。

今回Act12は非常に短い話となつております。
本当は一つにして投稿しようかと思つたんですけど、一応形として
「壱」と「弐」分けて投稿することにしました。

今回のAct12はAct13へと繋げる為の小話的な感じで受け
取つて下されば…と個人の中ではそう思つております。
すわつ！

Act 1-2・戦鼓【弐】（前書き）

Act 1-2【弐】です。

【弐】の後書きで書いていた通り、マジで短いのであしからず。

Act 1-2・戦鼓【弐】

朝食後、基地内を適当に歩く。

「あつ、儀國……」

エイラが駆け寄ってくる。

「よつ」

「お前、もう動いて大丈夫なのか?」

「大丈夫だ、問題ない。まあ魔力回路の方はまだ修復作業中なんだ
けどな」

「そつか、でもよかつた。あれ? 儀國、お前なんで扶桑刀なんか
持つてるんだ?」

エイラが腰に差してある扶桑刀を指差し、尋ねてきた。

「今の俺は魔術を使えない状態。丸腰じや闘つことすら出来ないだ

ろ？

で、坂本に頼んで一振り貰つたつてわけ

「ふうん

「まあ色々と心配掛けたな

「あっ！儀國さん！？」

今度は宮藤、リーネとやつてきた。

「もう動いても大丈夫なんですか？」

「ああ、ここの通りな。宮藤とリーネの手厚い看護が効果的だつたらな」

「そ、そんなことないですよーーー

照れ臭そうに元気な宮藤とリーネ、そんな一人を微笑ましく思い頭を撫でる。

その横で、エイラが苛立つた様子で此方を睨みつけていた。

私には何も無しか？そつ言つてゐる風にも見て取れた。

医務室で療養している時。

バルクホルンはハルトマンのグータラな生活態度の愚痴を零し、それを適当に聞いて相槌を入れる毎日。時折ちゃんと話を聞いているのかと怒られた。

逆にハルトマンはバルクホルンが神經質だと愚痴を零していく。俺はバルクホルン同様適当に聞いて相槌を入れて対処する。しかし、愚痴を零すハルトマンは何処か楽しそうだった。

シャーリーとルッキーのペアは…何か煩かったとしか印象に残つてない。

来ては何か一人して騒いでいたばかりだった様な気がする…。

ペリー・ヌは相変わらず坂本にベッタリ。

一緒に来ては、まだよくならないのかと呆れられる。

サーニャは今度ピアノを是非聞いて欲しいと言つてくれた。

サーニャの生演奏はこっちも是非聞いてみたいから快く好意を受け取つた。

そして…エイラ。

…エイラに向かしてもうひつたかと問われたら。いつたい何をしてもらひただろう。

これとひつて特別変わったことはしてもらひていない。

強いて言うのであれば。占いでその田の田の運勢を占ひせんでもうひつたぐらい。

別に頼んでもいなが、エイラはお得意のタロットカード占ひ、運勢を教えてくれた。

結果はどれも当たらなかつた。エイラにしてもうひつたことと言えば… それぐらいしか思いつかない。

「あ～うん、お前もよくやつてくれたよ。感謝感謝」

エイラの頭も一応撫でておく。

一応エイラはエイラなりに俺に気遣つてくれたんだろう。

「た、たく…有難く思えよな」

不機嫌そつて言ひづが、顔は喜んでいた。

「あつー…その刀つて」

宮藤が扶桑刀の事を言つてきた。

「ああ、坂本に頼んでな。
さつきもエイラに言つたけど、まだ魔術を使えない状態なんだよ。
だから武器が欲しかつたつていうわけ」

「そ、うなんですか…」

「大丈夫だよリーネちゃん、だつて扶桑刀を持つた儀國さんとつて
も凄いんだよー！」

あの時の事を思い出し、宮藤はその事をリーネとエイラに話す。
一人は興味津々だが、此方としてはその話はあまりして欲しくない。

それにもし、この場で坂本がやつてきたら…絶対に教えるとか言わ
れるに決まつている。

リーネとエイラにあの出来事を話す宮藤を制止しそうとして

、

「ん？お前達、こんな所で何をしているんだ？」

尊をすれば何とやら……。タイニング悪く、坂本がやつてきた。

「あつ！坂本さん。実はですね、扶桑刀を持った儀國さんの事を話してたんです」

「儀國の？」

「あ、おこ町藤……」

「はい！だって儀國さん、魔力も……魔術も使って無いのに石を真つ一つに出来るんですよ……」

「言いやがった……。そして坂本の反応は……

「まう、それは凄いな」

「居合いなんんですけど、鞄から抜いて無いのに石を斬ったんですよ……本当に凄かったですよ」

「居合いか……。儀國、どういう事が教えてもらいたいのか？」

案の定食いついた。

もつその眼は私にも教えると言つてはいるのが手に取る様に分かる。

「ダメダメ、こればっかりは企業秘密です。

幾ら坂本でもコレばっかりは教えられないなあ

「むつ？ それはどういつ

」

その時、基地全体に警報が鳴り響く。ビリヤード敵さんが… ネウロイ
が出現したらしい。

「ネウロイー！」

「富藤、リーネ、Hイラ、行くぞー！」

「……了解ー！」

坂本、その後をリーネと富藤が付いてハンガーの方へと走っていく。

「Hイラ」

ハンガーの方へ走つていいくエイラを呼び止める。

「さつさとぶつ飛ばして帰つてこいよ？」

それと坂本に伝言、無茶はするなつてな

「ああ、分かつてゐつて。儀國こそ、大人しくしてろよな」

そう言つてエイラは口元を緩めた後、ハンガーの方へと走り去つて
いった。

…ふと思う。これつて、死亡フラグ立つてないよな？

大丈夫だよな…俺普通に言つただけだから大丈夫だよな…？

「……なんかあつたらスマソ、エイラ」

ハンガーの方へと走り去つていったエイラに向けて、合掌した。

Act 1-2・戦鼓【弐】（後書き）

Act 1-2【弐】でした。

今日は短かったですけど、Act 1-3【弐】は戦闘シーンがありますので、長めです。

Act 1-2よりも頑張って仕上げますので、今後の期待です。

…今日はその、短いのは見逃してね（謙）。

すねーーー！

Act13・戦火「壱」（前書き）

いやいや、君達は運がいい…今日は特別でね?もう一話出来るんだ。

つてな感じでAct13「壱」です。今回は初、複数の視点からによる戦闘描写です。

上手く書けているか…そんな自信は最初からないです、はい…。

Act13・戦火【壱】

ウイツチ side

「いたぞ、目標を捕捉」

坂本の魔眼がネウロイを捉える。

ネウロイの出現により出撃する。編成されたメンバーは自分を含めて合計7人。

宮藤、リーネ、ペリーヌ、バルクホルン、ハルトマン、エイラ。

シャーリー、ルッキー及びミーナは基地で待機、サーニャは夜間哨戒任務明けで休養中。

目標のネウロイはこの基地へと向つて進行中のこと、そして基地に向つて来ているネウロイとたつた今遭遇した。

大きさからして全長は凡そ50メートル前後。
コアは胴体よりやや後方部の辺りにある。

「各自、戦闘態勢ツ！」

「「「了解！」」」

坂本のその言葉を合図に、ネウロイによるビーム攻撃が放たれる。各々散り、ビーム攻撃を避ける。ウイッチとネウロイとの戦闘が始まった。

「！」

エイラが手にしたMG42のトリガーを引く。銃口から連續して放たれる銃弾はネウロイの機体を傷付ける。

銃弾を被弾することで剥がれしていくネウロイの機体、しかしネウロイとて黙つて己の身体が傷付けられるのを見ている筈がない。

傷付けている本人　　エイラに向けてビームを放ち反撃に出る。

「よつと」

が、エイラは軽々と避ける。

だから次にあのネウロイがどう行動するのか、ビーム攻撃していくのかなど私には手に取るよつに分かる。とが出来る。

次々と放たれるビーム、その位置を予め観ていい私は射撃を行ないながら避ける。

剥がれていく機体、ボロボロと白い破片が海へと落ちていく。

そこに合わせて大尉、中尉の一人がネウロイに向って射撃を行う。

「見えたッ！！」

坂本が叫ぶ。

ネウロイのコアが現れる。赤々とし美しい輝きそれはまるで宝石の如く、ネウロイの心臓部・コア。

コアが現れたことでネウロイの攻撃に荒々しさが出てくる。絶えず放たれるビーム、しかし各々ビームを見切り、コアを狙つて射撃する。

自分の心臓が晒し出されているのだ、何としても護りつとするのは自然なこと。

だが、これで終わりだ。

「いっけえええええつ！！」

宮藤が一気にネウロイに接近。ビームの雨の中を見事な回避行動で避け、そしてコアを狙つて射撃する。

火を吹く九九式一三三機関銃。放たれる銃弾、そしてそれは見事ネウロイのコアを捉えた。

銃弾を受けたことで碎け散るコア、それに伴いネウロイが白い破片となつて消滅した。

「見事だ、宮藤」

「は、はいー有難う御座いますー。」

坂本さんが褒めてくれた。

「やつたね芳庭ちゃんー。」

「ま、まあ宮藤さんにしてはよくやつましたわ

ネウロイを斃した喜びを分かち合つ。基地へと向つていたネウロイはやつつけた。

皆嬉しそうに笑みを浮かべている。

儀國さんも、私がネウロイをやつつけたつて言つたら、褒めてくれるかな？

「じゅら坂本、ネウロイの撃墜をした。」わざと帰還する

《了解、皆お疲れ様》

インカムを通して坂本さんがミーナ中佐に報告。そして基地に帰ろうとした。その時だつた。

《ちよつと待つてー何ー」れ…凄い速さ、やつて向つてくるわー。》

ミーナ中佐のその声を聞いたと同時に。

「なつ…ー？」

「！」

「ネウ...ロイ」

皆に戦慄が走る。凄い速さでやってきたのは人型のネウロイ。そのネウロイは一度儀國さんと闘つた、あの騎士型ネウロイだった。

リーナ side

「様子はどうだ?」

司令室に儀國さんがやつてくる。その手には一振りの扶桑刀、魔術を使えない状態である今の儀國さんの唯一の武器だと、美緒は言つていた。

まだ...儀國さんは魔術を使えないのね...。

「大丈夫、さつきネウロイの撃隊を確認したわ

「そうか、ならいいや」

「ヒカル、儀國さんはどうしてここ?」

「なに、ただの興味。戦況が知りたくないだけ。まあネウロイを撃墜したならいいけど。けどアレだな、ようやく普通… かどうかは知らないけど、ネウロイが現れたって言つか

儀國さんの言葉に私は頷いた。

「こ最近はあの騎士型ネウロイや、ズボン事件を起こし儀國さんに濡れ衣を着せた動物型ネウロイ 儀國さん曰く、イタチ型ネウロイしか見ていない。」

だから儀國さんの言う通り、私達が今までに闘つてきたネウロイが出現したのは久し振り。

…正直、あの騎士型ネウロイじゃなくてよかつた。

「まあなんにせよ全員無事でえがつたえがつた、ウンウン

「ふふ、そうね ッ

レーダーに反応があつた。出撃したウィッチ達しか映し出されていなかつたレーダー。

そこにある筈のない反応が一つ、ウィッチ達に急接近している。

「ちよっと待つてーなに…」「…凄い速や。わっかに回つてるわー。」

美緒達に伝える。ネウロイは斃した、なのに何故レーダーに反応が
映る?

それも凄いスピードで美緒達に接近している。

嫌な予感がした。まさかとは思ひながら…

「アイシッぢやないのか?」

不意に、儀國さんが口を開いた。と、同時に美緒達の声が聞こえて
くる。

『なつ…！』

『い、コマイシ…！』

『ネウ…ロイ』

新たなネウロイが出現。そして美緒、トゥルーデ、富藤さんの口調
からして現れたのは…やはりあのネウロイ…。

「ヤツだな…」

儀國さんが呟く。嫌な予感は的中してしまった、あの騎士型ネウロイが出現した。

ウイッチ side

戦慄が走る。突如として現れたあの騎士型ネウロイ。何故このネウロイが…と誰もが思っていた。

「…各自、油断するな…」

坂本が指示を出す。

相手はあの騎士型ネウロイ。儀國すらも苦戦した、それ程の強力な力を持つ謎多き人型のネウロイ。だが、この場に出現し遭遇した以上闘うしかない。

このネウロイも基地へと侵攻しようとしている。基地にはミーナ達や、儀國がいる。

何としてでもこの場で撃墜しなければ…！

「？…仕掛け、こない？」

バルクホルンが疑問を口にした。

ネウロイは人類を…私達ウイツチを敵と認識しているのは常識。従つて遭遇すれば直ぐに攻撃してくる、それがネウロイだ。逆に、私達もネウロイを発見すれば直ぐに撃墜に向う。

が、この騎士型ネウロイは私達を前にしているといつの間に攻撃する様子を見せない。

首を左右に動かし、私達を一人一人見据えている。

その行動は、まるで誰かを探していると言つたのも見えた。

いつたい、誰を探していると言つんだ…？

「いざれにせよ、お前はここにで斃せてもうらう…」

少佐が烈風丸を構える。その行動にネウロイが反応し顔を向けた…が、直ぐに逸らした。

少佐に対しお前には興味がないと、まるで…そう言つているかのように。

「このネウロイはいつたい何を…

「まさか、コイツの狙いは儀國なのか…？」

少佐が儀國の名を口にした。するとどうつか、少佐のその言葉に騎士型ネウロイが大きく反応した。

「な、なんで儀國さんのお前を出したいたら

宮藤が不思議そつに言つた。

「やうか…やはつ…」

坂本は氣付いた。何故烈風丸を構えたことに反応を示したのかを。この騎士型ネウロイは本来射出するビームを刃状にしての近距離戦闘を得意としている。

そして騎士型ネウロイは一度に渡り、儀國と剣を交えている。
儀國は「ソードサマナー剣極の調」にて剣を振るう者。そしてこのネウロイもまた剣を振るう者。

このネウロイは恐りく、『剣で闘う』とこいつてこいつだわりを持っている。

だから私が烈風丸を構えた時に反応を示したのだろう。同じ剣を振るう者として…。

直ぐに顔を背けたのは、剣を振るう者として役不足だと…そういうことなのだろうか？

ネウロイが一人の人間に執着するなんてことは…、こだわりを持つて闘うこと等今までになかった。

いつたい、このネウロイは何なんだ…？

「…………」

バルクホルンは静かに騎士型ネウロイを見据える。

未だ自己修復を続けている左腕。肘より下が無い…蒼い炎を受けた傷はまだ癒えていなかつた。

この騎士型ネウロイは儀國を狙つてゐる。

胸を剣で突き刺されたこと、かつてミーナが言つていた蒼い炎…「CODE:BLUE 終焉の蒼」を受けたこと…、それらに対する復讐とでも言つのか?。

…どちらにせよ、ここから先へと行かせるつもりはない。

儀國が狙いならば尚更だ。アイツは今魔術を使えない状態でいる、今のアイツは一般人も同然。そんな儀國を護るのは…私達しかいない。

あの時、妹を…クリスを助けてくれた恩人を、決して殺させはしない。

「各自戦闘態勢!」こいつをこの場で仕留める!」

「「「了解ッ!」」

少佐が皆に指示を出す。

なんとしてでも、この場でこのネウロイを斃す!

私は両手に携えたMG42の銃口を騎士型ネウロイに向けた。

Act13：戦火「壱」（後書き）

Act13「壱」でした。

次話ではウイツチ隊VS騎士型ネウロイの話となります。
果たしてウイツチ達は勝つのか！？

乞ひ期待です！

すわっ！！

Act13・戦火「弐」（前書き）

Act13「弐」です。

相変わらずの出来栄えです…はい。

Act13・戦火【武】

ウイツチ side

「ずおりやああああああつ！！！」

バルクホルンが両手にしたMG42のトリガーを引く。二つの銃口から同時に放たれる銃弾、騎士型ネウロイは右手を突き出し、シールドを展開した。

見たことも無い呪文、図式の魔法陣が展開され放った銃弾は全てシールドによつて防がれる。

この騎士型ネウロイは我々ウイツチと同じく魔法を使う。ならばシールドも使って当然か…。
が、面倒な相手だ…！！

「はああああああつ！！！」

坂本は背中の烈風丸を鞘より払い、一気に騎士型ネウロイへと間合いを詰める。

儀國から魔力行使を、烈風丸を振るうことを極力避けるとは言われている。

さもなくば私の魔力回路に負担が掛かり一度と使い物にならなくななる、と…アイツからは何度も念を押されていた。

が、今はそれを守ることは出来ない。このネウロイが現れた以上、この場で斃すしかない。

基地に待機しているのはミーナ、シャーリー、ルッキー、夜間哨戒任務明けのサー二ヤ。

そして…ミーナを護り「終焉の蒼」と呼ばれる蒼い炎を使用した反動で魔術が使えない状態の儀國がいる。

この騎士型ネウロイの狙いは儀國。魔術が使えない状態の今の儀國では絶対に勝てない。

基地には絶対に行かせない、儀國に代わりこの場で騎士型ネウロイを討つ！

だから今はもつてくれ…私の魔力回路

！！！

「フンッ！」

手にした烈風丸を騎士型ネウロイに向けて振るつ。

大きな金属音が鳴り響き、火花が散る。振るつた烈風丸の刃は騎士型ネウロイのビームブレードによつて阻まれる。

「 つ！！」

反撃の横薙ぎが飛んでくる。坂本は烈風丸でそれを防いだ。が

、

CODE:BLUE

「ツー！」

騎士型ネウロイの一撃は予想以上に重く、防御の上から押され大きく吹っ飛ばされた。

「くうつ……なんて重さだ、儀國はこんな重い剣と闘っていたのか……」

まるで巨大な鉄球を受け止めている、そんな気分だった。試合をした時に儀國から受ける一撃も重い。それと同等か、或いはそれ以上か……。

最初から分かつてはいたが、闘つ事でより理解できる。このネウロイは……強い！

「坂本少佐……おのれよくも……！」

ペリースはブレン軽機関銃Mk.1を構えて騎士型ネウロイへと向つた。

「坂本少佐を傷付けた罪は重いですわよ……！」

「ペリースさん！」

富藤も合わせて騎士型ネウロイに射撃する。が、騎士型ネウロイはシールドを張つてそれを防いだ。

「厄介だね……」

「ああ、確かにな…」

ハルトマンとバルクホルンは騎士型ネウロイを見据える。

射撃攻撃がなく、近距離戦闘をする騎士型ネウロイ。射撃という技能がないという代わりに携えている魔法。

シールドを張られては幾ら攻撃してもネウロイ本体まで行き届かない。

更に前方だけでなく、攻撃が来る方向全てにシールドを展開される。

これでは幾らフォーメーションアタックを仕掛けても意味が無い。

それに少佐の烈風丸による一撃をも簡単に防ぎ、そして防御の上から押し飛ばす程の威力。

現在少佐、富藤、ペリース、エイラの四名が騎士型ネウロイと交戦している。

少佐は正面から、それをカバーするように三名が援護射撃を行う。だが、四名による攻撃は全て騎士型ネウロイに当たることはなかった。

それにはあの騎士型ネウロイ、あの場から一歩も動いていない。

その行動が何を意味するのか…それは簡単だ。私達は侮辱されている…、騎士型ネウロイに手加減をされているという事だ。

「くつ…舐めた真似を…」

私は悔しかった、ネウロイ元こじまで侮辱されたのは今日が初めてだ。

悔しい…が、ここで冷静さを失ってはいけない。如何なる状況にあつたとしても、戦場では冷静さの有無で生死が左右される。

だから落ち着け、そう心の中で自分に言い聞かせる。

「あ、あの……！」

その時だ、リーネが口を開いた。

「どうした…？」

「もしかしたら、ネウロイのシールドを破れるかもしません！」

その一言は、今の戦況を変える希望の光だった。

流れてくる坂本達の会話。
現場を直接見ている訳ではないが会話から察するに苦戦している様子。

「…………」

やつぱり…俺がやるしかないか。

「儀國さん…？何処に…？」

「一応戦闘準備。アイツの相手は、俺がした方がよさそうだな」

恐らく、あの騎士型ネウロイがここに来るのは最早時間の問題。待機しているミーナやシャーリー達でもヤツを止められることは出来ない。

あつちは7人掛けで戦つてアレだ、それより少ないこのメンバーで挑んだとしても結果は同じだろう。

それに坂本達の会話からして、どうやら相手の狙いは俺のようだ。なら俺が出て相手をするというのが道理。

「だ、ダメよ！貴方はここで待機を

」

「敵さんの狙いは俺なんだろ？」

それに今の状況だと、アイツがココに来るのも時間も問題だ。なら、俺が相手するのが筋つてもんだろ？」

「儀國さん！貴方は今魔術が使えない状態なのよ！？それなのにどうやつて　」

その時だ。リーネのボーアズMK1対装甲ライフルの発砲音が聞こえた。

ウイッチ side

「なるほど、分かった」

インカムを通しバルクホルンの言葉を聞き、坂本は頷いた。

再び騎士型ネウロイへと見据える。宮藤、ペリーヌ、エイラによる三人の攻撃をシールドで防いでいる。

「…よしつ…」

烈風丸を構え直し、騎士型ネウロイへと向つて突撃した。

「…………」

騎士型ネウロイに向け、リーネはボーアズMK-1対装甲ライフルの銃口を向ける。

坂本少佐が騎士型ネウロイに向つていいくのを確認。

スコープの先、そこにはシールドを張つて芳佳ちひる達の攻撃を防ぐ騎士型ネウロイ。

あのシールドがある限り、私達の攻撃はネウロイまでは届かない。だけど、あのシールドを破る可能性がたつた一つだけある…。

「……お願い、いって…！」

トリガーを引く。大きな銃声と伴い、金色に煌く弾丸が放たれる。真っ直ぐ、騎士型ネウロイへと向つていぐ55口径の弾丸。それに気付いた騎士型ネウロイはシールドを展開。

放つた銃弾はまたも騎士型ネウロイのシールドによつて阻まれる

、

「ネウロイのシールドを破つた！」

「やつた…！」

ことはなかつた。硝子が砕け散るかの如く、騎士型ネウロイの展開したシールドは砕け、そしてそのまま右腕を破壊した。

以前儀國さんから手渡された特殊弾。

「貫通」の効力を現すルーン文字が刻まれた銃弾を以前に貰つた。

貰つてから使う日が来なかつたけど、ようやく今それを使う時が来た。

「はあああああああつ……！」

リーネの放つた弾丸が見事騎士型ネウロイのシールドを破つた。

以前儀國がリーネに手渡していた特殊弾丸、あらゆる防御を貫通するという効力を附加させた弾丸は騎士型ネウロイのシールドを難なく貫通、そのまま右腕を破壊する。

流石のネウロイも、こうなるとは予想していなかつただろう。何にせよ、唯一の武器だつた右腕も今の一撃で破壊された。

その右腕が破壊されている今こそが、シールドを破壊した今こそが好機！これを逃せば次はない……次のシールドを張られる前に、ここでケリを着けるッ！！

「終わりだ！烈風斬ッ！！！」

坂本は一気に烈風丸を縦に打ち落とした。

斬つた、そう確信した坂本の表情は驚愕へと変わつた。

「な……に？」

金属音が響き渡る。

打ち落とした烈風丸の刀身は騎士型ネウロイへと届いていなかつた。

シールドを張られて防がれたわけではない、右側から伸びている赤いビームブレードが、烈風斬を受け止めていた。

ビームブレードが出ている方向を見る。そこには別のネウロイが出現していた。

騎士型ネウロイと同じく、人型…。

姿形は、目の前の騎士型ネウロイとは違っているが騎士のような姿をしている。

新たな人型…騎士型ネウロイの出現。

「そ、そんな馬鹿な…！！」

「まだ騎士型ネウロイがいるってこと…？」

バルクホルン、ハルトマンも我が田を疑う気持ちで、新たに現れた騎士型ネウロイを見据えた。

騎士型ネウロイなんて言つ、非常に珍しいタイプのネウロイ。そのネウロイは儀國と互角に戦う程の戦闘能力を持つてる。

そんなネウロイが…もう一機現れた。

私達…勝てるかな？

ハルトマンは一機の騎士型ネウロイを見据えながら思つた。

「くっ…！」

坂本は緊急回避を行い、ネウロイとの間合いを空ける。

そして直ぐに烈風丸を構え直した。それに合わせて、他のウイッチ

達も戦闘態勢に入る。

「な、なんだ……？」

目の前で起きている光景に、坂本は眉を顰めた。

新しく現れた騎士型ネウロイが、最初に現れた騎士型ネウロイに何かをしている。

それはまるで話し合っているかの様な……そんな感じだった。

暫くして、騎士型ネウロイ達が此方に顔を向ける。

来るか……！

迎撃体勢に入るも、騎士型ネウロイ達は攻めてこようとしなかった。そのまま凄まじい速度で上昇、何処かへと飛び去つていった……。

逃げた……いや、見逃されたと言つべきだらう……。

事実、もし戦闘になつていたら確実に私達は全滅していた。

一機の騎士型ネウロイを相手するのに此方は7人掛けで何とか。

そんな状態でもう一機も現れたとなると、その倍の数が必要となる。

いや、倍の数を以つしても勝てるかどうかすら怪しい。

騎士型ネウロイは私達ウィッチと同じく魔法を使つ。

最初に遭遇した騎士型ネウロイの固有魔法は『結界』。恐らく、新たに現れたあの騎士型ネウロイも同じく……何らかの固有魔法を所持している。

それにあの新たに現れた騎士型ネウロイ……最初のネウロイよりも間違いなく強い。

「…基地に帰還する

「「「…」」解「」

何はともあれ、報告しなければならない。

新たに現れた騎士型ネウロイの出現、そして騎士型ネウロイの目的を…。

坂本達は基地へと帰還した。

宮藤 side

基地へと帰還する。滑走路でミーナ中佐達と儀國さんが出迎えてくれた。

「儀國さん…」

私は早速儀國さんに今日の戦果を報告する。すると儀國さんは意外そうな表情を浮かべて

、

「へえ、西藤がネウロイをねえ。流石豆狸つて呼ばれただけはある」

「豆狸つて何も関係ないじゃないですか！？」

相変わらず儀國さんは私をバカにしてくる。でも、よくやつたって言つて頭を撫でてくれた。それが私はとっても嬉しかった。

「リーネ」

私の頭を撫でながら、儀國さんは遠くの方で見ていたリーネちゃんに声を掛けた。

「は、はーーー」

儀國さんに呼ばれて、リーネちゃんは慌てて駆け寄ってきた。

「前もよべつたな。ちやんとローンが発動してよかつた

「いえ、儀國さんのおかげです。有難う御座いました」

リーネちゃんも儀國さんで頭を撫でてもいい。リーネちゃんも嬉しそうしてこいた。

…儀國をさつて、本邦に兄ちゃんみたい。

サーーヤちゃんが儀國さんをお兄ちゃんって呼ぶのを知ったのは、まだ最近のこと。

サーーヤちゃんが儀國さんの事をお兄ちゃんって呼んだのを聞いて、私も驚いた。

「いやうんは…」と不満がついた。

ずっと前、お茶会をした時にサーーヤちゃんと儀國さんのことで話してた。

儀國をさつて、何だかお兄さんみたいな感じがあるねって。多分、それからサーーヤちゃんは儀國さんの事をお兄ちゃんって呼んでいたんだと思つ。

…私もサーーヤちゃんみたい、儀國さんのことお兄ちゃんって呼ぼうかな…。

でも私が言つたらまた馬鹿にされるかも…。

「儀國」

坂本さんがやつてきた。

そして騎士型ネウロイを取り逃がしたこと、新しい騎士型ネウロイが出現したことを伝えた。

すると儀國さんは

「…まあ通信を通して大体は分かってる。それにしても、新しいのが…ねえ」

不適な笑みを浮かべていた。それに、何処か嬉しそうな…そんな風にも見えた。

どうして、儀國さんはそんな顔をしていられるんだろう…。

「儀國さん…？」

「ん？ああ、まあ脅威が一つ増えたことには変わりない。
けどな、アイツは俺がブツ斃すつて決めてたんだ。その相手が増えただけ、それだけだ」

「…怖く、ないんですか？」

「怖い？怖いもんかよ、あんなヤツ等よつもつと怖こまこまつて
ぜ、俺は。
心配すんな、あこつ等は俺が纏めて斃す。お前等に危害は加えさせ
ねえよ」

わいつらつて儀國さんはまた私の頭を撫でてくれた。

儀國やさん元撫でられたるとい、本当に落ち着くなあ……。

Act13・戦火「武」（後書き）

Act13「武」でした。

複数の視点から書く戦闘描写、本当に難しいですねえ。
メチャクチャ大変で、かなり迷いましたッス…。

そんな訳で、次から暫くノホホン（？）とした話が続きますです。
すわっ！

Act14・冗談注意報「壱」（前書き）

Act14「壱」です。

なんか最近、タイトルが全く浮ばないですね。

Hイラ side

今、私は重要な任務を帯びている……と思つ。

「お、出てきた」

儀國が部屋から出るのを確認。左腕は未だに包帯が巻かれていて、そして魔術を使えない状態である為扶桑刀を一振り、所持している。

いつもの整備兵の服装に着替えて、儀國は何処かへと歩いていく。

「なあ儀國」

部屋から出てきた所、儀國に声を掛けた。

事の発端はとある日の朝の出来事。

午前、少佐は儀國と試合をしようとしていた。

魔力回路がまだ治らないけど、身体だけは元通りになつた…らしい。寝ていた分のブランクを取り戻そうと儀國は扶桑刀を手に、砂浜へと向う。

そこに少佐が久々に手合させしようと誘つた。けど、その日儀國は断わつた。

いつもなら相手にするけど、魔術が使えるまでは試合はしたくないと…そう言って少佐に断わつた。

そして、この次の儀國の発言が。私が極秘任務…と言い難い任務を帯びることになつてしまつ。

何故だと尋ねる少佐に対し。儀國は、扶桑刀を持つと一瞬で終わるからと、そう返した。

つまり、扶桑刀を持った時点で既に勝ちは決まつたも同然だと…そう言つた。

それを聞いた少佐は不適な笑みを浮かべて扶桑刀を構えた。

面白い、是非やってみろと…。挑発的な態度で儀國に試合を申し込んだ。

それでも儀國は断わつてたけど…中佐が登場。約束したんだからちゃんと護りなさいと儀國に発言。

暫くして、儀國は溜息を吐いた後渋々承諾した。

場所は砂浜、その日は珍しく全員揃っていた。

中佐もこの時ばかりは面白そだだから、と試合を見ていた。

やる気マンマンの少佐に対し、心底気だるそうな儀國。

大きな溜息を吐いた後、静かに手にしていた扶桑刀を構えた。

鞘に収めた状態での構え、宮藤に聞いたその構えは扶桑に伝わる構えで居合いといふらしい。

後で儀國に聞いたら儀國の世界、扶桑で言つ日本には昔拔刀術（居合い）を得意とする剣豪がいて、その剣豪は神速の速さを生み出すことが出来るとか何とか言ってた。

龍 閃とか天 龍閃とか、兎に角凄い必殺技を使う剣豪がいたそうだ。

おおー、と言つのが口癖らしい。

因みに、神速という言葉を聞いてスピード命のシャーリーが物凄く興味を示したのは…言つまでも無い。

儀國から神速についてその話を聞いた後、超音速の次は神速だ、つて凄く張り切っていた。

そして儀國と少佐との試合。珍しく皆が揃い試合を見守る中、少佐が先に仕掛ける。

そこで、信じられない現象が起きた。

カチンツと音が鳴ったと認識した時、試合は既に終わっていた。宙を舞い、暫くして砂浜へと突き刺さった…少佐の扶桑刀。

儀國は扶桑刀を鞘に収めた状態…居合いの構えの状態でいた。

以前に宮藤が言つてた、扶桑刀を鞘から抜いて無いのに舌が真つ二つに斬れたつて。

そんな馬鹿な現象起きるわけが無い。その時はそう思つていた。けど、今の儀國は鞘から刀を抜いていない。その状態で少佐の扶桑刀を弾き飛ばした。

誰もが唖然、宮藤だけは凄いと声を挙げている。

少佐も扶桑刀を構えていた格好のまま、その場で固まつていた。

儀國はだから言つたのに、と言わんばかりの表情を浮かべて小さく息を吐いた。

儀國が宣言したとおり、試合は一瞬にして決まった…。

儀國が言つていた神速つてこのは… じつじつとなのかもしれない。

動きすらも視認出来ない、日に捉えられない速さ… それが即ち、神速…。

あの試合の後、少佐は落ち込むどころか今の技はなんだと儀國に尋ねる。

鬼気迫る迫力で頼む少佐、儀國は若干引いていた。

儀國は詳しくは答えず、魔術行使を一切していない技とだけ答えた。魔力を、魔術を一切使わないでの速さ… 儀國が時々人間と違うんじやつて思つてしまつ。

で、少佐は誰もが予想通り儀國に今のを教えると頼んだ。

そしてまた皆の予想通り、儀國は拒否した。理由は… やつぱり面倒臭いとのこと。

ただ、いつもと違つたのは… 儀國の表情だつた。

ふざけた言動なのはいつもなんだけど… その時は何処か悲しげな感じがした。

他の皆はまたが、つて感じで苦笑いしてたけど。私にはどうもいつ

もと違つ感じたことが氣になつてゐた。

そして今、私は少佐からある任務を言い渡されて儀國の部屋に向つてゐる。

内容は至つてシンプル、あの試合の時に見せた技の詳細について聞かれて、といふもの。

何故私が…と反論したら、少佐曰く、剣や刀に全く無縁なヤツだからこそ儀國は話すかもしれない、とのこと。

…どんな理由だよ、それ。確かに私は剣とかは使わないけど…。

「ん?エイラか、どうしたんだ?またサーニャのズボンが紛失したとか?」

「違う。お前に聞きたい事があるんだ」

「聞きたいこと?」

少佐が絡んでいることは、儀國に知られてちゃいけないのは当然。ストレートに尋ねてもいいけど、一応様子を見ながら聞いてみるか…。

「あのさ、あの時の試合で少佐の刀弾き飛ばしただろ？あれが儀國が言つてた神速つてやつなのか？」

「ああ…あれね。神速かどうかって聞かれてもなあ…何とも言えな
いが答えたな。

でも、どちらにせよ俺のはまだ遅い方だ」

「えつ？そ、そうなのか？」

「俺のお師匠様だった人は、マジで凄かつた。
もしあの試合の相手が坂本じゃなくて、俺のお師匠様だったら…刀
圧し折られてそのまま数回は確實に切り刻まれて、ブチ殺されてる
な…」

あれで遅いって…どんだけだ。

儀國も人間離れしてるけど、儀國のお師匠様って言う人も本当に人
間か？

ネウロイみたいな怪物か何かじゃないのか？

それにしても…

「まあそんなお師匠様だったけど、かなりの酒好きだった。いつも
酒臭かつたし、あれはマジで嫌だつたなあ」

懐かしむように儀國はお師匠様という人について話している。
そしてお師匠様のことを話している儀國は、どこか嬉しそうだった。

まるで自分の両親を面接する幼い子供のよつな……そんな感じ。

「ふーん。て言つた、さつきの何だよ。全く見えなかつたが。
いつたいじつやつたんだ? 本当は魔術か何か使つてゐんじやないの
か?」

そろそろ本題に入つてみる。儀國はどんな反応をするやつ……。

「……なあエイリフよお」

「な、何だよ……」

「も、もしかしてバレ……た?」

「お前……俺に何か隠し事してゐるだら?」

「えつー? な、何のことだ?」

儀國つて本当に勘が鋭い。

確かに、私は少佐に頼まれたつてことを隠しているけど……。

「……なるほど」

納得したように、やれやれと呆れた表情を浮かべた。

「な、何がなるほど……なんだよ」

「坂本に頼まれたつてわけか。そうだな……大方、剣術に無縁という理由か何かでお前を向させたつてところだろ?」

「な、何で分かつたんだ!?」

確實に私の心を読まれた。

「コイツ……やっぱり人間じゃない。人を心を読むなんて反則過ぎだ。

「洞察力の賜物だ。お前分かりやす過ぎ。

つーかダメだ、絶対に教えないって言つただろ?」

「だ、だつて少佐が私の代わりに上手く聞き出してくれって言われてさ...」

「アイツめ...他人を使つてくるとは...」

この分だと、サーニャやリーネとかも怪しいな。警戒しておくか

そう言つて儀國はスタスターと歩いていく。

と、途中で立ち止まって...

「あ、そうそう。坂本に言つておいてくれ、他人使ってまで聞こうとするなつてな。

...つーか、聞き出したところで面得出来ないだろ」

それだけ言つと儀國は何処かへと行ってしまった。

一人残された私は、暫くその場に佇んで...少佐のところに報告しないで言つた。

任務は誰がどう見ても失敗、儀國の洞察力によつて見破られた。

Act14・冗談注意報「壱」（後書き）

Act14「壱」でした。

最近仕事がクソ忙しいです。夜勤三連続はかなり身体に来ますねえ
…。

誰か私に元気の出る薬を、クスリ（萌え）を下せ…。

そんな訳で、Act14「壱」でした…。

すわッ…！

Act 14：冗談注意報【弐】（前書き）

Act 14【弐】です。

「つたく…坂本のヤツめ

愚痴を零しながらハンガーへと足を運ぶ。

エイラと別れてから、坂本によつて放たれた多くの刺客を受け流してきた。

予想通り、サーニャやリーネが来てアレについて尋ねてきた。

ペリーヌは坂本少佐に教えたないと怒られ、ミーナからは意地悪するなどやんわり注意を受けた。

面倒でも意地悪でも、何でもない。

坂本には、ただ“この剣”を振るつて欲しくないだけ…。

アイツが“この剣”を振るうのは似合わない。

「お、儀國じゃないか。珍しいな、どうしたんだ？」

ハンガーへ着く。ストライカーゴニットを整備していた安藤が気付か、手を止めると此方にやつてきた。

「ちょっとしたワケあつてやつて…暫くまた整備兵として働くことになったッス」

魔術が使えるようになるまでの間、暫く戦線から外されることになった。

とりあえず今は整備兵としての仕事に就へよつて、リーナから渡された。

騎士型ネウロイが斃された今、俺が無理してまで戦線に出る必要はない」と…。

魔力回路が完全に治るまでの間、療養も兼ねて整備兵として過ごせといわれた。

確かに…あの騎士型ネウロイが討たれた今、この状態の俺に出番はないだろ?」

接近戦をしてくるネウロイなんて、恐らくあのネウロイぐらいだ。後はいつもと同じ、空を飛んでビームを撃つてくる、典型的なネウロイ。

となると、闘うのはいつまでもなく我が基地にいるウイッチ達。今の俺が出ても戦力外。

だったら魔術が使えるまで整備兵として過ぐせてもいいことよつ。

「なんか、ハンガー来たのマジで久し振りって感じがするなあ」

久し振りに戻ってきたハンガー、そこで働く安藤と仕事仲間達。

思えばここ最近ハンガーに顔を出していない。本当に久方ぶりである。

「ああ……聞いたぞ。何か凄い蒼い炎を出して重度の火傷を左腕に負つたそうだな。

…もう大丈夫なのか？」

「まあ……一応は。左腕は微妙に痛むけど生活上支障なし。まあ、魔術が未だに使えない状態ではあるけどなあ。てなワケで、魔術が使えるようになるまで整備作業をするわ、また暫くよろしく」

「ふつ、ああ。但し、しつかりと働けよ?」

「へいへい、了解ですよ」と

再びやる日が訪れた、整備作業。

あの時の楽しい日常が、もう一度やつてきた。

安藤に怒られ、それを見て笑う仲間達。談笑し合い、笑い声で溢れるハンガー。

やっぱり、整備兵として働く方が性に合つてゐる気がする…。

今度坂本と試合したら、ミーナに掛け合つてもうおつかな…マジで。

坂本 side

夜の砂浜、そこで私は一人、手にした扶桑刀を振るう。
空を切る音が鳴り、中空に白銀の一閃が奔る。

「…………」

儀國との試合を思い出す。あの時、いったい何が起きたのか…。

儀國との試合、その日はいつもの様に「剣極の調ソードサマナ」により作られた剣ではなく、扶桑刀を用いての試合だった。

今も尚、儀國は蒼い炎…「終焉の蒼」を使った反動により魔術が使えない。だから回復するまでの間と、儀國は扶桑刀を要求してきた。本人も身体が鈍っているから少し運動をしてくると言つていたから、丁度いいと思つた。

私はまだ、魔術の教えを請うことを諦めていない。

しかし、今回は試合ではなく簡単な組み手程度でいいと考えていた。病み上がりで早々試合をするのは流石に酷であるからだ。

だが、儀國はそれをも断わつた。理由は口癖になつてゐる面倒…だからではない、私では勝てないと。

扶桑刀を手にした今、一瞬で勝つからしない。そう儀國はハツキリと言つた。

私は見下されているという悔しさと同時に興味が湧いて出でてきた。儀國は確かに強い、それは認める。

だが、扶桑刀を手にしたことで一瞬で勝つと言つ発言をする程の自信…その腕前はどれ程のものなのか私は見たくなり、早速試合をした。

そして儀國の言葉を無視し挑んだ結果、私は宣言通り…一瞬にして

敗北した。

儀國が取つた構えは扶桑皇國に代々伝わる構え、居合い。扶桑刀を鞘に収めた状態で構える、それが居合いの形だ。

確かに儀國は居合いの構えを取つていた、しかし鞘からは一度も抜われていない。

鞘に納刀したまま、力チンと切羽と鯉口が当たる音だけが聞こえた。その時には既に、私は敗北していた。

いつの間にか手から消えていた私の扶桑刀は、宙を舞い砂浜に突き刺さっていた…。

いつたいあの時、何が起きたのだ？儀國曰く、魔術も一切使っていないと言つていたが… それだと、人の身だけで行つたということになる。

力チン、と音が鳴ったという事は… 儀國は確かに刀を鞘から払い、そして再び鞘へと収めたということ。

つまり… 鞘から抜いて扶桑刀を振るい再び収める、という一連の流れが見えない程の速さを以つしてされた、ということ…。

しかし、そんな事可能なのだろうか？

いや、相手はあの儀國だ。儀國の世界には我々にはない未知の技術が沢山ある。

きっとあの居合にもその内の一つに違いない。

是非とも習得したいところだが、儀國は面倒だと断わり続ける。

そしてエイラやサーニャ、剣術に縁のないメンバーに上手く聞いてみてくれないかと頼んだが、見事に失敗に終わった。

どうやら儀國はこいつなることを読んでいたらしい。
流石だ、と、そこは素直に認める。

やはり教えを請うには、儀國に試合で勝つしかない、か。となれば、どうやってあの居合いを対処するか。

「あれ、今日は先客がいるなあ」

背後から儀國の声と砂浜を踏む足音が聞こえた。

「儀國」

「特訓？相変わらず頑張ってるねえ」

「……儀國、頼む。魔術もそうだが……あの試合の時に見せた居合いで
ついて教えてくれ」

駄目元でもう一度儀國に頼んでみる。

やはり、面倒だと返されるか……。

「……坂本はさ、何の為に剣を振るうんだ？」

予想していたのとは違つ返答が……、質問が返ってきた。

「えつ？」

「いいから答える、何の為に剣を振るう？」

いつになく、真剣な表情で儀國は私に尋ねた。ふざけている様子は一切無い、真剣に……私に理由を尋ねている。

「……私は、刀を振るうのはネウロイを斃すため。一日でも早くこの

世界を平和にする為だ

だから私も、その問い合わせた。私が刀を振るう理由はただ一つだけだ……！

「そうだ。それが坂本の、お前の剣を振る理由。だったら、それでいいじゃねえか」

「えつ？」

「無理して俺と同じ剣を振る必要は無い。
坂本には坂本の剣がある、それを時間を掛けて鍛えていけばいい。
坂本は、コレがなくてもきっと強くなるぞ、必ずな」

「儀國」

そう言った儀國の顔は、何故か悲しみを帯びていた。
悲しい笑みだつた。何故そんな笑みを浮かべるのか、私には分からなかつた。

だが……

、

「それでも私は、強くなりたい。だから儀國、私の師として教えてくれ……！」

「坂本……」

今の私は弱い。

今まで……儀國と共に闘つことは勿論、護る事すら出来ない。

何も出来ないまま、見ていろだけといのは……絶対にしたくない。

「……そうだな、そこまで言つなら……その意氣込みに免じて、教えてやる無いこともない」

「何……ほ、本当か……？」

私は耳を疑つてしまつた。あの儀國が指導してくれると言つではないか。

いつも面倒だからと教える気がないと言つていた、あの儀國が……だ。

「ああ。ただしだーそれ相応の対価を払つてもひつ必要はあるがどうなあ……」

悲しい笑みから一変、不適な…人を試す様な笑みを浮かべて儀國は言つてきた。

あの技を教えてもらう為に支払う対価…何を差し出せばいいのか。

「どうした？怖いんなら別にいいぞ？」

挑発してくる儀國。あの笑みからして、きっと口クな物ではない。だが、私は退かない。

その対価とやらこ、お前の挑戦に受けて立とつ…

「いいだろう、お前が望むその対価…私は支払おう…」

私の答えに、怪しく笑みを浮かべた儀國。そしてゆっくりと私に近付いてくる。

「とりあえず覚悟は分かった。ああ対価だけど、ちょっと大声じゃ言えないんだわ。
だからちょい耳貸せ」

言われた通り、耳を傾ける。儀國は私の耳元に顔を寄せて、そして小声で対価の内容を伝えられた。

「な、何だと！？」／／／

私は儀國が提示してきた対価に、思わず大声を挙げてしまった

「うむせーなあ。大声出すなよ、もっさん

「誰がもっさんだ！？」いやそれよりも……じよ……「冗談なのだろ儀國！？」

「いや、これが条件だ」

「み、見損なつたぞ儀國！お前がその様な男だつたとは……！」

「おいおい、昔からよく言つだろ？大いなる力には相応の覚悟と相応の対価が必要だつてな。等価交換の法則つてやつだ。
それに坂本は良い女だし、俺好みだから、なあ？」

「うつ……くつ……／／／

どんな対価を提示されても私は支払う覚悟でいた。だが、内容が内容だけにその覚悟が大きく揺さぶられてしまった。

「とまあ、とりあえず条件は云ふえた。後はお前次第、ゆっくり考えればいいこと。

ああ、そつそつ…夜いつでも俺の部屋に来ていいぞ?」

そう言い残し、儀國は砂浜から立ち去つていった。

一人残された私は、儀國に提示された対価を何度も頭の中で復唱する。

復唱する度に顔が熱くなつていいくのを感じる。
恐らく今の私は、顔を赤くしていいるだろう。

「ど、どうすればいいんだ?私は…いったい…//

翌朝

「あ~…マジで眠いわ

大きな欠伸を一つ零し、ミーティングルームへと足を運ぶ。

ようやく魔力回路が半分ほど回復された。しかしそまだ魔術が使える状態ではない。

そんな状態ではあるが、一応会議だけは出でおかげとミーナからも言われている。

それだけ参加し、後は整備兵としての作業に戻る。

「坂本のヤツ、今頃どうしてるだろ？ なあ

昨晚の一件を思い出す。

坂本に求めた対価、簡単に言えば俺の女になれ……という事だ。

……自分でも何言つてるんだろうと思つ。

しかしインパクトのある事を言わないと、坂本は絶対に諦めないと思つた。

そしていざ言つてみると、坂本は意外な事に大きく反応した。

予想では、馬鹿者！とか言いいながら怒つて拳骨落としてくるかと思つていたが…。

坂本のあの様子、効果は充分にあつたようである。

意外や意外、やはり坂本も女…こうこう類の話には弱いと見える。恐らくあの時の坂本の頭の中では（そこまでよー…）な妄想が浮んでいたに違いない。

そうなると、純潔が穢れると魔力を失うと信じている坂本は絶対に拒否してくれる。

これで坂本も諦めるだろ？…。

これから先、最低な野郎として認識されるが…諦めてくれるならそれでいい。

何があろうと、コレばかりは教えるつもりはない。

確かに坂本はその質を持っている。だが、坂本では力を物にすることは出来ない。

開眼させた瞬間、逆に力に支配されるがオチだ。

そうなつた時、俺は…坂本を さなければならない…。
そんな事は…絶対にしたくない。

「ういーす、むーす、おはよーす」

「あ、おはよう御座います！」

ミーティングルームに着くと宮藤が最初に出迎えてくれた。今日も相変わらず元気な様子だ。続けてリーネ、サーニャ、エイラと挨拶を交わし適当に席に着く。

「では、今日のミーティングを……あら？ 少佐は？」

ミーナが坂本が居ない事に気付く。そう、確かにこのミーティングルームに坂本に姿は見当たらない。

「そう言えば、見当たらないな。少佐が遅れてくるなんて珍しい

バルクホルンも不思議そうな表情を浮かべていた。と、その時ミーティングルームに坂本がゆっくりと現れた。

「え、坂本少佐？」

「お、遅れてしまい……」

ミーナが少し驚いている。坂本の目の下には隈が出来ていた。

誰がどう見ても眼不足だと分かる程にハッキリと…。

「ど、どうしたんですか坂本さん！？」

「坂本少佐！ いつたい何が…」

「大丈夫だ、富藤、ペリーヌ…。昨晩、少し考え方をしていたら眠れなくてな…」

「考え方…ですか？」

「ああ、私は…覚悟を決めた」

心配する富藤とペリーヌに笑みを浮かべて、そして俺の方へと顔を向ける。

「儀國、私は覚悟を決めた。わ、私はお前の物になろう…。」

坂本の一言により、ミーティングルームの空気が一瞬にして凍り付いた。

…予想外だった。まさか坂本がこんなにあっさりと決断するとは…。

しかも拒否するのではなく承諾。

此方の考え方を、坂本は悪い意味で見事に覆してくれた。

「…儀國さん？これはいつたいどうこう事かしら？」

静寂が流れるミーティングルーム、その静寂を破つたのは我が隊のリーダー、ミーナだつた。ブラツクスマイルを浮かべるミーナの背後からは今までに見たことがない程のドス黒いオーラが見えた…。

ケツの穴にツララを突つ込まれた氣分…とでも言おつか。

「…儀國、どういう事なんだ？説明しろ…」

エイラもミーナに負けんぐらの黒いオーラを見せている。
マズイ…わざと弁解しないと死ぬぞ俺…！

理由を説明しようとしたその時、ミーナが先に口を開き坂本に尋ねた。

「少佐？いつたいうこう事なのか説明してもらひえるかしら？」

「昨晩、私はあの技を教えてもらつよう儀國に請いた。
そして承諾は得たんだが……そのた、対価として……な

「対価……？」

「う、うむ。私は強く成らなければならぬ。

強くなるその為ならば私の身も心も、儀國……お、お前に託す！…

／／／

顔を赤くして言つ坂本。坂本さんの女の子（？）らしい一面が見れたと言うか何というか…。
そして皆からはメチャクチャ睨まれてる。

ペリーヌは勿論、エイラとミーナからは物凄く睨まれる。その鋭い目線は、その目線だけで人を殺せるんじゃないかつてぐらいだ。

ただ一人、ルッキーはついていけない様子だった。

「…弁解する余地をくれませんか？いやマジで、お願ひします」

一時間後、なんとか誤解は解けた。

坂本は「冗談だと分かると物凄く怒つてミーティングルームから出て行つた。その際、鋭い拳骨が俺の頭に降り注いだのは……言つまでも無い。

「……。
幾らなんでも怒り過ぎだ。あんなに怒る様な内容でもなかつたのに。
そんなに教えて欲しかつたのか?…だとしたら、坂本の強くなりたい
といつ執念は凄まじいものだと思つ…。」

どうやら今日は今日の教訓、坂本に「冗談を言つのは…やめるべし。

「イッテ……もつれんの奴思いつきり殴りやがつたな…」

「自業自得ですわね、義國さん」

「いみせえよ、駄眼鏡が」

「誰が駄眼鏡ですかッ!?」

「ああ間違えた、ツンツン眼鏡だつたな」

」キイイイイイイイイイツ――!――!――!

Act14・冗談注意報「弐」（後書き）

Act14「弐」でした。

今回は完全におふさげな回でしたけど…次話からまた徐々にシリアスな話になっていく…筈です！
そういうように頑張って書きます！

そして後ちょっとで儀國とは違うオリキャラが登場…予定…
「ひいひい」期待！

すわつ！

Act15：新たなる戦いの前奏曲「壱」（前書き）

Act15「壱」です。

いやあ、大型のバイクってカッコイイですよね！
こう大きいのに乗つて走るとテンション上がるつて言いますか…。

…私、バイクの免許持つて無いんですけどね。
ヨホホホホホッ！

…ハア、取りに行こうかな、バイクの免許。

Act 15・新たなる戦いの前奏曲【序】

今日は何をしようか…朝食を食べながら、ふと思つた。

今日は休日、仕事をしなくてもいい日だ。とは言つても、俺の場合殆ど仕事という仕事をしていないう気がする。ミーナとかには特に咎められていく訳ではないが…やはり、自分は給料泥棒だとと思つ。

最近になつて整備兵としての作業を再び行つてはいるが…。

何はともあれ今日は休み、何をしようか…。

「…街にでも行つてみるか」

味噌汁を啜りながら、そう呟いた。

ローマにはまだ一度も行つたことがない、古き時代のローマの街並みといつにも興味がある。

安藤達もローマの街に行くと言つていたことだ。

「よし、決めた」

今日は街に出てブラブラと過ごしながら。
と、なれば早速部屋に戻つて準備だ。

一つ誤算があった。

それは移動手段、ここからローマまでかなりの距離がある。
徒歩での移動は不可能に近い、ローマに辿り着くのに数時間は費や
す。

バイクなら免許を持っているが、車の免許は生憎と持つてない。

それに、仮に持っていたとしてもAT車しか乗つてない自分ではMT
の車に乗る事は出来ない。

クラッチとか普通に無理だ、うん。

誰か運転できるヤツに頼むか…。

安藤達も行くと言つていたから、一緒に連れて行つてもいいおつか?

そう悩んでいた時だ、安藤が突然部屋にやつってきた。

「おこ儀國、何かお前に届け物があるひしこだ

「えつ? 届け物?」

安藤に言われてハンガーへと赴く。そこには木製の大きな箱と、物珍しげに集っているウィッチ達の姿があった。

「あ、儀國さん」

「よ、よ、宮藤。で、これか？俺への贈り物つて言つのは

「はい、二つの間にか置いてあつたそ、うなんですけど……」

差出人は……書かれていない。ただ一言、儀國 雅史へ、とだけ書かれている。

いつたい誰からだ？そしてこの中には何が入っているのか……。

蓋を取り外し箱の中身を見る。

そこに入っていたのは……

「あれ？これって……」

「あ、バイクだ」

シャーリーが最初に反応した。箱の中身は一台の単車、そつ…あの世界で愛用していたバイクの一つが箱の中に収められていた。

「つーか何で俺のバイクがあるんだ！？」

モデルはDN-01、イメージは狼と騎士。カラーはシルバー。

確実に違法である改造バイク、世界魔術協会にいる知り合いの技術士と鍊金術師と共に作ったバイク。

素材は鍊金術により生み出された鉱物…オリハルコンの使用。デザインは俺…狼をイメージした滑らかさと、騎士をイメージした重量感溢れるデザインに。

それを元に設計し製作した技術士。

そして出来上がったのがコレだ。あの頃の俺達は若かつたと…、そう思う。

今更ながら、なんで自ら違法車に改造してしまったのやら…。思えばこれを作った時、周りからはオタクやら中二病やら、色々と言われた記憶がある。

それに別にこれと書いて特別な魔術施工がされている訳でもない。オリジナルよりも性能と扱いやすさを向上させただけ。

あの頃の俺は、ただただカツコイイバイクが欲しいと、それだけの為に協力を得て作ったのだ。

気に入ってるからいいけど…。今更魔術施工する気もそんぞりない。

因みにコイツに名前は無い。某究極幻想の主人公も北欧神話の怪物、フェンリルと名付けたバイクに乗っていたが…。流石に名前まで付ける気にはなれなかつた。

「スゲーカツコイイバイクだな！これ、儀國のか！？」

シャーリーが眼を輝かせてバイクに近付く。

流石シャーリー、こういういた類の物には眼が無いようである。

「ああ。差出人が誰かは知らないけど…」

何はどうあれ、移動手段を得た。これならばローマにも直ぐに辿り着けるだろう。

「なあ儀國！コレ、あたしに乗らせてくれよーー！」

「ああ？ダメに決まってるだろ、これからソイツ使うんだよ」

「えつ？儀國さん、何処かに出掛けたんですか？」

「ああ、少しローマにでも行こうと思つてな。一度も行ったことないし…。

それになんか今日休日みたいだしな、俺

「じゃああたしも行くよー偶然、あたしも今日は非番なんだ」

シャーリーが同行すると言い出す。

それを聞いてルッキーも一緒に行きたいと言い出した。

「俺のバイクに乗りたいだけだろ？シャーリーは…。

ダメだ、今日は一人で過ごす予定なんだよ」

「え？いいだろ？だいたいお前、ローマ行くの初めてなんだろ？
だつたら道案内人とか」

「要らないな。見知らぬ土地を探索するのも一興、これがまた面白
いんだよ」

分からぬ場所を探索する、それは正に冒険。

今となつては見慣れた景色でも昔、幼かつた頃、そこは見知らぬ領域そのもの。

幼い子供が胸を躍らせ、冒険心に駆られその領域に足を踏み入れる。それは大人になつた今となつても変わらない。

「どうしてもダメか?」

「ムリダナ（・×・）」

「…儀國がいない間にバイクに絶対に乗るからな。後勝手に弄る」

「そんな事してみる。容赦なく」CODE:BLACK「終焉の蒼」で燃やし尽くしてやる、

跡形もなくなあ…」

無断で乗るなど言語道断。以前に、このバイクに誰も触らせた気は全くない。

万が一、壊されたりでもされたら…その時は間違いなく、俺は憤怒に身を任せ大暴れする。つーか絶対に大暴れする。

「まだ儀國は魔術使えない状態だろ?」

「まあな…」

左腕はほぼ治つた。しかし未だに魔力回路は治っていない、あれから一週間ぐらい経つが…未だに修復作業を続けている。

「兎に角、ダメなもんはダメだ。お前は大人しく基地で過ごつて…な、なんだよその目は…」

「…………」

「…………」

シャーリーと睨み合ひ。

他のメンバーは溜息、バルクホルンはいい加減にしおとシャーリーを咎める。

だが、シャーリーは退かない。ジッと眼を見据えてくる。

「…………ハア、わーったよ。分かりましたよー連れて行きやいいんだろ連れていきやよー」

折れた、結局俺が折れました。

こりや連れて行かないと引きそつにない。そろぐらい、シャーリー

は真剣だつた。

それに連れて行かないと本氣で俺が居ない間に弄られたりされてそうだ。

流石にそれだけはやめてもらいたい。

とりあえず今日だけ、今日だけは仕方なく連れて行つてやる……。

「本当か！？」

「40秒で支度しな！グズは嫌いだよー！」

「いや、無理だろそれ！」

シャーリー side

今日の朝、いつもの様にエンジンテストをしようとハンガーへと向つた。

と、そこには大きな木箱が一つ。ポツンと置かれてあつた。

昨日まではなかつたのに…、そう思いながら木箱を見ると、儀國へと書かれていた。

どうやらコレは儀國宛の物らしい。いつたい何が入っているのか、誰が儀國に宛てて送つたのか…詳しい事は書いてなかつた。

中身を見たい衝動に駆られたけど…まず中佐に連絡することにした。

そして中佐達と、遅れてやつてきた儀國が来て、よつやく木箱の中身を見た。

そこに入つていたのは一台のバイク。思わずあたしはそのバイクに見惚れてしまった。

儀國の所有物だと言う銀色に煌くバイク、騎士が纏う甲冑を思わせるフォルムが特徴的なバイクだった。

ただ一言、カツコイイ…それだけが頭の中に浮んだ。

そしてあのバイク、儀國の言う2010年の技術が詰まつたバイク。きっとあたしが乗つっていたバイクよりも凄く速いスピードで走る筈。そういう衝動に駆られた。

そう考えた時、あたしは乗つてみたいという衝動と、解体してみた

儀國の世界の技術が詰まつたバイクを乗つてどれだけの速さが出るのか…この身で体感してみたい。
どれほどの技術力なのか、解体してこの眼で見てみたい。

あたしは早速儀國に頼んだ。が、今から使うからダメだと言われた。
どうやらローマに出掛けるらしい。なら、後ろでもいいから乗つてスピードを体感したい、そう思つてあたしもローマに行くといつ儀國に同行することを言つたけど…やっぱり断わられた。

それならば儀國が居ない時に無断で…と言つたら中佐に負けないぐらいいのブリックスマイルで脅された。
よつぽと大切なバイクらしい…。
今の儀國は魔術が使えないけど、治つた時に「終焉の蒼」であたしが燃やし尽くされる。

一瞬にして燃やし尽くす程の恐ろしいと言われている炎。中佐は蒼い悪魔の炎とまで呼んでいた、そんな炎…あたしだつて受けたくない。

でも、あたしは引き下がらない。あたしは…このバイクに乗つてみたい。
そんな思いを込めて儀國の眼を見つめた。

するがあたしの思いが通じたのか、あれだけ断わっていた儀國が折れて同行していいと、渋々答えた。

そして今、あたしは準備を整えて早く儀國の元へと向った。もう儀國は既に基地の外で待っている。

「よう儀國！待たせた……な

「来たか……案外早かつたな。マイヘルメット持参か……」

「あ、ああ……」

あたしは思わず、言葉を失してしまった。

初めて見た、儀國の私服姿。

紺色の長ズボンに、白いラインが十字架状に走った黒のアンダーシャツ、その上にはワイン色のレザージャケット。

なんて言つか……物凄く新鮮で、カッコイイと思った。

いつも黒の整備兵の服を纏っている姿しか見てないから尚更。

見送りに来たんだろう、他の皆も同じ。儀國の私服姿に見惚れてる
つて感じがしていた。

「どうした？ もう乗れ、行くぞ」

「あ、ああ…」

儀國に言われて、あたしは慌てて後ろに乗り移る。

「そんじゃ、しっかり掴まつてろよ？」

アクセルが回される。それに応えるかのようにエンジンが唸りを上げる。

そして儀國とあたしを乗せたバイクはローマに向って走り出した。

Act15・新たなる戦いの前奏曲「壱」（後書き）

Act15「壱」でした。

さて、次話では遂に第一のオリキャラが登場します。
あ、男ですかね？オリキャラ。

女性のオリキャラはまだ出さないつもりでいますが、あしからず。
すわっ！

Act 15・新たな戦ごの福音曲「糸」（福音セ

Act 15 「糸」 です。

第一のオリキャラ、登場です。

Act15：新たなる戦いの前奏曲「弐」

ローマの街へと着く。

「着いたな」

初めて訪れた、ローマの街並み。
穏やかな時間が流れている、本当に今戦争中なのかと疑いたくなる
よつな感覚さえ覚える。

平和なのはいいことではある。そして…通行人たちの視線が皆此方
を向いていた。

正確には乗っているバイクに、だ。

この時代にはない型のバイク、デザインだってそうだ。
だから珍しいのだろう。

「なかなか速かつたけど、もう少し速度出せなかつたのか?」

後ろではシャーリーが文句を零す。

「何事も安全運転だ、事故したらどうする気だ?」

記憶が正しければ、シャーリーの乗っていたバイク…レッズマン・スカウトで280km以上だった筈…。ここまで来るのに掛けていた速度は最高でも100km。

流石に真っ直ぐ道ばかりじゃないしバカみたいに速度を出せない。それにこれは普段家庭用（？）として使うバイクだ。決して競技用に改造されているわけじゃない。

従つて、どんなに頑張つても250km/hぐらいしか出せない。

もう一台の方はこのバイクよりも本格的に魔改造がガッツリ施されたバイクだ。

それこそ最高速度は400km/hを軽く超える。それなりシャーリーは喜びそうだが…。

その存在については、ロイシコは黙つてしまつ。

「まあいいや。なあ儀國！そのバイク、今度私の乗らせてくれよ！」

「え…お前が乗るとなんか普通にぶつ壊しそうだしな…」

「何言つてんだよ儀國！私が事故する訳ないだろ？」

自信有り氣に言つシャーリー。

チタン合金よりも遙かに硬度を持つオリハルコンで出来ている」のバイク。

そんな簡単に壊れはしないことはしないが…シャーリーに渡すと呆気なく壊されそうな気がしてならない。

確かに、シャーリーならば運転技術もあるから問題はないとは思つが…。

やはり、不安で仕方ない…。

「頼む！な？儀國～」

「…ハア、分かった分かった。今度な」

「本当か！？やつた～！絶対だからなー！？」

バイクに乗る許可を出すと、シャーリーは子供の様に喜ぶ。

「但し…もし壊してみる、そん時は一生を賭けさせてでも弁償してもらつからな。

脅しじやないからな！？後解体禁止、これが条件だ」

「イツの制作費はハツキリ言つて馬鹿にならない。
金額的に言えばマジでキガイ価格なのだ。それぐらっこのバイク
には大金を掛けている。

「ちえー、仕方ないな…」

「それが嫌なら乗るんじやない。ホレ行くぞ」

「はいはい」

それから、シャーリーと色々な場所にいった。
まずローマと言えば真実の口。そこでルツキーもやつた、ローマ
の休日で有名なあのシーンを実際にやつてみた。

真実の口の中に手を突っ込んで、そして手が抜けないフリ。
頑張つて必死の演技をする。シャーリー冷ややかな眼、くだらんこ
とするなと呆れられる。

ノッてくれなかつたのが残念だつた…。

「ノリ悪いぞ、シャーリー」

「いや、お前演技下手くそ過ぎるだもん」

続いてコロッセオ。不意に、某奇妙な冒険シリーズで一重人格者のバスと車椅子の騎士が闘つたあのシーンを思い出した。

ゲームでのシーンが再現されて、そして神曲にアレンジされたPさん（仮名）のテーマ曲が流れた時は…マジでテンションが上がった。今でもあの時の興奮は忘れられない。

今も脳内でのあの神曲が流れ、そしてあのシーンが再生されている。そしてついつい…シルバー・リオツツ…と、叫んでしまった。

いきなりどうしたとシャーリーに心配された…。

もしシャーリーもあの漫画を読んで、あの神曲を聴いていたら…絶対にテンションが上がっていると思つ。

「未来で逢あう、イタリアで…」

「何言つてるんだ？」

その後はブティックや雑貨屋、アクセサリー店などを見て周る。途中、シャーリーに似合いそうなブローチを見つけた。

シャーリーも、そのブローチを一瞬だけ物欲しげに見ていた。折角だからそのブローチを購入することに。今まで貰い使い道がなく貯めてきた給料内…では少しキツかった。

そこでお師匠様直伝の値切り交渉術で、半額の値段まで下げさせてやつた。

店主涙目、シャーリー啞然。世の中値切り、どんな物でも安く買えたら最高だ。

いつの時代だつて変わりない、値切り万々歳である。次は何を値切らうか…。

「お、お前結構凄いな…。普通あんな事言えないぞ?」

昼頃、適当な店に入り昼食を取る。

今日の昼食はピザ、ピザなんて冷凍でしか食つたことがない。店で食べるピザと言つのはそれは最高に美味しいものだった。

「少しでも安く買った方がいいだろ？世の中そんなモン、節約術と値切り交渉術さえあればなんとかどんな貧乏人でも生きていけるんだよ」

因みに、店主には“この店にあるアクセサリーをウイッヂ達が着けることで宣伝効果になる、きっと同年代の女子は買いに来るだろ”等などと、適当に理由付けて強引に話を付けた。

相手に話す反撃の隙を与えない、そして半分睨みを利かせて脅すようになに言つ…それが我等お師匠様の教え。
なんつー値切り交渉術だと思う人もいるだろ？が、こんな方法で成功するから不思議だ。

「けど意外だな…シャーリーってなんかこうこうの、興味全くありませんって感じしてなんだけど」

機会弄りが大好きなシャーリーにとつて、こう言つたアクセサリーの類には興味ないと思つていた。
が、たまたま寄つた店で見たシャーリーの表情。一瞬、本の一瞬だけ見せた物欲しそうな顔。

シャーリーにも、そつとった女性の所もあるよ!だ。
これは新たな発見である。

「ん~、まあそつだなあ。わっかのな何となくいいなあつて、そつ
思つただけだよ」

「ふ~ん、まあいいや。つてことで、せうよ」

シャーリーに買つたブローチを渡す。
俺が持つていても仕方が無いし、元より「こなせシャーリーにやるつ
もりだつた。

あんな表情をしたのに素通りしてこくのは…流石に、元かな。

「い、いいのか?」

「ああ、俺からのがレゼントだ。海より広く、空より澄んでいる心
を持つ俺の優しさに、感謝しきよなあ?」

「それエイラの真似だろ?つーか自分で言つなよ」

「ムリダナ（・×・）」

シャーリーと笑い合ひ。

今日は仕方なくだが、いつやって誰かと一緒に街を回るのも……まあ悪くは無い。

美味なピザも食べ終え、胃も満たされた。

次は何処に行こうか…。

「さてと、なあシャーリー。なんかいい場所的な

」

刹那、遠くから爆発音が聞こえた。

見ると一台にトラックが轟々と音を立てる炎に包まれて燃え上がっている。

なんだなんだと、野次馬がトラックの前に集まる。

トラックの持ち主らしき男が燃え盛る炎に包まれたトラックを見て、嘆いていた。

「な、なんだ？事故か？」

シャーリーは少し驚いた様子で燃えるトランクを見ている。しかし、俺は全く気にならない。大体の理由が想像出来ているからだ。

「どうせアレだろ？煙草の消し忘れとかが原因で引火したんじゃ」

鼓動が跳ね上がる。

長年感じていなかつた、懐かしい気配。そして此方に向けて放たれている…冷や汗が流れ出る程の威圧感と殺氣、野次馬の中から感じる。

「お、おい儀國？お前どうしたんだ、顔色悪いぞ…？」

何故あの男がこの世界にいる？
そんな疑問を抱いたと同時に。

「やあやあ久し振り、元気そうだね儀國」

振り返る。野次馬の中に一人、男が此方を向いて立っていた。忘れもしないあの顔、そして甦つてくるアイツとの過去…そして、圧倒的な強さ。

「彩月、..。」

かつての“先輩”が、そこに立っていた。

Act15：新たなる戦いの前奏曲「弐」（後書き）

Act15「弐」でした。

さて、第一のオリキャラ…彩月の登場です。

初段階で考え候補として上がっていた主人公の苗字でもあります、
今回はその候補苗字を使いました。

さてさて、次話ですが…次は本編からちょっと離れて短編的な…ち
ょっとした小話的なものになります。

以上です。

すわつ！

Act EX・兄妹（前書き）

予告通り、EXです。

今回は作者の好きなネタをバンバン出しています。

「おっ、ピアノだ」

今日の午後、誰もいないミーティングルームへと避難する。理由は簡単、今坂本に追いかけられているから……。

前の一件、“俺の女になつたら技を教えてやるぞは実は嘘でした、許してね事件”的事を未だ根に持つており、その仕返しじゃかりに一日一回の試合という約束を破つてきた。

朝試合したのに午後も試合をしろと、断われば扶桑刀を抜いて問答無用で襲い掛かってくる。何度も追い払つたが、未だに止める気配を見せない。

どうやら坂本はかなり根に持つタイプのようである。

俺がちゃんと技を教えるか、坂本に斬られるかのどちらかをしなければ、この行為は終わらないだろう……。無論、どちらもお断りだ。

それからミーティングルームへと逃げ込み、何とかやり過ごした。今頃坂本は外を探しに出ているだろう。

そして現在、立派なピアノの前に立っている。
ここではたまにサーニャが演奏したりして、それをエイラが聴いて
いる。

エイラ曰く、癒される午後の一時だそうだ。
俺はまだ一度も聞いたことはないが…。

「…………」

なんとなく、鍵盤に触れる。ローン、と音を立てながら沈む白鍵。
…ピアノを触るのも、随分と久し振りな気がする。

ウチのお師匠様の意外な特技、それがピアノだった。
訓練以外で暇があればよくピアノを弾いていて、ついでだからと俺
も無理矢理習わされた。

師匠からの命令だとか何とか言られて…、今思えばどんな命令だと
ツツコミたい。小一時間程問い合わせたい。

それに訓練並みに…いや、それ以上に扱かれていた気がする。

その扱いのおかげで、今ではかなりの曲を弾けるようになった。
主にゲームのBGMばかりだが…。ショパンやベートーベンは一切
弾いたことがない。

お師匠様の趣味、ゲームのBGMオンラインでこの指に叩き込まれた。

因みに知人のB（仮名）曰く、ピアノが弾ける男はカッコイイとのこと。

よく分からぬが、女子と云うのはピアノが弾ける男子をカッコイイと思う傾向があるらしい。

そしてまた知人のC（仮名）曰く、男子は何故かピアノを見ると『猫踏んじやつた』を弾く、らしい。

C（仮名）が言っている事が本当なのか嘘なのか、それは未だに分かつてない。

俺は弾いてない、そもそも猫踏んじやつた自体習つて無いから弾けない。

「…久し振りに、なんか弾くか」

椅子に座り高さを調整。そして静かに鍵盤に触れた。

今日の午後、ミーティングルームに足を運ぶ。
久し振りにピアノを弾こうとした、エイラも一緒に来てくれた。

ミーティングルームの近くに来る、するとミーティングルームからピアノの弾く音が聞こえてきた。

「あれ？ 先客がいるみたいだな」

「… そうみたい」

ミーティングルームから聞こえてくる、綺麗なピアノの音色。
でも、いつたい誰が弾いてるんだろう…。

そっと、ミーティングルームを覗く。
そこにはお兄ちゃん… 儀國さんがあった。

「あれって、儀國じゅんか。 アイツもピアノ弾けたんだ…」

「…うん」

ピアノを弾くお兄ちゃん。 とても綺麗な音色が奏でられている。

とつでも上手だった。

初めて聴く曲。あの曲も…お兄ちゃんの世界にある曲なのかな。

でも、お兄ちゃんが弾くその音色は、とても悲しげだった。例えるのなら…まるで誰かへ送る鎮魂歌のよつな…。そしてピアノを弾いているお兄ちゃんの顔も、悲しそう…後悔しているような顔だった。

演奏が終わり、お兄ちゃんが一息吐く。と、私達に気付いて顔をこっちに向けた。

「なんだ、二人共いたのか」

悲しそうな顔から、いつもの顔へと戻る。

「気付かないぐらい集中してたのかよ…。でも意外だな、儀國もピアノ弾けたんだ」

「まあな。昔からウチのお師匠様に扱かれててな…そりゃもう鬼だつたよ、ホントに…」

「ねえ、今の曲は?」

私はお兄ちゃんに尋ねた。

悲しそうな音色で奏でられるあの曲について、お兄ちゃんが悲しみと後悔の表情を浮かべて弾くあの曲について…。

「あの曲は『失われた彩画』って曲、俺が好きな曲の一つでもあり、最初に習つた曲だ。

魔王ドラキュラとそれを退治する聖なる鞭を持った一族の戦いを舞台とした作品のな、それに使われてる曲だ」

「ま、また凄い作品だな…」

「失われた…彩画」

「他にもお勧めの曲あるぞ?俺的には…そうだな、Blood Tearsとかだな。どうだ?今なら特別。Blood Tearsを聞かないか?」

「血の涙かよ…嫌なタイトルだな。て言つか、変な喋り方すんな

エイラとお兄ちゃんが楽しそうに話しゃべっている。
そしてお兄ちゃんはピアノに向って鍵盤を弾いた。

やつべつとしたメロディから、徐々にテンポが早くなつて、激しい曲に変わつていぐ。

Blood tears 血の涙。

ドラキュラを退治する一族の物語。

聖なる鞭を持った一族が、ドラキュラを退治する為に長い旅に出る。
その中で恐ろしい魔物を避けながらも突き進む一族の勇敢さ……そんな印象を受ける曲だつた。

とても綺麗な曲だつた。エイラも私も、静かにお兄ちゃんのピアノを聴いていた。

Blood tearsを弾いているお兄ちゃんも、失われた彩画を弾いていた様に悲しい顔じやなくて……とても楽しそうな顔をしていた。

一度どんな物語か、読んでみたないな……。お兄ちゃんが語つかり、面白やつ……。

「…」

Hイラに言つたら、そんな物騒な物読むなって言われた…。

それから私は、お兄ちゃんに色々な曲を教えてもらつた。
私が聞いた事の無い曲ばかり、とても楽しい時間を過ごした。

けど、失われた彩画は弾きたくなかった。何でみんなに悲しそうな
顔をしたのか…私には分からぬ。

お兄ちゃんに聞いても、そんな顔をしてたか?って誤魔化される。

だけど、どんな理由があつても、お兄ちゃんが悲しい顔を浮かべる
曲は嫌…。

今度は私がお兄ちゃんの前でピアノを演奏した。
お兄ちゃんに演奏を聞いてもらつのは… 今日が初めて。

演奏を聴いてくれたお兄ちゃんは、俺よりも上手だつて頭を撫でて
褒めてくれた。

やっぱり、お兄ちゃんは笑つていてる方がいい。そのお兄ちゃんの方
が、私も好きだから。

「見つけたぞ儀國！」

いきなり坂本少佐がミーティングルームに駆け込んできた。

手には扶桑刀、息を切らして…鬼の様な形相でお兄ちゃんを睨んでいる。

「おい、今折角サー二ヤがピアノ弾いてんだよ…静かにじりよな」

「そりだそりだ、私の午後の一時を邪魔しないでくれよなー」

「つたく…」れだから空氣読めなこもつむんは…」

お兄ちゃんとエイラが反発。すると坂本少佐は咳払いして、納得の行かない顔をした後扶桑刀を鞘に収めた。

「サー二ヤ、続けてくれ」

「う、うん…」

坂本少佐がお兄ちゃんの事をジッと睨んでいるけど、私はピアノを続けて弾いた。

「お、今日は何だか賑やかだな」

「あー、皆サーーヤさんのピアノを聞いていたのね

それから次々と皆が集ってきた。
ミーナ中佐や、バルクホルンさん。ペリー・スセモ…
グルームに集つた。

エイラがお兄ちゃんも実はピアノが弾けるつゝ言つと、皆弾いてみ
てくれつてお兄ちゃんに希望した。興味があるみたいだつた。

儀國さんは最初は渋つてたけど、私がお願いするとピアノを弾いて
くれた。

もつとも兄ちゃんの曲を聴きたいつて…、お兄ちゃんは快く聞いて
くれた。

だけどミーナ中佐やエイラが、どうして私達の時だけ…つて、ちょ
つと不機嫌そうだった。

それからまた、お兄ちゃんの演奏が始まると。

私に聞かせてくれたBlood Tearsから始まって、その他
にも沢山の綺麗な曲を弾いてくれた。

皆意外そつな、驚いた顔を浮かべていた。

「せじと、やるやうの最後とするか。最後のシメはサー、ニヤ、頼むわ

「うん」

一時間程して演奏が終わった後、お兄ちゃんはまた聴かせてくれよつて言つて、ミーティングルームから逃げ出すように走り去つていった。

坂本少佐も、また演奏を聴かせてくれつて言つた後、鞘に収めた扶桑刀を抜いてミーティングルームから飛び出していった。多分…ううん、きっとお兄ちゃんを追い掛ける為。

「…お兄ちゃん、大丈夫かな…」

「大丈夫だろ、だつて儀國だし」

エイラのその言葉に、皆頷いていた。

他の皆は逃げたお兄ちゃんとそれを追いかけた坂本少佐が出て行つた出入り口を見て、やれやれつて感じで苦笑いを浮かべていた。

でも、皆楽しそうに笑っていた。

「……クス」

「ん？ どうしたんだ？ カーー！ ヤ」

「ううん、 何でもない」

……眞がいて、お兄ちゃんがいて、眞笑い合っている。
そんな毎日がこれからも、ずっと……続きますよつこ。

Act EX・兄妹（後書き）

Act EXでした。

今回はサーニャとの絡みをメインとした短編…ちよつとした日常（？）を書いてみました。

ネタについては…反省しません。

だって好きですからコナミー・悪魔城シリーズ好きですから！

Blood Tearsはマジで神曲、そう思つのは私だけじゃない…譜！

すわつ！

Act16・かつての先輩「壱」（前編）

Act16「壱」です。

今回は微妙に戦闘描写、入っています。

Act 16・かつての先輩【恋】

シャーリー side

その男は、いきなり私達の前に現れた。いきなり爆発したトラック。燃え上がる炎に包まれ、なんだなんだと野次馬達が視線を向けている。

そんな中、一人の男がこっちを…儀國を見ていた。

翡翠色の瞳、綺麗な黒髪を後ろに束ねた髪型、左首筋には水冠を思ウオータークラウンわせるデザインの刺青。

「元を緩め笑みを浮かべている」の男を…儀國は彩月と呼んだ。

つまり、この二人は知り合い。この彩月つて男も、儀國と同じ世界の人間…。

「その様子だと、元氣そうにやっているみたいだねえ。何年ぶりかな？」
「…」

儀國が身構える。先程から儀國の表情は強張っているし、冷や汗も

未だに流れ続けている。

彩月と呼び、親しく話しかけてくる男を…儀國は睨み付けていた。

あんな表情を浮かべた儀國を見るのは、初めてな気がする…。
あの彩月つて奴に、儀國は焦っている…いや、恐れているって言つた方が正しい。

「ああ、えつと…君は確か、シャーロット・E・イエーガー大尉…
だつたかな？」

オレの後輩が世話になつてているようだね」

「あ、アンタは…？」

「ん？ああ、オレは彩月。儀國とは、まあちょっととした仕事上の…
先輩後輩の関係つてところかな」

「せ、先輩…？仕事上？」

「彩月。あのトラック…お前がやつたのか？」

不意に、儀國が尋ねた。

「ああ、さうだけど。あのトラックの運転手、子供にぶつかったのにも関わらず謝罪すらじょうとしなかったからね… そのお仕置きてことで。

それよりも儀國… オレはお前に用があつてきたんだよ

「… いきなり現れたと思つたら俺に用がある?
いつたい何の用があるつてい」

一瞬の出来事だった。

鈍く、重い、肉を弾く音が鳴つた時、儀國は座つている席から4m弱まで吹つ飛んでいた。

彩月が儀國を蹴り飛ばした。

炎に包まれたトラックを見ていた野次馬達は、今度は儀國の方へと視線を向ける。

「ぐ…… テメ」

口元から血を流しながら、儀國は体勢を立て直す。

しかし、体勢を立て直した時には既に… 彩月は儀國の前に立つていた。

「は、速い！」

「遅い、遅すぎるなあ…。平和ボケで鍛錬を怠っていたのか？」

そして更に儀國を殴り飛ばした。

肉を力強く弾く音が何度も鳴り響く。

あまりの速さにあたしは眼を疑つた。

信じられない、あの儀國が手も足も出さずにボコボコに…一方的にやらされている。

今の儀國は魔術が使えない。だけど、純粋な身体能力だけでも充分に凄い。

人間同士の喧嘩なら、間違いなく儀國が勝つ。

だけど、彩月はその儀國よりも上の身体能力を誇っていた。

居ないと思つたら既に彩月は儀國の前に立つて居る。あの彩月つて男のスピードはそれを上回つている。

「あいつも魔術師なのか！？」

「ぐ……」

「お前、止め

「ツー？」

止めに入ろうとした時、違和感があたしを襲った。

寒い……それが違和感の正体だった。

真冬の様な寒さ。空は快晴…暑いぐらいの日差しが照りつけると言
うのに吐息は白く、肌寒く感じる。

野次馬達もこの違和感に気付いていて、寒さに身震いしている。

ふと、彩月の地面を見る。

彩月の足元の地面が氷に覆われている…凍結していた。

…やっぱり、あの彩月ってヤツは儀國と同じ、魔術師だ。
アイツが使う魔術は、多分氷。儀國の炎とは対照的に、あの彩月は
氷の魔術を得意としている。

「ツー？ 彩月、お前にこの“アレ”を使うつもりじゃ

」

「使うつもりだよ

彩月の周囲の空間から氷が発生する。一つや二つじゃない、沢山だ。
それに発生した氷はどれも大きく、更に刃の様に鋭く尖っていた。

その氷が儀國に向けて一斉に放たれる。

一直線に突き進む氷刃、儀國は両腕を交差し頭部や急所を護る。

魔術が使える儀國なり、「煉獄の赤」や蒼い炎、「終焉の蒼」なり
使つて防ぐだろう。

けれど、今の儀國にはそれが出来ない。そんな儀國に彩月が放つた
氷刃は容赦なく襲い掛かる。

切り裂かれる衣服、身体。至る所から血を流し、衣服は赤く染まる。

「テメ！」……彩月イツ！――

「吼えるだけじゃ何も出来ない。それは一番、お前が理解している
ことじゃないのかな？」

第二陣の氷刃が彩月の周囲の中空に生成される。
そして再び放たれ

「や、やめろよー。」

る前に、あたしは儀國と彩月との間に割つて入った。

CODE: SATAN

CODE: BLUE

「…邪魔しないでもらいたいなあ、イエーガー大尉？」

「お前、儀國の…先輩なんだろー？ だつたら何で後輩に、儀國にこんな事を」

「仕方ないよ、だつてそういうふうにしたのは全部儀國が原因だからね。

そうだら… 儀國」

「え？」

「…………」

「…さてさて、イエーガー大尉はそろそろそこを退いてもらえないかな？」

「…じゃないと君まで儀國と一緒に殺しちゃうことになるけど…。」

「君だつてまだ死にたくないでしょ？ だから早急に退いた方が賢い選択だ」

ゆっくうと、彩月の右手が纏われる。私のシールドで彩月の氷刃から儀國を護れるかどうか…それは分からない。いや、高確率で防ぐことは無理だ。

儀國が焦る程だ、彩月は…儀國よりもきっと強い。

そんな相手の攻撃を、私のシールドで防げるかと聞かれたら…無理だつて私は即座に答える。

けど
、

「…お断りだね。アンタの言つ事は、絶対に聞かない

私は彩月のその要求を絶対に呑まない。
儀國を…殺させたりなんかさせない！

「ば、バカ！ テメエが敵う相手じゃない、さつさと逃げろー。」

「だからって、見過しせるわけないだろ！
それにお前、まだ魔術使えないんだろ！？」

「あ～やつ言えば、確かあの日を境に世界魔術協会に行つたんだつけ？」

でも魔術使えないんじゃ 意味なしだね。

まあ仮に使えたとしても…オレの「EMPEROR絶対皇権の証」の力には敵わないと思つけど」

「え、エンペラーの力？」

「ん~…これで仕舞い…と言いたいところだけど、今日は止めておくとしよう。
気が変わった。イエーガー大尉もいるし、それに…ここには大勢の人がいるしね…」

中空で展開されていた氷刃が消え、彩月は踵を返した。

「待て……ぐ」

崩れ落ちるように、儀國は片膝を地面に着く。

「止めといた方がいい、今日は見逃してあげるんだ…人の好意は素直に受け取るものだ。」

それに、そんな状態で挑んだところで…オレに勝てるなどでも思つていいのか？」

「あ、彩月…テメエ…」

「今日は勘弁しておいてあげるよ、でも忘れないことだ…オレは必ずお前を殺す。」

それまでに魔術が使える状態になつておくよつにね。それと……情は一切捨てること。

躊躇いや甘さは死に繋がる、お前のお師匠様の教え……忘れた訳じゃないでしょ？」「

悪魔の様な笑みを浮かべる彩月。すると彩月の身体が氷の破片となつて消えていく。

「ま、待て彩

「バカ！ やめろ儀國！」

追いかけようとする儀國を、あたしは止めた。

アイツが言つよう、今の儀國じゃどう足搔いたって勝てない。

儀國と彩月、この二人にどんな過去があつたのか……それはあたしには分からぬ。

きっとあたしには理解出来ない、何か深い理由があるんだろう。

だけどあたしは止めた。今儀國が追いかけて、アイツに殺されるのなんて……あたしは見たくない。

儀國を止めて、気が付いた時には既に彩月の姿はなかつた。

辺りを見回すけど、彩月の姿は何処にもない。完全にこの場から姿を消していた。

「一先ず、儀國が殺されずに済んだ。その事にとりあえず、安堵の溜息を漏らす。

けど、問題が残っている…。

一部始終を見ていた野次馬達がヒソヒソと話し合っている。

今の男は何者か、さつきのは魔法か…等。

そしてその視線はこっちにも向けられている。

「マズイな…どうす

「…はい、今日の撮影はここまでです！

皆様、撮影のご協力有難う御座いました！」

いきなり良い笑顔を浮かべて、儀國は野次馬達に頭を下げる。

「さ、儀國？ お前いつたい何を

「イエー ガー 大尉も本日はお忙しい中映画の撮影にご協力して頂き、

有難う御座います。

皆様、今回は映画にリアルを…より現実感を出す為とは言え、何もお知らせせず撮影を行ったことを深くお詫びいたします。ですが、皆様のご協力もありいい映画が作れそうです。本当に有難う御座いました！」

儀國がそう言いつと、皆は映画の撮影かと納得し始める。

「おーい、撤収撤収！」

儀國が建物に向かって叫ぶ。

そこに視線を向けるけど誰も居ない。けど儀國はまるで誰かに話しがけているように指示を出している。

「シャーリー…行くぞ」

「えつ？」

「皆様、今回の映画はあの「扶桑海の閃光」をも超える超大作となる予定ですので、完成した日には是非ご鑑賞下さい。ではっ！」

儀國に手を引かれるまま、私は走った。

人気のない場所まで走る。
儀國は辺りに誰もいない事を確認して、そして崩れるようにその場に片膝を着いた。

「儀國！」

「上手くいくかどうか自信なかつたけど……なんとか上手く誤魔化せたな」

「ツ！ お前、まさか…」

「下手に言い訳とかするより、こう言った方が現実味があるだろ？
CGですか何だとか言つたら、大抵の漫画……娯楽本じやあ上手く誤魔化せてるんだよ。

…マジで成功するもんなんだな、コレ」

私は感心した。

あの状況の中での咄嗟の判断、現に一般人も皆納得している様子だった。

確かに、ああ言つた方が変に誤解を生まない。

それに儀國の演技力もある。眞実の口の時に見た演技力は酷かつたけど、あの時の儀國の演技力は正にプロ並。

彩月の氷刃を受けて身体は傷付いているというにも関わらず、あくまで演出上の物だと思わせる程の自然とした態度。その演技力も含わさつて、野次馬達は皆信じた。

やつぱり、儀國は凄い奴だ。改めてそう私は思った。

「か、考えたな… つてそれよりも大丈夫なのか！？」

「少し身体が痛いだけだ、後は問題はない。それよりも…シャーリー

ー

ポケットから何かを取り出し、それを私に手渡した。
それはあのバイクのキーだった。

「今の俺じゃ満足に運転出来そうにないから、お前に運転頼んでいいか？」

事故でもしてシャーリーに怪我させたら俺が隊長殿に怒鳴られるからな…」

「儀國…………」

「どうした？ もう乗るのが怖いか？」

「…………何言ってるんだ！ あたしに任せつけ！」

こんな形で念願の儀國のバイクに乗れるなんて思わなかつた。
儀國のバイクに乗れたのは嬉しい、けど……それよりも今は儀國の方
が心配だ。

口では大丈夫だって言つてるけど、あれだけ泣ついていたバイクの運
転を私に頼むくらい、今の儀國は傷付いている。
早く基地に帰つて宮藤に治療してもらわないと。

「ああ、それと……」

「…………」

「……やつは、悪い。引き止めてくれてな……」

「…い、いって別に。とにかくでさ、バイク……何処だっけ？」

「…あ、さつきの場所だ」

Act 16・かつての先輩「壱」（後輩）

Act 16「壱」でした。

あ…近日、重大じゃないけど軽少とも言い難いような…微妙なお知らせがあります。

まあまたお知らせするシス。

すわつ！

Act 16・かつての状態[終] (極端)

Act 16 [終] です。

たった今戻りました！

Act16・かつての先輩【弐】

シャーリー side

基地に急いで帰還する。

後に傷付いた儀國を乗せて基地まで走る。

儀國のバイクの操作性と速度はかなりのものだった。

もつと速度を出したって欲も出てきた。

けど、あたしの後ろには彩月の攻撃を受けて傷付いた儀國が乗つて
いる。

大丈夫だと本人は口にしているものの、その表情からは明らかに大
丈夫でないことがハッキリと分かる。

今でも苦しそうに表情を歪め、呼吸は乱れていた。

だから儀國に負担にならない様に、かつ急いで基地へと戻った。

そして今は、医務室で富藤の治療を受けている。
エイラとサー・ニヤ、リーネとペリー・ヌは心配だからと付き添つて医
務室にいる。

…基地へ帰つて来た時、傷付いた儀國を見て皆驚いてた。特に中佐とエイラが酷く動搖していたと思つ。

宮藤の治療が終わるまでのその間、あたしは街で起きた事を中佐達に話していた。

彩円と名乗つたあの男のこと、儀國とは何かの“仕事”の先輩であること、そして…儀國と同じ魔術師であり、氷操るところだ。

街で起きたこと全てを皆に話した。

「儀國の先輩に当る者が…儀國の命を狙つているだよ。」

少佐が眉を顰めて私が言つたことを聞き返してきた。
その聞き返しにあたしは頷いてから答える。

「ああ、その理由は儀國にあるらしいんだけど…詳しく述べ私も…」

「さうか、しかし…氷操る魔術師とは…。その男、強いのか？」

「強いも何も…幾ら魔術が使えない状態だからって、あの儀國が手も足も出ない程だつたんだ。メチャクチャ強いのは確かだよ」

そつと、少佐はそつと、と静かに答えた。

「……騎士型ネウロイに続き、儀國の先輩と言つて彩月と名乗る男……か。
次々と問題が増えてくるばかりだな……」

バルクホルンが静かに口を開いた。

アイツの言つ通り、あの騎士型ネウロイも彩月も儀國の命を狙つて

いる。

騎士型ネウロイですら手一杯の所に、今度は儀國の先輩まで出でてきた。

そして儀國が恐怖し、手も足も出ないぐらゐの実力者。下手をすれば騎士型ネウロイよりも遙かに強い。

このままじや儀國ははじめに殺されかねない。

それを防ぐにも、今のあたし達じやの二つの存在を斃すことはまず不可能。

儀國を護る」ことは勿論、援護することすら叶わない。かえつて儀國の足手纏いになるだけ。

と、同時にドアが開く。治療をしていた宮藤がそこに立っていた。

「儀國さんの治療終わりました」

「やうか、『苦勞』だつた富藤。

それでは行こう。彩月といつ者の方については、儀國の口から聞かねば分からんからな

皆頷いて儀國がいる医務室へと向かつ。

儀國は……大丈夫なのか……？

医務室へ向かつ。

一床のベッドの上、そこに儀國は座つていた。

彩月の雷撃を受けた傷は、富藤の治癒魔法によつて綺麗に治癒されていた。

顔色もいいし、呼吸も乱れていない。元気そつとしている。

「もつ大丈夫なのか？」

「ああ、富藤のおかげでな。シャーリー、運転悪かつたな」

「少しだまなうに儀國が言つてへる。

「さうか。まあ運転技術は問題なかつたし……乗るのは許可してやる……が！解体だけは絶対に許可しないからな？」

「分かつてゐるよ」

本当に大丈夫そうだ。とつあえず安心した。
けど、話はここからだ。

「儀國、シャーリーから色々と話は聞いてる。その彩用ところは、
は、いったい何者なのだ？」

少佐が儀國に尋ねる。儀國は面倒臭そうにベッドに横になり、そし
てゆっくりと口を開いた。

「昔の……ちょっとした先輩だ。初めて10歳の時に出逢つて、二ヶ月ほど指導を受けていた感じだ。

性格は結構いい加減。食うこと寝ることが大好きで、飯はバカみたいに食うわ寝る時は半日以上どんな手を焼くしても起きないわ……そんなヤツ」

話を聞いている限りでは、あの彩月つてヤツは結構グータラな人間らしい。

何處かハルトマンと似ている部分もある。

バルクホルンのヤツもあたしと同じ事を考えたのか……お前みたいだな、ってハルトマンに向かつて言っていた。
言われている本人は そうかなあ？、と相変わらず呑気な態度でいる。

「けど……」

そこで、儀國の眼が変わる。

「それでもアイツは誰よりも強かつた。それだけは間違いない

「そ、そんなに強いんですか……？」

「…ああ。魔術が使えるようになつたら少しは勝てる確率が上がるだろ？けど…それでも半々つてところだな」

その言葉を聞いて、質問した宮藤は啞然とした表情を浮かべていた。宮藤だけじゃない、この場にいる誰もが同じ様にしている。

「あたしは信じられなかつた。この基地の中で空を飛べないという事を抜けば最強の部類に入るあの儀國が、勝てるかどうか分からないと、やつ言つたからだ。」

「そんなに強いのかよ、あの彩用つてヤツ…。そこに氷の魔術も使う」

「あれは魔術じゃない」

あたしが言い切る前に、儀國が割つて入る。

「アーツの氷は魔術によるものじゃない。もつと別の力…言つなれば超常能力。
アーツは魔術師じゃないからな…」

「そ、そうなのか？」

「ああ。」絶対皇帝EMPERORの証の力つて言つ名前は初めて聞いたが…あれは魔術じやないのは確かだ…」

「…しかし、分からんな。何故かつての先輩が、お前を殺そうとしている?」

その事にはあたしも気になつていた。

彩月は殺される要因は全て儀國にある、そう言つていた。

：あたし達は儀國の過去をよく知らない。
いつたい儀國と彩月との間に、何があつたんだ?

儀國は少佐の問いに暫く考える様な仕草を見せた後、ゆっくりと口を開いた。

「……ああ。アイツ気紛れなどこりあつたし…それなんじやねえの?」

嘘だ…儀國は何が原因か分かっている。
何となくだけど、今の儀國の雰囲気から嘘を言つていいとしか思えない。

ただ、それをあたし達の前で言おうとしたしないだけ。

あたし達に知られたくないから…儀國は嘘を言っている。

「おい儀國！ 何で嘘吐くんだよ！？」

どうしてか分かってるなら、あたし達に言つても

「

「兎に角だ。何にせよ、降りかかる火の粉は徹底的に払わせてもらう。

相手がかつての先輩だろうと誰だろう…教え通り沈めてやる、それだけだ

儀國はあたしの問いに答えようとしなかった。

それを見ていた少佐は中佐と顔を見合させた後、ゆつくりと口を開いた。

「……今田はゆつくりと休め。いいな？」

「あいよ、サンキューな。ああそれと…何があつても彩月に手を出さない。

あいは…彩月は俺が相手をする。それだけは憶えておいてくれ

「 「 「 …… 「 「

納得の行かないまま、あたし達は医務室を後にした。

医務室を出た後、少佐が中佐に話しかける。

「…、匕つ櫻づ？」

「ええ、儀國さんは何か隠しているわね…」

「やはり少佐達も儀國の嘘には気が付いているみたいだ。」

「やはり、そう思つか…。しかし、本人が語りたくないんだ。」

儀國が話してくれるまで、無理に聞くのは止めておくとしよう…」

少佐の言う事も一理ある。

本人が言いたくないから嘘を言っているのに、無理矢理聞き出すのも気が引ける。

ここは、儀國があたし達に話してくれるまで…待つてよ。」

夜、あたしは部屋で機械弄りをしていた。

「…………」

壁の服掛けに掛けた服を見る。その胸元には今日儀國に買つてもらつたブローチが。

たまたま通つたアクセサリー店、そこであのブローチに目が留まつた。

なんとなく、いいなあ…って思った。けどあたしには似合わないし。そう思った直後、儀國が店の中に入り店主と何やら話し合つ。気になつて店の中に入ると、そこでは安くしようと店主と交渉していた。

五分ぐらいの交渉の結果、店主が負けて半額の値段まで下げるにになつた。

儀國は勝利の不敵な笑みを、店主は敗北に涙目を浮かべていた。新たに知つた儀國の一面、向こうの世界でも…こうして生きてきたんだなあと、ふと思つてしまつた。

それよりも何をここまでして安くしたのか…、すると儀國はあたしがいいなと思ったブローチを購入した。

そう、儀國はあたしがあのブローチに目が留まつたのをしつかりと見ていた。

あたしの為に…儀國が…。

機械弄りを止めて、ブローチを見つめる。

並行世界から来たつて言つ…魔術師の儀國。儀國は面白いヤツだ、少佐や中佐に対してもあの態度。

上官という立場なんか関係なく、呼び捨てなんかも当たり前。言つてしまえば友達感覚で呼び合つてゐる。

普通なら考えられない行動を、儀國といつ男は平氣でする。

そんな儀國だけど、一度も誰からも咎められたことはない。あの力ールスラントの堅物軍人であるバルクホルンですらも、儀國に対し何も言つていない。

だから私も気にしないで、普通に喋つていい。

儀國とは…そう、友達みたいなものだ。何となく氣は合つて、今日

だつて結構楽しかった。

ただ、あの彩月って奴が来なかつたら… よかつたんだけど。

「…まつたく、全然集中出来ないなコリヤ」

機械弄りを止めて、そのままベッドに寝転がる。
見慣れた天井を見つめ、私は儀國のことを考える。

彩月は儀國を殺そうとしている。けど、今の儀國は魔術が使えない状態。

今日は見逃してもらえた。けど、次に会う時までに儀國が魔術を使えないと… 彩月に殺されてしまつ。

もしそうなつた時、あたし達が儀國を護らないといけない。

弱いのは承知の上、だけど儀國はこの隊の一員、あたし達の大切な仲間だ。

なら、仲間を護るのは当然のこと。

儀國からは手を出すなつて言われたけど、その約束は護れそうにない。

「あたし達は仲間… だろ? 儀國…」

天井を見つめながら、ポツリと呟いた。

「…………」

レザージャケットをクローゼットの中へと片付ける前、ポケットから一通の封筒を取り出す。

その後、ハンガーに赴いた。ミーナの許可を得てハンガーにバイクを停めることになり、そして念の為にバイクの様子を見に行つた。

特に変わったところなし、傷一つ付いていない。ホッと一安心し帰ろうとした際、バイクのパーツの隙間に一通の封筒が入っていることに気付いた。

バイクを停めている時に誰かが入れたのか…。
それとも彩月か…。

そして今、封筒の中身を早速開けて中を確認する。

封筒の中身は綺麗に折り畳まれた紙、それを取り出し中を開く。

「……………」

Act 16・かつての先輩「武」（後輩）

Act 16「武」でした。

さて、ここから如何に第一キャラクターである彩乃を絡ませるか…。

色々と妄想が浮んできてる…、困ります（笑）。

ふ、ふふ、ふふふふふ…。

そんなこんなで、失礼します。

すわっ…！

Act17・迷走「壱」（前書き）

Act17「壱」です！

な、何とか間に合いました…！！
出来立てホヤホヤですよ、ええ！

Act17・迷走【春】

？？？ Side

真つ赤な炎が燃え上がっていた。
何処か見知らぬ森、空は曇りで雨が降っている。

「こゝは…何処なのだらう？？」

そつと自問したと同時に、視界に映し出されている景色が変わっていく。
まるで誰かの眼を通してその光景を見ている…そんな気分だった。

そして燃え盛る森の中を突き進んでいくと、そこには地獄絵図が広
がっていた。
全焼し見る影もなくなつた建物、今も尚炎が燃え上がっている家も
ある。

「何処かの村…」のようだつた。

そして、辺りには無数の死骸が無造作に転がっていた。
胴体が切り離され内蔵を露出させている者、全身に扶桑刀が突き刺
さつておりハリネズミのようになつてゐる者も…。

そして老若男女、年齢層問わず。中には本当に小さな子供の姿まであつた。

更に奥からは断末魔のよつた叫び声が聞こえてくる。

助けて、痛い、死にたくない……そんな声が私の耳に響いてくる。

この地獄絵図の様な光景から眼を背けようにも、未だに聞こえてくる悲痛な叫び声を聞きたくないから耳を塞ごうとも……私の身体はまつたく言つ事を聞かなかつた。

何故、私はこんな夢を見ているのか……。

今私が目にしている地獄絵図……森も村も、この酷い出来事も私は知らない。

と、またも景色が変わる。叫び声が聞こえてくる奥の方へと進んでいく。

嫌、行きたくない　　！

そう強く願つても、私のその願いは届かず。
強制的に身体が奥の方へと進んでいく……。

奥へと進む、そこには一人の少年がいた。

齢5歳程度の、本当に小さな男の子だ。その男の子の手には、その小柄な体格には似付かない一本の扶桑刀が握り締められている。

その刀身は赤く染まっていた。よく見ると、少年の身体も赤く染まっている。

その赤い液体が何を意味しているのか、即座に理解できた。

けど、とても五歳の子供がするような眼でではなかつた。
冷たく激しい、慈悲すらも感じさせない冷酷な死神の眼… そんな眼をしている。

そしてその少年の周りには数多の死体が転がっている。

死体は皆銃を手にし、死んでいる。誰がやつたのか、どうやって殺されたのかは… 一見にて理解させられる。

この少年は何者なのか… 五歳程度の幼いこの男の子が、視界一杯に広がる地獄絵図のような光景を、本当に生み出したのか…。

そう思つたと同時、私の意識は急速に薄れていった。

「……ハツー！」

ふと眼を覚まし、掛けていた布団を勢いよく捲りながら上半身を起こす。

「……夢？」

視界に入った景色は炎が燃え盛る森でも村でもない、いつもの見慣れた部屋。

少しして、自分の部屋なのだと理解する。

今夢はいつたい何だったのか、どうしてあんな残酷な夢を見てしまったのか…。

ここ最近立て続けに色々なことが起り過ぎた、それらに対するストレスが原因なのかもしれない…。

私は小さく息を吐いて、もう一度身体を横たわらせる。

朝まだ時間はある、それまでにしっかりと睡眠を取つておこう。

田の前では、激戦が繰り広げられている。

「へっ……！」

「……ツー！」

いつもの様に坂本さんと儀國さんが試合をする。

儀國さんの魔力回路はまだ治っていない。ある程度は治つて、後ちよつとで完全に修復されるって、儀國さんは言つてた。

だから今日も魔力回路が修復されるまで、儀國さんは扶桑刀を手に

坂本さんと試合をしている。

けど、今日はいつもの試合風景と違つていた。

「ツー！」

坂本さんが大きく飛び退く。そして上空、ストライカーコニットを装着し、訓練用の機銃を手にしたシャーリーさんとルッキーちゃんが儀國さんに向けてトリガーを引く。

「げつー・マジかよー？」

「雅史すひーじーいー！」

シャーリーさんとルッキーちゃんの機銃から放たれたペイント弾を、儀國さんは信じられないスピードでみんな正確に斬った。

銃弾を見切ることは……私も出来る。

ネウロイのゲーム攻撃だつてちゃんと避けられるし、銃弾も同じ様に避けられる……筈。

だけど儀國さんは避けずに、全部斬っていた。扶桑刀を振るそのスピードは、正に高速……或いはそれ以上。兎に角、物凄く速い。

「ぐつー生意気なーー！」

儀國さんの後方からペリーヌさんがペイント弾を撃つ。だけど儀國さんはまるで分かつっていたかのように振り向きながら扶桑刀を払つて、ペイント弾を全て斬つて落とした。

今日の試合は一対四形式、儀國さんが坂本さん、ペリーヌさん、シヤーリーさん、ルッキーちゃん一度に相手にしている。

坂本さんは扶桑刀、後の三人はストライカーユニットと訓練用の銃

を装備している。

勝敗条件は坂本さんの扶桑刀が離れること、儀國さんはペイント弾が一発でも当たるか逆に扶桑刀が手から離れるか。

三人は坂本さんの援護射撃を行つ、という内容だった。

今日は一対四で試合をしようといきなり儀國さんが言い出した。

坂本さんだけじゃつまらなくなってきた、俺に勝てばその場で絶対に知りたいことを教える。そう儀國さんが言つて、ペリーヌさん達が参加して、今に至る。

そして儀國さんはあの凄い居合には使わないで、完全に鞘から扶桑刀を出した状態で模擬戦を行つている。

「儀國のヤツ、今日はあんまり攻めないな

エイラさんがポツリと言つた。

言われてみればそうだ、さつきから儀國さんは殆ど攻撃していない。主に防戦態勢で闘つている。

たまに攻撃態勢に移つてゐるけど、殆どが防御行動。坂本さんの扶桑刀を受け流したり、シャーリーさん達が放つたペイント弾を斬つて落としている。

「凄い……まるでエイラさんの固有魔法を使つてゐみたい」

「あれも魔術の類か？いやしかし、儀國はまだ魔術使えなかつた筈……」

リーネちゃんの言葉に、バルクホルンさんが言葉を繋げる。

今、儀國さんは田隠しをした状態で試合をしている。

流石に皆無茶だと、ペリーヌさんは遊びじゃないつて怒つてた。

けど、儀國さんは何も見えない状態なのにヒラリ、ヒラリと全て避けている。

後ろを捉えられらて射撃されたのにも関わらず、まるで予めそう来ることが分かつてゐるかの様に…振り向かなくとも完璧にペイント弾に斬つていた。

それは正にリーネちゃんが言つ通り、エイラさんの固有魔法…未来予知を使つてゐるみたい。

「へへ…」

「どうした？もう終わりか？まだ俺は一発も当たってないぞ？」

坂本さん達は全く儀國さんに歯が立たない状態だった。
一度も儀國さんに当たられないまま、時間がだけがただ過ぎ去っていく。

「ふわあ…凄い」

私は思わず呟いていた。

儀國さんはとても強い、それはこの基地にいる皆知っている。
そして剣術の腕前も。坂本さんが今まで試合を挑んでも一度も勝てなかつたことも、皆分かっている。

だけど、扶桑刀を手にした儀國さんは何処か違っていた。

「剣極の調ソードサマナー」で作った剣を振るつている儀國さんと、扶桑刀を振るつている儀國さんの動きが全く違つた。

扶桑刀を振るつている方がスピードも速いし、パワーもある。

それに……

「……なんだか、お兄ちやん怖い……」

横で見ていたサーニャちゃんが不安そうに呟ついた。

そう、儀國さんがとても怖いって感じる。まるでネウロイと闘つている様な感覚……今の儀國さんを見ていると、そんな風に感じてしまう。

田隠しをして、扶桑刀を構えた瞬間から……儀國さんの雰囲気ががらりと変わった。

今の儀國さんからは、あの優しい雰囲気は放たれていない。恐怖……その雰囲気だけがただ放たれていた。

「…………」

ミーナ中佐は、ただジッと試合を見ていた。でもよく見ると、試合を見ていると言つぱりは儀國さんを見ていた気がする。

真剣な表情で、一言も喋らはずこ……ただジッと扶桑刀を振るつて闘つた儀國さんを見ていた。

「ふつーー。」

儀國さんが扶桑刀を振るう。大きな金属音が響き渡つたと同時に、坂本さん扶桑刀が手から大きく弾かれた。

「はい終了つと。なかなか楽しめたぞ」

不適な笑みを浮かべて、儀國さんは扶桑刀を腰の鞘に収める。僅かに遅れて、坂本さんの扶桑刀が砂浜に突き刺さった。

そして恐怖一色だった雰囲気が、いつもの優しい雰囲気に戻つた。目隠しの布を取つて、あの優しい眼が私達の前に曝け出される。

それを見ていたサーーニャちゃんも安心して、嬉しそうに笑みを浮かべていた。

「ぐつ……四人掛かりでも勝てないとは……」

「魔術を一切使つていないので……なんでそんなに速く動けるんだ?」

「基本鍛え方が違つからな……まあ仕方ないって。」

修行の賜物つてやつ、そりやもつ…「スクイーン島ばりにヤバイ修行をしてたからな…。

何かもう…「わっ、うわああああ…」…って感じだな

落ち込む坂本さんを儀國さんは慰めて、シャーリーさんは質問に答える。

「スクイーン島つて…聞いたことのない島の名前。でも以前からして、とても怖そつな所だつて想像出来た。」

「ねえねえー田嶋しててのこ何で見えるのー?」

「見えるんじゃなくて、感じるんだよ。相手の殺氣や敵意、空氣の流れから色々と。」

兎に角これも、修行の賜物だな

儀國さんの答えに、ルッキーちゃんは凄いとはしゃいでいる。修行するだけで、そんな事も出来るんだ…私も頑張れば出来るかな…?

「申し訳ありません坂本少佐！ 私が不甲斐ないばかりに…」

「ああ、本当にやうだなシンシン眼鏡」

「キイイイイイイイイツ！－！－！」

ペリー・ヌさんを挑発して楽しんでいる儀國さん、挑発されたペリー・ヌさんはいつもの様に怒っている。それを見て更に楽しんでいるみたいだった。

そんな様子に私達も笑う。

やつぱり、私は優しい雰囲気を放つていてる儀國さんが大好き。

何で扶桑刀を持つている時、あんなに怖く感じたのか…分からぬ
けど。

111

そしてミーナ中佐は、何か言いたそうな顔で儀國さんをジッと見つめていた。

Act17・迷走「壱」（後書き）

Act17「壱」でした。

いやいや、何とか今日中に投稿することができてよかったです‥。

実は…仕事関係で少し東京の方へ行くことになりました。

従つて、次回の更新は再来週…2月 2~3日ぐらいになると想います。

楽しみにして下さっている…かどうかは、云々は置いておいて読者の皆様には本当に申し訳ありませんが、『』了承下さい。

すわっ…!

Act17・迷走「弐」（前書き）

Act17「弐」です！

急いで仕上げて投稿しました！

Act17・迷走【弐】

その日の夜、九時過ぎ

皆眠っている、静寂が支配する夜。

今日はサーニャは夜間哨戒が無い日だ。だから今頃は自室……或いはエイラのベッドでグッスリと眠っている頃だろ？。

「 そろそろ行くか…」

私服に着替えて、扶桑刀を手に部屋を出る。

今日はお気に入りの白いレザージャケットを羽織つて、だ。

…確かめなければならないことがある。

真実か偽りか…、この田で確かめなければならない。

向つ先はハンガー。そこに置いてある俺のバイクに用がある。

静かに、そつと部屋を出てハンガーへと足を運んだ。

昼間は多くの整備兵で賑わう声が溢れているこのハンガーも、夜になればガランとし物寂しいハンガーへと姿を変える。

今日の夜勤者は……いない。
よく見ると一人は完全に熟睡していた。もう一人は……恐らくトイレか何かだろう。

その方が好都合だ。ハンガーから愛車のバイクを外へと運び、ローマへと続く出入り口まで押していく。

皆とうに眠っているし、何よりコイツのエンジン音は結構煩い。
流石にここでは皆の安眠妨害になる。
だから音が響かない所まで押していく必要があった。

「さてと……もういいかな?」

基地裏側通路、そこでキーを廻しエンジンを掛ける。
流石にここならば安眠妨害にはならないだろう。

アクセルに手を掛け、そして回そうと

、

「こんな時間に、何処に行くのかしら？儀國さん」

「おおおつー~!!、ミーナ……？」

後ろを振り向く。そこにはミーナが立っていた。
ブラックスマイルを浮かべている、お怒りモードのようだ。

「わ……悪い、安眠妨害でもしたか？」

「いいえ、偶然貴方がハンガーから出て行くのを見たの。
それで、私服を着て何処に出掛けるつもり？」

「ちょっと街まで夜のドライブ、たまにはいいかなってな

「そう……」

ミーナは相変わらずブラックスマイルを浮かべたまま。
あの顔は……絶対に信用しない。嘘だつて確実にバレてるな……。

「それで、本当の目的は？」

「だ、だから夜のドライブって言ひてるだろ？」

「正直に言ひなさい？ 儀國 雅史さん？」

ヤバイ…ブラックスマイル通り越して、本氣の怒りモードに突入し掛かっている。

本氣で怒った時のミーナはマジで怖い。

「どうしそうか、正直に言ひた方が身の為か？」

そう考へていてる時だ、ミーナが何故かバイクの後ろに乗り始めた。

「ちよつ、おま…何勝手に乗つてんだ！ 降り

「

「私も一緒に行くわ」

「えつーー？」

「ドライブなんでしょう？ だったら私も一緒に同行させてもいいと思ったの。

今日もなかなか眠れないのよ

「や、そつ言つ時は豚か蛙を数えながら根性出して寝るんだよ。いいからさつさと寝て来い！ 明日に響くぞ。」

「……そこは普通羊じゃないのかしら？」

ミーナと一緒に連れて行くわけにはいかない。ここから先、危険が伴うのかもしない。そんな中を、ミーナと一緒に連れていけない。

自分ひとりならまだしも、ミーナも一緒になるとかなり辛い。今の俺は魔術が使えない、そんな中ミーナも一緒に連れている時に敵の襲撃にでもあつたら……。

何とかミーナをバイクから降ろさなければ……

「ちつちつと降りよう。」のババ

「

「ババ……何かしら？」

「……馬鹿野郎」

危なかつた…。

危つくババアと言ふことになってしまった。

巷では年増、ババア扱いされているミーナ。19歳なのにババア呼ばわり、だからそれに便乗しつゝ口走りそうになつた。

口走る前に留めたことに、思わず安堵の息が漏れる。

ミーナの背後、某マンガの様にゴーババ…、といつ効果音が何故か見える。

それぐらい、今のミーナは、ブリックスマイルを浮かべている。

もしもあそこで言い切ついたら…そつ考えると心底恐ろしい。

しかし、ミーナは一向に降りる様子を見せない。

もう一緒に行く気充分、降りて欲しければ正直に自白しようと眼が物語つてている。

どうしたものか…、そういうじててる内にポケットに入れていた封筒が地面に落ちた。

しかも最悪なこと、ミーナの田の前に落ちた。

「『』の封筒は？」

「あ、それは……。」

慌てて拾おうと手をよみがへ、ミーナが封筒を拾って中身を見始めた。プライバシーもくつたくれも無く、落とし主が田の前に立つて叫んでいた。許可で封筒の中を開けて、中身を取り出した。

「あ……」

「う……これ……」

ミーナが手紙を読んで、驚愕の表情を浮かべた。そして直ぐに手紙からじて顔を向ける。その顔はブリックスマイルではなく、完全に怒りモードだった。

「儀國さん……どうして」とかじりついた。

「…………」

「『』の手紙……いつ貰ったの？」

バレてしまつた以上、正直に話すしかない。

もうミーナは完全にお怒りモードだ、言い訳しても無意味に終わる。

「…前にシャーリーと出掛けた日だ。基地に帰つて、バイクに傷付いてないかハンガー見に行つた時に、なんかあつた…」

「どうして黙つていたの！？」

「……兎に角、これのことは黙つてくれ。他のヤツ等にもだ。それから、これは俺一人に行かせてほしい」

手紙の内容、それは“騎士型ネウロイについて教えよう、但し一人で来い”…と、その一文と口時と落ち合つ場所が書かれてあつた。

彩月のものじゃない、それは断言出来る。

この手紙に書かれている字は、彩月の字じゃない。だから差出人は別の人。

何者か分からぬが、あの騎士型ネウロイについて知つてゐる。

それに…“異世界の魔術師へ”、と書かれてあるから相手は俺の事も知つてゐる。

敵か味方か分からぬが……敵として見た方がいいだろう。物事は全て疑つて掛けられ、不明な者なら尚更疑え、それがお師匠様の教える一つ。

それに、この手紙の内容が眞実とも限らない。或いは罠かも知れない。

そんな中を、ミーナと一緒に連れて巻き込ませたくない。

今の俺はまだ魔術が使えない、しかし俺一人ならば何とかなる。危機的状況に陥つても一人の方が活路を見出しあやしく、行動します。

「……駄目です、行くのなら私も一緒に同行します。これは命令です」「ミーナ……悪い……」

ミーナを置いてバイクを走らせる。
幸い、手紙を取る時にミーナはバイクから降りてはいる。その隙に一気にアクセルを回した。

「あ、儀國さん！ 待ちな

」

後ろで何か言つてゐるが気にしない。一気にローマの街を目指して愛車を走らせた。

夜のローマの街を走る。目的地である、真実のロへ…。

「…か…」

真実のロのまえでバイクを停車。約束の時間まで後一分。

周りに誰かの気配は感じられない。この場にいるのは今現在は自分ただ一人。

少しづつ、時が迫つていく。そしてついに、約束の時間が訪れた。

五分経過

「誰も来ねえし…」

約束の時間が経過しても、誰も来る気配なし。
あれから更に五分待つてみたが、それでも手紙の送り主が現れるこ
とはなかつた。

「んだよ……ガセか！？けど、相手は俺の事知ってるみたいだしなあ
……」

何はともあれ、すっぽかされたのならこいつらの必要は無い。

それよりも心配すべきは明日だ。

仮にもミーナの命令を無視してしまった。明日隊長室に呼び出され
て、坂本の一人でシメられるかもしれない……。

基地へと向けてバイクを走らせる

、

「ん？」

真実の口から何か物音が聞こえた。
見ると、口から何かが出ている。近寄つて見るとそれは一通の封筒
だった。

封筒には“異世界の魔術師へ”、と書かれてある。

早速封筒を手に取り、中身を確認する。と、中から出でたのは一通の手紙と黒い汚れの付いたネックレスだった。

「このネックレス…」

十字架の形をしたネックレス、黒い汚れ…これは恐らく、血だ。いつたい誰の物なのか…。血で汚れたネックレスを見つめる

と、その時だった。

「なつ…！」

頭の中に何かが流れ込んできた。

何処かの研究所、そこに白衣を着た数人の男達と、一人の女性。姿からして博士、または研究者と見受けられる。

そして部屋の奥、寝台の上に眠っている一人の少女。眠っている…と語りよりも、まるでそれは死んでいる様に見えた。

一人の男性の研究者が、男達の中で唯一女性の研究者に話しかけて

いる。

内容までは聞こえない、何かを喋っているが… 肝心の声が聞こえない。

まるで台詞が入っていないアニメを見ているような気分だった。

男性研究者と女性研究者は激しく言い争っている、そんな風に見取られた。

と、その女性研究者が懐から一丁の拳銃を取り出す。その銃口が向けられている先は… 男性研究者の心臓。

驚愕の表情を浮かべる男性研究者、そして女性研究者は涙を流し何かを叫びながら… 手にした拳銃のトリガーを静かに引いた。

一発の銃声が鳴り響き、血が吹き出る。

心臓を貫いた銃弾はそのまま壁に着弾、そして貫かれた男性研究者は血を流しながら、ゆっくりとその場に崩れ落ちた…。

「……はっーー！」

ふと、我に返る。

「今のは…」のネックレスの残留思念が見せたのか?」

手にしていたネックレスをもう一度見る。

凶弾によつて倒れた男性研究者、その首元にはこのネックレスが映し出されていた。

ではやはり、このネックレスはあの男性研究者の？

しかし分からぬ、何故このネックレスが自分宛にと封筒の中に入つてゐるのか。

差出人はいつたい、俺に何を求めてゐる…？ 何を望んでゐる…？

「…とりあえず、帰るか」

時間はとつ々に10時を回り、11時にならうとしていた。

そろそろ寝ないと身体がヤバい。手紙は明日読むことにしよう。

ネックレスを封筒の中へ。そしてバイクを基地へと向けて走らせた。

Act17・迷走「弐」（後書き）

Act17「弐」でした！

今週最後の投稿となります、次話は2月初旬辺りに…東京から戻り次第投稿したいと思います。

修正等も、2月初旬…帰つてきてから行おうと思いますので、どうかご了承下さい

。

それでは皆様、2月初旬にまたお逢いしましょ～！

その時はまた、夢幻遊戯をよろしくお願ひいたします！！

すわつ～！

Act18・すれ違い「壱」（前書き）

一週間ぶり（？）の更新、Act18「壱」です。
タイトルは…半分適当です。

Act 1-8・すれ違い「壹」

？？？ Side

またあの夢を見た。

降り頻る雨、炎が燃え上がっている森と村。
無造作に転がっている沢山の死骸。その先…血に染まり扶桑刀を握
り締めた、死神の眼を宿した小さな男の子。

地獄絵図が広がる、眼を背けたくなるこの光景。
でも、今日も私の足掻きは虚しく終わる。

強制的に見せられるこの地獄、早く目が覚めてほしい…。ただそれ
だけを強く願つた。

けど、今日は夢に少し変化が起きた。

『おやおや、まさか…こんなチビガキがコイツ等を殺つたなんてな
あ…』

何処からか、女性の声が聞こえた。

それと同時に視線が勝手に声が聞こえた方へと向けられる。

森の中、そこから姿を見せた一人の女性。外観年齢は凡そ30代、腰には普通の扶桑刀より少し長め。スーツの上に扶桑の服装の一つである着物を羽織っている、独特な姿格好をしていた。

女性は栗色の長髪を靡かせながら、男の子を見据える。その顔は不敵。人を見下し、まるで見定めているかのような眼を向けている。

と、男の子は死神の眼を女性に向け、血に染まつた扶桑刀を構える。

『おつ、いつちよ前にやるつてか？面白い、お前の命私が貰つてやろつ！ 全力で掛かってきな！…ガキンチヨ…』

腰に差した扶桑刀を鞘から払う。それと同時に、男の子は女性に飛び掛った。

そこで眼が覚める。

眼を開けば見慣れた天井が視界に映し出される。

「また…あの夢」

ゆっくりと身体を起こし、窓へと寄る。

空はまだ暗い、アドリア海の上には綺麗な星空が広がっている。

…また、あの不思議な夢を見た。

あの地獄のような、惨劇が広がっていた光景。何故あの様な夢を見るのか…全く検討が付かない。

それに、今日は夢に変化があった。

森の中から現れた一人の女性、そして男の子と女性が扶桑刀を以つて闘おうとし…そこで夢から田が覚めた。

「あの男の子…」

ふと…、あの男の子について考える。

夢で見たあの男の子…正確にはあの死神の眼、に私は見覚えがある。

それはそつ遠い昔のことではない。

あの眼を、私はこの基地で見ている。

扶桑刀を携え神速を繰り出す…あの時の彼の眼。

一瞬にだけ、その時に見せる彼の眼と、私が夢で見た男の子の眼と

似ている……。

いや、全く同じだった。

何故彼があの男の子と同じ、死神の眼をしていたのか……。
或いは、あの夢に見た男の子が彼そのもの……幼少期の姿なのか。

……聞いてみよう、彼に。

どの道、今日は彼に聞かなければならないことがある。その時に一緒に聞けばいい。

そう結論を出し、私は再びベッドへと身体を横たわらせた。

今日の検査結果

身体機能・異常なし、性能83%

魔力回路・91%修復完了、修復作業終了まで約一時間。

「後一時間……か」

一息吐き、ベッドから腰を上げる。

よつやくここまで魔力回路が回復してくれた。後一時間で魔力回路の修復作業が終わる。

長かった…。「終焉の蒼」を使ってから、どれだけの時間が経つただろう。

後一時間で魔力回路が修復され、魔術が使えるようになる。魔術さえ使えれば此方のもの、あの騎士型ネウロイが現れたとしても満足に戦える…筈だ。

「さてと、後の問題は……」

机に置いた、一通の封筒に眼を向ける。

昨晩、ローマの真実の口にいつの間にか入れられていた代物。

宛先は今回も異世界の魔術師へ…、即ち自分だ。送り主は以前と不明。

問題はその手紙の内容。騎士型ネウロイの詳細については何も書かれていない、ただ目的と俺に対する行動についてだけ、そこに記されていた。

「…………」

…一つ、考えがあった。

それはあの騎士型ネウロイを斃す為でもあり、ウイッチ達を…この基地にいる全員を護る為である。

こうさえすれば、全員に危険が及ばない上に被害も最小限に抑えられる。

あの手紙にも書かれてあった通り、こうした方がいいと…自分の中では思っている。

それに、彩月の件もある。あの男がこの世界に何故いるのか、それはまだ分からない。

だが、自分がこの場にいることでもミーナ達にも被害が及ぶ。

あの男は対象者に対しては無慈悲を以つて殲滅する。その反面、誰よりも命を大切にしていた。

そんな男が、ミーナ達に危害を加えるとは思えないが…。

兎に角、実行に移すならば早めの方がいい。

時間が長引けば長引くだけ皆を危険な目に令わせる。

一応、その考えを実行する為の用意だけは昨晩の内にした。軍というシステムがよく分からぬが、とりあえず自分が知る方法でやってみる。

徹夜で仕上げたが故に内容はメチャクチャだが、形としては出来ているから問題ない。
あくまで、多分だが…。

「さてと、飯でも食いに行くか…」

これが、最後の飯になるのか…。

そんな事をふと思いながら、安藤たちがいる食堂へと足を運んだ。

朝食後、いつもの様に坂本と砂浜にて試合を行ひ。
これも今田で最後となる…だから今田は特別に試合ではなく、一つ手解きをしてやることにした。

すると意外そうな顔を浮かべていた。

急にどうした？ 熱もあるんじゃないか？…と、坂本に凄く心配された。

それぐらい坂本にしてみれば意外だったそうだ。

まあ以前までずっと頑なに教えることを拒否していたから、仕方ないと言えば仕方ない。

「で、何を教えてくれるんだ？」

眼を輝かせながら坂本が尋ねて来る。

まるで新しい玩具を買ってもらった子供みたいな目だ。

そんなに嬉しいのかと聞いたくなつたが、しないでおいた。
何か可愛かつたし。

「教えるのはあの居合のネタ晴らし…とでも言おつかな」

「ネタ晴らし？やはり魔術を使役しているのか？」

「いや、魔術を使つていないのは事実。問題はひとつやつて人の身だけで行えるかについてだが」

「失礼します！坂本少佐」

と、そこに安藤が現れる。

「どうかしたのか？」

「はつー!!——ナ中佐が儀國に用があるので至急来るよつこと」

「……そつか。有難う、直ぐに行く」

「ああ、早く行けよ儀國。何だか知らないが、今日の中佐……凄く機嫌が悪そつだつたぞ」

「ああ、やつぱりか……」

「昨晚のこと、やはり怒つてゐるらしい。
まあ平謝りすれば何とかなるだろつ。」

「ご苦労と坂本がいい、それに対し安藤は敬礼を返してハンガーの方へと向つて走つていつた。

「悪い坂本、ちょっとくら行つてくゐるわ」

「分かつた、では後で頼むぞ」

「ああ

ああ、その前に坂本」

不機嫌なミーナが待つて いる隊長室へと向ひ前、坂本に向 けて口を開いた。

坂本 side

今日大変珍しいことが起きた。

あの儀國が…面倒臭がり屋の儀國が、私に技を教えてくれるというではないか。

その言葉を聞いて、私は啞然としてしまった。

あの儀國が特別に教えてやると言つたからだ。思わず熱もあるのでは、と心配してしまつたが、本人は至つて普通だと答へて いる。

儀國の言つ通り。風邪を引いて いる様子もなければ、以前のよ うにふざけた態度も嘘を言つて いる様子は見られない。本氣で…私に技を教えてくれようとしている。

何故、急にそんな事を言い出したのかは分からぬ。だが、儀國から初めて技を教えてもらえる。その事が私はとても嬉

しかつた。

そして教えてもらえる技はあるの居合いのネタ晴らし、らしい。
どうやって魔術の行使もなしに人の身のみで出来るのか、それを教えてくれるそうだ。

抜いた瞬間さえも見えない、正に神速によつて繰り出される儀國の居合い。

あの技を習得できれば、今後ネウロイと戦う時に大いに役に立つ。
岩すらも真つ一つに切り裂く程の威力を持つと叫つ富藤の証言もある、絶対に習得しなければ……。

と、そこに整備兵がやつてきた。

ミーナが儀國を呼んでいるとのこと。ミーナから呼ばれているのなら仕方が無い、訓練よりもそちらを優先しなければならない。

そして儀國がミーナの待つ執務室へ行こうとして

、

「ああ、その前に坂本

不意に、私に声を掛けた。

「どうした？」

「…」れを教えるのは一回きり、そしてその後はお前次第。恐怖に挑むも挑まないのも、全て…。それだけは忘れるな

「う、うむ…」

それだけ言うと、儀國は走つて砂浜を後にした。

「儀國…」

あの時の儀國の眼、とても真剣な眼をしていた。と、同時に寂しさを感じた。

何故あの様な眼をしたのか…全く分からぬ。

ただこの時、私は胸騒ぎがしていた。そう、まるで儀國が遠くに行つてしまいそうな…そんな感じがした。

儀國はこの基地に、この部隊に必要な人間だ。

それは戦力的な意味でもあり、人間的な意味でもある。儀國 雅史
と言つ男は…欠かしてはならない。

「お前は……何処にも行かんだろう? 儀國……」

既に立ち去った儀國に向けて、私はポツリと呟く様に尋ねた。

Act 18・すれ違い「恋」（後書き）

Act18「壱」でした。

さて、今週から一週間に一話の更新とさせて頂きます。
詳しくは活動報告の方をご覧下さい。

すわつ！
！

Act 18 「彼」 です。
なんか微妙に感じ…… ですか？

Act 18 「彼」 です。
なんか微妙に感じ…… ですか？

Act 1-8・すれ違い「武」

ミーナからの伝令を伝えにきた安藤。

来たか…、ポケットに入れたアレを取り出しながら執務室へと急いで向う。

「ウイース

一応ノックをして、執務室のドアを開ける。

「来てくれたわね」

机に座ったミーナが出迎えてくれる。

…今のところ、ブラックスマイルも浮かべない。いつも優しい笑みを浮かべている。

本当に不機嫌なのか…それとも隠しているのか。

とりあえず、今は安心していいだらう。問題はここからミーナがどうなるか、だ…。

「そりゃ勿論、中佐からの命令ですか…で、何の用?」

「貴方に確認したい」とあるの

「確認したい」と?

「まあ、一つ目、魔力回路の具合は?」

「それなら後一時間程度で治る筈だ」

「ここは正直に答える。別に隠しても嘘を吐いても何のメリットもない。

そう答えると、ミーナは安堵の笑みを浮かべた。

「そう、よかつたわ…。そして二つ目、昨晩…あれから何があったのかしら?..」

ここでブラックスマイルを浮かべてくる。さつと答えると、ブラックスマイルが返答を急がしてくれる。

正直言つて、このブラックスマイルだけは何時まで経っても慣れそうにない。

いや、きっと永遠に慣れはしないだろう…。

「……これが眞実の口の中に入つてただけだ」

昨晩真実の口についての間にか入れられていた一通の封筒。それを机の上に置く。

隠していても仕方が無い、どの道提示しなければこれから起こす行動について納得してもらえない。

封筒を机の上に置くと、リーナは驚愕の表情を浮かべた。

「う、これは……ッ！？」

手紙を取り出し、眼を通した途端リーナは驚愕の表情を浮かべた。そこに続けてアレを机の上に置く。

「つーわけで、ハイこれ

「これは……？」

「辞表

会社を辞める時でも何にしても、辞表を書かなければならぬ。

映画やドラマでしか見たことがないからよく分からなかつたが、と

りあえず辞めさせてもう一つこの内容の手紙と一緒に封筒を二枚に渡した。

「今日付けで、俺はこの基地を…以前に軍そのものを抜けさせてもらひ

「え？ ！？」

「言葉通りの意味だ。俺は、今日でこのを抜ける」

「な、何を言つてゐるの…？抜ける？…」

「その手紙に書かれてある」とは…まあ本当なんだろうな。
現に、坂本達が交戦したあの騎士型ネウロイも、俺の名前を出した
ら反応したんだろう？」

騎士型ネウロイの目的、それは俺の命を狙つてゐるということ。
手紙に書かれてあることは、恐らくは真実。以前の坂本達の話を照
らし合わせれば、尚更真実味が増す。

詳しく述べてない、だが…理由さえ分かればそれで充分。
だからこそ考へた、ここを抜けることを。

自分がこの基地からいなくなることで、周囲に被害が及ぶ心配は無い。

あの騎士型ネウロイ達の相手は…自分一人ですればいいことだ。

狙われているのは俺自身なのだから、俺が相手をするといつのが道理。

「と、言つわけだ。納得してくれ」

「…、こんな事認められる筈がないでしょ！
何故貴方が一人犠牲になる必要があるの！？」

ミーナは認めようとしない。

まあ、これも想定の範囲内のこと。

「簡単な話だ。あいつ等は、俺一人で殺る」

「ダメです！ 縱然貴方が強くても…あの騎士型ネウロイは一機もいるのよ…？
それを…貴方は一人で闘つつもり…？」

「ミーナ…てめつ、いい加減にしろよッ…！」

「ジー。」

「ここからだ。ここからがミーナを認めさせむ為に、ここで止むければならない。」

例え相手が傷きりとも、嫌われぬとも、全てほこにこする全員を護る為に……。

「アイツ等の狙いは俺、どんな理由でかは知らねえけどな。だからこそ、俺がこの基地を離れた方がいいんだろー。」

「儀國さん……。」

「俺がここにいることでお前等に被害が及ぶ。だからこそ、俺が離れることでその危険性を回避出来るんだぞ！？なんでそれが分からねえんだよ、このバカ！」

よくよく考えれば、我ながら恐ろじることをしてくるものだ。

周りに人がいたら、確実に俺は軍法会議に掛けられるだろう。仮にも上官に対し怒鳴り、拳句バカと言っている。

処刑されても可笑しくないこの行動。

けれども、これもミーナ達のことを思つてのことだ。今は…心を鬼にしよう。

「十の内、一である俺が抜ければ九のお前達が無事でいられるんだ。余計な被害が出なくなるんだぞ。隊長なら、それぐらい理解しろ!」

「だ、だからと言つて! 貴方一人が全て背負つ必要は、何処にも

「

「まだ分からねえかよ、ミーナ……お前等、じゃ、アイツを斃せねえんだよ!」

「ツー!」

「ここのと事実を、現実をミーナに突き付ける。

ミーナ達では、あの騎士型ネウロイを斃す事は絶対に出来ない。

理由も勿論ある。

「坂本達が闘つた時、相手が一機に対して六人で何とかの状態だつたんだぞ!?

現に坂本のヤツも言つていただろ!?

そんなヤツが後一機いる、いや…もつといふかも知れない。

そいつ等が一斉に攻めてきた時、お前達はどう対処するつもりだ!?

？」

「そ、それは……」

「倍の数用意するか？無理だろ、それに…倍の数を用意したことで勝てるとも限らない。
いや…絶対に勝てないだろう、それぐらいあのネウロイは強い。
だからこそ俺一人で充分だ。俺なら…あいつ等をぶっ殺せる、確實にな」

ミーナは黙つて聞いている。否、突き付けられた現実に対しショックを受けている。
俺の言つていることもちゃんと聞き取れているやう…。

「…お前らはいつもの様に普通のネウロイを斃していればいい。
だが、アソツは…あの騎士型ネウロイだけは俺が必ず斃す。
俺にしか、あいつ等は…斃せない」

そろそろ引ひつ、長居は無用だ。

ここまで言つたら、ミーナも流石に納得する筈だ。仮にもミーナは隊長だ、今はこんな状態だがすぐに冷静な判断が下せるだろう。

「…あの時の約束は必ず護る。だからこそだ、理解してくれ…」

今だショックを受けている様子のミーナを置いて、隊長室を後にしてた。

「…ふう。悪いな、ミーナ…」

ドアを閉めて一息、そしてミーナに對し頭くみへ謝った後自室へと向う。

「…あ、儀國さん…」

「ん? 富藤…?」

そこには、富藤が立っていた。
表情からして、隊長室でのやり取りを聞いていたようだ。

「…少し、場所を変えるか」

たまま、本当にたまたま聞いてしまった。

儀國さんに用があつて、それで坂本さんに教えてもらつて隊長室に向つていた時だった。

隊長室から聞こえてきたのは、儀國さんの怒鳴り声。

今までに聞いたことがないぐらい、怒りを孕んだ大きな声に私はビックリしてしまった。

気になつた私は、悪いとは思いつつもドアに耳を立てて会話の様子を聞いていた。

そこで、信じられない言葉を聞いてしまつた。

儀國さんが……ここから、居なくなる?

会話の内容、それは儀國さんが基地から出て行つてあの騎士型ネウロイ達を一人で相手にするという内容だつた。

自分が狙いならば、ここにも被害が及ぶ。だから自分が出て行くことで基地へと被害を回避させ、自分が全て一人で相手にすればいい、そつ儀國さんは言つていた。

私は信じられなかつた。

あの優しい儀國さんがあそこまで怒鳴り声を挙げていたこともそつだけど……。

私の中では、儀國さんがここから居なくなるという事の方が一番信じられなかつた。

そんな時、儀國さんが隊長室から出てきた。

ドアを閉めた後、凄く悲しそうな…後悔している顔を浮かべて、ミーナ中佐に謝つていた。

そこで私に気付いて、今は屋上に居る。

場所を変えようと儀國さんが言い、屋上へと移動した。

「で…盗み聞きか？よくないぞ～宮藤イ…」

「そ、そんな事より、どういう事なんですか！？」
儀國さんが…ここを出て行くつて！」

「聞いていたなら分かるだろ？あの言葉の通りだ

「一人で闘つつもりですか！？」

「そうだ、俺一人で闘つ

儀國さんが答える。その顔にはいつもみたいにふざけている様子はなかつた。

真剣な眼、真剣な表情で、儀國さんは言つている。

「危ないです！ それに、儀國さん一人じゃ

「心配すんなよ、後ちょっとで魔力回路の修復作業も終わる。そうすればこっちのもん…次出会つたら速攻で片付けてやる

「私達じゃ…ダメなんですか？」

私は儀國さんに尋ねた。

私達じゃ、あの騎士型ネウロトイを斃すことは出来ない…。

ミーナ中佐に言つていた、儀國さんとのあの言葉が頭から離れない。

確かに、あの騎士型ネウロトイがとても強いのは私だって…皆だって分かっている。

だけど、だからとつて儀國さん一人に全てを任せていいい筈がない。確かに、私は儀國さんみたいに強くないです…。でも私にも…私達にもきっと、出来ることがあります！」

弱いけど、何か必ず出来ることがある。

だから一緒に戦わせて欲しい、何処にも行かないでほしい。

儀國さんがこの基地から居なくなるなんて… 考えたくない。
寂しいし、悲しい。お兄ちゃんつて慕つてゐるサー二ヤちゃんだつて
絶対に悲しむ。

「富藤… 気持ちだけは受け取つておく。だがな、気持ちや意氣込み
だけじやどつにもならないんだよ、かつての俺のよつとな…」

「えつ？ それつて…」

その時、基地に警報音が鳴り響いた。

「け、警報…？」

「襲撃… か、どうやら敵さんのお出ましのよつだな。

行つて来い富藤、それと他のヤシ等にも伝えておいてくれ。騎士型
ネウロイが来たら、手を出さず基地まで… 僕の面のところまで通
せつてな

そう言つて儀國さんは屋上から出て行つた。

「儀國さん……ツー」

本当なら儀國さんを追い掛けで、出て行かないでと引き止めたい。けど、ネウロイが現れたのなら、私はやるべき事をしなくちゃならない。

このまま儀國さんを追い掛けたら、優先順位を考えろつて絶対に怒られる。だから早くネウロイをやつつけて、基地に戻つてもう一度儀國さんを説得しよう。

私は急いでハンガーへと向つた。

Act 18・すれ違い「弐」（後書き）

Act 18「弐」でした。

さてさて、今回いじりで少しお知らせを…。

今彩月編（今命名）ですが…彩月編以降より、少し文章の書き方を
変えると思します。

と書つのも、新作執筆してゐに辺り…「こつちの方が書くやすいし
見栄えがいい?」と思つてしまつたわけです。

まあまだ実用化するかは分かりませんが…。

もし実用化した場合、今作完結後彩月編終了までの話を一気に大修
正する可能性もあります。

その時はまたよろしくお願ひ致します。

以上、夢幻遊戯でした。

すわつ！

Act19・氷魔再来「壱」（前書き）

Act19「壱」です。

宮藤 side

ネウロイが現れた。この基地へと真っ直ぐ向かつて来ているのだと。

坂本さんの魔眼が見ると、大型のネウロイみたい。

騎士型ネウロイじゃなくて、とつあえずよかつた。

私はリーネちゃん、坂本少佐、シャーリーさん、ルッキーちゃん、ペリー・ヌさん、バルクホルンさん、ハルトマンさん…と一緒に撃墜に向つた。

ネウロイとの距離を縮めている間、私は隊長室でミーナ中佐と儀國さんとの会話の内容、そして儀國さんがこの基地から出て行こうとしているという事を壁間に話した。

「何だと…？儀國は…確かにそう言つたのか…？」

バルクホルンさんが怒った様子で尋ねてきた。納得がいかない、そんな顔をしている。

「は、はい…。俺一人この基地から出て行けば、私達を危険な目に合わせることはないって、そう…言つてました。説得したんですけど、儀國さんは…」

「儀國…ちょっと勝手すぎるんじゃないかなあ…」

バルクホルンさんの隣を飛んでいたハルトマンさんも同じく、怒った顔を浮かべていた。

「なるほど…道理で可笑しいと思つたんだ。急に技を教えると言つたのは、そういうことか…！儀國のヤツめ…！」

坂本さんもとても怒つていた。

皆、怒つてゐる。儀國さんがこの基地から出て行つたことに対する、たつた一人で闘おうとしていること。

「全くあの人は…本当に身勝手過ぎますわ…！」

ペリー・ヌさんも呆れた顔を浮かべてゐるけど、声は怒つてゐる。

最初の頃は儀國さんを凄く敵視してたけど、最近は仲良く話していのを見かける。

それを囁つと、ペニーヌさんは頑なに拒否してゐるけれど……。

でも、儀國さんと喋つてゐるペニーヌさん、とても楽しそうでいるのを知つてゐる。

リーネちゃんや坂本さんだって、皆知つてゐる。

「あたしはまだ魔力回路開いてもいらっしゃないぞ、儀國」

「雅史の話といつても面白このこと、どうかに行つちやうなんて寂しいもん！」

シャーリーさんとルックキーちゃんが囁く。

シャーリーさんもルックキーちゃんも、儀國さんは大の仲良し。親友、そんな感じがする。でも、休日の日からシャーリーさんと儀國さんの感じが変わつた気がする。

いつもなら友達と話すようにしているシャーリーさんだったのこの日から少し照れ臭そうに話している。
何があつたんだろう……シャーリーさんに囁いても教えてくれないし。ルックキーちゃんも知らないつて囁いてた。

ルツキー＝ひやんはよく儀國さんに遊んでもらつてゐる。儀國さんの世界の話を聞くことが、ルツキー＝ひやんは面白いから好きだつて言つてた。

「芳佳ちゃん、私も一緒に儀國さんに説得する。

一緒に説得したら、きっと儀國さんも考え方改めてくれる筈だよ」

「リーネちゃん…、うん…そうだね！」

皆、私と同じ気持ちだつた。それを見て安心した。私一人じや、きっと儀國さんを引き止められない。でも皆で引き止めれば…きっと儀國さんも考え方改めてくれる。

「ならば、早くネウロイを斃して基地に戻るとしよう。…見えたぞ！」

坂本さんが叫ぶ。

前方に視線を戻す。そこには一機の大型ネウロイがゆっくりと飛来してゐるが、肉眼でも捉えられた。

「各自戦闘態勢！素早く撃墜するぞ！」

「…「了解！」」

早くネウロイをやつつけて、基地に戻らないと…。

皆で儀國さんを説得して、儀國さんを引き止めよつーーー！

宮藤達がネウロイを撃墜しに出撃した。

相手があの騎士型ネウロイじやないことだけを祈つてゐる。

ああは言ったものの、絶対に宮藤達は約束を護らないだろう。
何があつてもあの場で絶対に撃墜する、みたいな事を考えて行動するのが眼に見えてゐる。

「まあ、いいか。とりあえず荷造りしつくつヒ

整備兵の服を脱ぎ捨て、私服に着替える。今日は気分でワイン色のレザージャケットを羽織つた。そして他の衣類は全て鞄の中へ、シヤーリーと共にローマの町へと買い物に出た際に購入した手頃のいいリュック。

それに必要なもの全て詰め込み、そして肩へと担ぐ。

そして忘れてはいけないもの、それはあの砂浜で見つけ坂本の手に
より手渡された扶桑刀。

何かあつてからでは遅い。今は…今だけは封印を解こう。

全てはあの騎士型ネウロイを倒す為、そしてミーナ達を護る為…。

「あとで…行くか」

部屋を出る。と、直ぐにHイラと会った。

呼吸が乱れ、肩で息をしている…全力疾走した後といつが伺え
る。

「ハア…ハア…ぎ、儀國!…よかつた、ちやんといるな…」

俺を見た途端、Hイラの表情は安堵の笑みを浮かべた。

「Hイラ、お前何をそんなに慌てて

「

「い、いや…変な夢見ちゃつてさ…」

「夢?」

「『お、儀國が…』の基地から醒なくなる夢だった」

「…シ」

タイミングが悪すぎる。何故エイラはそんな夢を見たんだ？

エイラの固有魔法「未来予知」は、夢で未来を見る事も可能なのか？

いずれにせよ、その夢の内容はあっていい。現にこれから、口を出て行こうとしているのだから。

「つて… なんで… お前…」

安堵の笑みから一変、今の姿格好を見て驚愕…信じられないと言いたげな表情へと変わる。

「お前… そんな格好して、何処に行くんだ？」

「…エイラ、夢で見た内容は事実だ。俺は今日、『』から出て行く

事実をエイラに伝えた。

今日は嫌な夢を見た…。

夢の内容は、テラスで皆とお茶会をしているというもの。リーネのお手製のスコーンやお菓子があつて、美味しい紅茶がある。

皆楽しそうに話しながら、ネウロイとの戦闘の事を忘れて休息の一時を過ごしている。

だけど、その中でたつた一人の姿が見えなかつた。

私とサーニャのテーブル、そこにいる筈のもう一人の姿がない。そう、儀國の姿がなかつた。

儀國は何処に行つたんだろう…、辺りを見回していると儀國を見つけた。

けど、何故か儀國は私服を纏つている。そして肩には大きな鞄を提げていた。

その格好はまるで旅に出るよつた…ここから出て行くよつた、そんな風に感じ取れた。

『…元氣でやれよ？』

そう、儀國は言つてテラスから静かに出て行く。その時の儀國は、とても悲しそうな笑みを浮かべていた。

私は慌てて席を立つた。何でそんな事をいきなり言い出すのか、私は理解できなかつた。

けど、ここで追い掛けないと…一度と儀國と逢えない、そんな気がした。

テラスを飛び出し、儀國の後を追い掛ける。
息を切らしながら、胸が苦しくなるのを我慢しながら…必死に儀國を追い掛ける。

そして基地の外へと飛び出す。

『儀國…！…』

私は儀國の名前を叫んだ。

遠くに見える儀國の後姿。ローマの街へと続く道を、儀國は歩いて

いた。

歩いているだけなのに…その距離は私から既に1km以上も離れている。

私もその後を追いかけて走った。

けれども距離は縮まるどころかドンドン広がっていく。

私は何度も儀國の名前を叫んだ。

しかし、儀國はその私の叫びに振り返ることなく歩き続け、やがては完全に姿が見えなくなつた。

そこで目が覚める。

慌てて飛び起きて、直ぐに周りを見回した。

見慣れた光景が広がる、私の部屋。

私の隣には、夜間哨戒任務から明けで帰ってきたサーニャがグッスリと眠つている。

とりあえず、私は安堵の息を漏らした。

けど、同時に言いつよいのない不安が押し寄せてくる。

何であんな夢を見たんだろう。儀國がこの基地から出て行く夢、実際にそんなことありえないのに…何で？

そう思った時、私は服を着替えていた。

気になつて仕方がなかつた。絶対にありえない、そうに決まつてゐるのに不安がドンドン大きくなつていいく。

着替え終わつた後私は急いで儀國の部屋へと向つた。

そして儀國はいた。部屋に着いたと同時にドアが開いて、儀國が出てきた。

なんだ、やつぱりやんといふじやないか…。

私は安堵の息を漏らした。けど、儀國の姿を見て私の中にあつた不安は急激に膨れ上がつた。

部屋から出てきた儀國の姿、それはあの時夢で見た姿と全く同じだつたから。

「お前…そんな格好して、何処に行くんだ?」

私は恐る恐る尋ねた。

そんな筈は無い、きっと僕のせいだ。

儀國はまた街にでも出掛けん、それだけなんだ。

そつ心の中でも、何度も復唱しながら…。

「…ハイラ、夢で見た内容は事実だ。俺は今日、これから出て行く

儀國は静かに言った。

その顔には嘘の雰囲気は出でていない、儀國は…本氣で言つていた。

Act19・氷魔再来「壱」〔壱〕（後書き）

Act19「壱」でした。

いやあ、なんか低クオリティな感じです……つていつもでしたね（悲）。

そんなわけで、失礼します。

すわっ！！

えつと…夢幻遊戯です。

既に活動報告にて申し上げました通り、『ストライクウェイツチーズ
私、恋しちゃつてます』を全面修正致します。

よつて、此方はこれで連載終了という形で終わらせて頂きます。
お気に入り登録して下さつてている方々や、感想を下さつた方々、本
当に申し訳ありません。

修正verで前作となるこの作品と何処を変更しますかと言ひと…。

壱・文章。

弐・儀國の能力。

参・新規シナリオの追加などなど。

前作よりボリュームアップ…かどうかは言い切れる自信はありませ
んが、兎に角頑張つて執筆していきます！

修正版『ストライクウェイツチーズ 夢幻協奏曲』をどうか、応
援の方よろしくお願ひ致します。

それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1232p/>

ストライクウィッチーズ 私、恋しちゃってます

2011年3月5日00時35分発行